筑波大学審査学位論文（博士）

中国における少数民族文化活動の展開に関する研究

―モンゴル族にみる民族文化と国民統合―

筑波大学大学院　人間総合科学研究科
博士後期課程　教育基礎学専攻（生涯学習・社会教育学）

紅桂蘭

目次

序章..... 1

第１節　研究の目的..... 1

第２節　中国社会特有の脈絡における「民族」の形成..... 3

第３節　先行研究の検討..... 11

第４節　本研究の課題と方法..... 17

第一章　中国における少数民族文化政策の展開..... 27

第１節　新中国成立期における少数民族文化政策（1949 年～1965 年）..... 27

第２節　文化大革命期における少数民族文化政策（1966 年～1976 年）..... 34

第３節　改革開放時期における少数民族文化政策（1977 年～2001 年）..... 35

第４節　グローバル化時代における少数民族文化政策（2002 年～現在）..... 39

第二章　民族文化活動の展開―内モンゴルのウランムチを事例に―..... 50

第１節　ウランムチの基本状況と時期区分..... 50

第２節　ウランムチの草創期（1957 年～1965 年）..... 52

第３節　ウランムチの停止期（1966 年～1976 年）..... 62

第４節　ウランムチの回復と改革期（1977 年～2001 年）..... 64

第５節　ウランムチのブランド化期（2002 年～現在）..... 68

第６節　ウランムチの活動の特徴..... 72

第三章　モンゴル族のアンダイ文化の新たな創造の経緯と普及の過程..... 77

第１節　モンゴル族のアンダイ文化の多様化への着目..... 77

第２節　伝統アンダイの衰退化に伴う新アンダイの創造..... 80

第３節　クロン旗におけるアンダイ文化の推進..... 86

第４節　地域住民のアンダイ文化に対する意識―アンケート調査分析―..... 93

第四章　民族学校にアンダイ体操の導入

―クロン旗の民族学校におけるアンケート調査分析―..... 100

第１節　民族学校における文化継承の状況..... 100

第２節　アンダイ体操を学校教育に導入する過程 102
第３節　児童・生徒のアンダイ文化に対する認識―アンケート調査分析― 104
第五章　中華民族多元一体構造の中の少数民族文化の継承と教育的課題 115
第１節　国民統合の手段としての民族文化 115
第２節　民族文化の創造による文化継承と教育的課題 118
第３節　中華民族多元一体構造の中の少数民族 126
終章　本研究のまとめと今後の課題 132
第１節　本研究のまとめ 132
第２節　今後の課題 137

序章

第１節 研究の目的

本研究は、中国における民族政策の展開を辿りながら、多民族国家を統合する原理として少数民族の文化（以下、民族文化）がいかなる作用を果たしているかを検討することを目的としている。つまり民族文化は、一方では国民統合を図る手段として政治的に振興政策がとられながら、他方では固有の民族文化を保存・継承しようとする民族意識が涵養されることで、中国の少数民族は国家意識と民族意識の両方を内在させた存在としてあることを明らかにしようとするものである。多民族国家である中国は、建国以来、少数民族の諸権利を擁護する政策をとってきたが、大多数を占める漢民族の同化圧力に対してエスニック・マイノリティの民族意識は揺らぎをみせてきた。そのため一部の少数民族は、一方では漢民族への抵抗として暴力的な反政府活動や独立運動を展開し、また他方では共産党政府への帰順により民族統制の積極的な担い手となっている。しかしその狭間にある少数民族出自の中国人は、ほとんどが自らを少数民族でありながら中国人でもあることに違和なく誇りを抱いていると思われる。本研究では、モンゴル族に焦点を当てながら、中国人としての国民意識とモンゴル族として民族意識の両者が、モンゴル文化をめぐってどのように形成され、政治的、社会的な背景を踏まえながら、いかなる文化政策や文化活動が展開されてきたのかを考察する。

ところで中国は、漢族と 55 の少数民族から構成される多民族国家である。「民族」という用語は、nation の訳語として日本で造語されたものが清朝末期の中国に伝播される。中華民国期には孫文が三民主義の中の１つに「民族主義」を位置づけるなどして定着していく。1924 年 1 月の「中国国民党第一次全国代表宣言」には、大多数の漢民族以外を指す呼称として「少数民族」が初めて公式に使用された。つまり民族という属性で国民を類型化しながら、マイノリティである少数民族を融和あるいは抑圧などの手段を講じて国民として統合を図る政策的対象として眼差された意味において、「少数民族」とはすぐれて近代的な概念だといえる。これ以降、1949 年に建国した中華人民共和国（以下、中国）でも、多民族国家を前提とした国家建設が進められる。中国共産党は「平等、団結、共同発展」という原則に基づいて民族政策を実行し、1950 年代になると「民族識別」という方法によって 56 の民族へと再編したのである。こうした民族識別工作は、少数民族に中国への帰属意識を植え付けるための国民統合の重要な方法であった。つまり、本来は異なる文化的背景を持つ無数の民を漢族と 55 の少数民族へと還元させ、一方では公定された民族意識を政策

的に強化しながら、同時に国家の構成員としての国民意識を醸成するという多民族国家の形成が目指されたのである。そして、この国民と民族の意識を接続させる鍵が「民族文化」であり、とくにマイノリティである少数民族にとって、体制の中における民族文化のあり様によって、自らの帰属意識が規定されてきたといえる。そのため、中国の民族政策において民族文化は常に管理・統制の対象とされてきた。しかし中国の民族政策は必ずしも一貫したものではなく、民族文化の在り方についても、その時々の政治的、経済的な背景に影響されながら変動している。

中国における民族には、もう一つ国民統合の促進、統一した民族意識を高めるための操作概念として「中華民族」論がある。「中華民族」という概念を初めて理論化したのは、社会人類学者の費孝通である。費は 1988 年に「中華民族の多元一体構造」論を提起した。これは、費自身が国民統合のための政治的概念だというように、「中華」[1]という歴史的に成立してきた思想を根拠に「中華民族」を操作概念として提示し、中国共産党による国家統治の正当性に論拠を与えるものとして定説化されている[2]。これによると、中華民族とは 56 の民族を包括した民族実体であり、単なる 56 の民族の総称ではないと指摘する[3]。多元一体構造とは、56 民族が基層を構成し、その高層に包括概念としての中華民族が位置づけられる。中国ではこれに依拠しながら、中華文化とは漢族の作り上げてきた漢文化とそれぞれの少数民族文化、および両者の密接な関係と相互作用や相互浸透のなかで形成された総体として捉えられている。また建国後から現在までの各時期において、様々なスローガンで民族文化政策が推進されたが、そこでは一貫して少数民族も中華民族の一員として国家への求心力を強化することが目指されてきた。例えば、近年の中国は文化強国をめざす国家戦略を推進しているが、とりわけ少数民族の文化を「中華民族の優秀文化」として宣伝・称賛し、民族意識を刺激しながらも、国民文化へと還元しようとしている。つまり「中華」思想を利用しながら民族性を国家と一体化させる政策が展開されているといえる。

以上のように、本研究は内モンゴル自治区（以下、内モンゴル）のモンゴル族を取り上げ、中国人でありモンゴル族であるという意識が、民族文化を通じてどのように形成されているのかについて考察を行う。分析の枠組みとして、費孝通の多元一体構造論を参照しながら「中華民族」という操作概念と民族文化の関係性を踏まえたうえで分析を進める。その際、国民統合としての「政治・政策の宣伝」と少数民族としての「民族文化の継承・普及」という役割に着目し、具体的にはウランムチ芸術団体[4]とモンゴル族の伝統文化である「アンダイ」[5]文化を取り上げながら、モンゴル族の文化活動の実態について検討を行う。

第２節　中国社会特有の脈絡における「民族」の形成

ここで、まず国家と民族、漢族と少数民族の関係を理解するため、中国における「民族」が中国の特殊な歴史的、政治的、社会的な文脈の中で創出されてきたことを論じる。その上で本研究における民族文化の概念を提示したい。

１．中国における「民族」の創出の過程と「民族」をめぐる議論

（１）中国における「民族」とは

近現代の国際関係が確立する以前、中国と東アジアには「華夷秩序」という統治体系が存在していた[6]。帝国体制の中国は「華夷秩序」に基づく中華世界の中で、国家的統合を維持していた[7]。中華世界とは、一元的な文化としての「中華」によって成立する空間で、中華の中心には最も高い「文（=徳）」を有するがゆえに天命によって天子の地位を与えられた皇帝が存在するという世界観である。そしてその徳の及ぶ範囲が皇帝の治める範囲であった。その周縁にはまだ「文」の及ばない（「文化」されていない）「夷狄」の領域である「化外」（蛮夷戎荻と呼ばれる異民族）が存在した（図０－1）。その「文」とは礼教であり、それを媒介する漢字・漢文で著された四書五経などの教養とされた[8]。こうして中華世界は高い徳を有する皇帝を中心に、徳をもって「文」を身に付けさせる（「文化」する）ことで周囲を「華」に編入させ、王朝体制を維持してきたとされる。

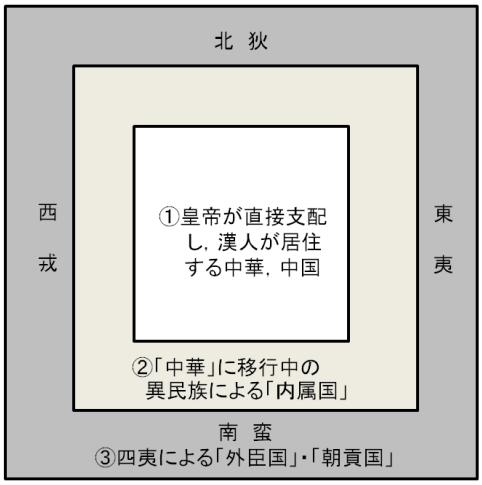

図0-1.「漢人」王朝による「多重型」帝国システム（漢朝を例に）
（出典：王柯『多民族国家中国』岩波書店、2009年、p.38）

周星は「華」と「夷」の区別は、文明の核心（中華）からの物理的な距離による相対的なもので、「中華」の民と周辺の「蛮夷」の間に明確な境界が存在しているわけではなく、単に文化的な差異が存在するだけであったと言う[9]。また「華」は文明・開化を意味し、中華文化を受容しさえすれば、いかなる民族集団でもこの文明の中へと融合でき、このような世界体系の中で核心として凝集力を有していたのが漢族であったと論じる[10]。また漢民族でなくても四書五経を学んで漢字と礼教を身につけ、科挙の試験に及第して出仕するようになる過程で、「中華」の一員としての自己意識を育み、他者からもそのように見なされる存在となっていくこともあった[11]。したがって、「夷」は「文」を体得することによって「華」

に編入されうるのであり、この「文化」の浸透のプロセスによって中華世界は拡大し、皇帝を中心とする中華帝国としての統合を維持してきた[12]。

19 世紀になると、西洋社会との出会い、ウェスタン・インパクトをきっかけに中華帝国は「近代」に入る。近代の国家システムは、領土、国民、主権の三要素で構成される国民国家の体制を基礎とし、華夷秩序に基づく中華思想と激しく衝突することとなった。非西洋諸国が外圧によって開国を迫られ統治体制が刷新されたように、中華帝国システムも崩壊するほかなかった[13]。19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、清朝の衰弱や外国列強による侵略を受けて、多くの知識人は中国における近代国家建設の方法を考え始めた[14]。「中華」が再び政治的スローガンになるのは、清末の孫中山（孫文）が代表的で存在である[15]。1895 年 1 月に孫文は香港で「興中会」を設立し、その入会宣誓文で「韃虜（だつりょ）を駆除し、中華を回復し、合衆政府を創立する」ことを掲げた[16]。ここでいう「韃虜」とは、清朝を担った「満州人」をはじめとした「漢人」以外の「種族」を指す概念として用いられ、「中華を回復」とは「漢人」による「中華世界」の回復を意味していた。その後、1902 年に梁啓超が「中華民族」概念を提起し[17]、「中華民族」を国家の担い手としての「国民」概念に比定した。「民族」という用語は古代漢語には見られず、「人」「種人」「族類」「部落〔氏族〕」「種落」という語で示されていた[18]。「民族」という語彙は、梁啓超著『東籍月旦』で英語の nation の日本語訳を転用して中国語に用いたのが始まりといわれる[19]。

1912 年に中華民国が成立し、同年に孫文が、漢、満、蒙、回、蔵の「五族共和」の構想を打ち出した。孫文は「中華民国臨時大総統宣言書」において「国家の本は人民にある。漢、満、蒙、回、蔵の諸地方を合わせて一国とし、漢、満、蒙、回、蔵諸族を合わせて一つとする―これが民族の統一というものである」[20]と述べた。「五族共和」の本質は、五族の各エスニック集団が平等の立場で共和政治を支えるというよりも、むしろ漢族以外の四族を漢族に同化させて単一中華民族を創出し、統一共和国家を作ることを目的にしていたとされる[21]。しかし、1924 年の「中国国民党第一次全国代表宣言」では、各民族の一律平等を唱えるに至った。

王柯は、梁啓超ら革命派が清朝末期に初めて打ち出した「中華」と中華民国の成立において孫文が掲げた「中華」は違うと指摘する。清朝末期における「中華」は「滅満興漢」のスローガンに表わされたように、清朝を打ち立てた満州族を中国から駆除し、漢族によって単独の民族国家を建設する正統性を訴えるシンボルであった。しかし中華民国が樹立されてからの「中華」は、満州族をはじめ「五族」を団結させた融和のシンボルである。

排除のための「中華」と融和のための「中華」は、いずれも国民国家理論に基づく一民族一国家の理念に依拠している点では本質的に同じであったと指摘する[22]。

その後、「五族共和」の思想状況に変化をもたらしたのは、1931 年に日本が東北地方に傀儡の満州国を建国した満州事変である。これに対して、中国国内の学会では「我々とはなにか」、「民族とはなにか」という問いが発せられ、愛国的知識人の間で「民族」とは「種族ではなく、共通の意識をもつもの」という定義が与えられたと言う[23]。こうした認識が知識人の間で共有されていく中で、あるべき中国の範囲内に住むものは、たとえその人間が種族的、言語的、文化的に異なる誰であっても、共通して抗日意識をもつ「中華民族」であるという回答が引き出されることになる[24]。したがって、松本ますみが論じるように、中国に住むさまざまな民が「我々」は一体であり、「中華民族」であるというアイデンティティを持ち、「中国（中華）ナショナリズム」をもつように促される国民統合の理論が、抗日戦争を通じて醸成され、結果的に今日の中華民族論の基盤となってきたと考えられる[25]。

ところで、「民族」による新しい国家統合の体制は、中国共産党による社会主義体制のもとで実現されることとなった。中国共産党は「民族平等」社会の実現を掲げ、社会主義国家建設のための民族間の平等と団結を強調した。そして新中国成立後は、諸民族に関する基本的な状況を調査し、「民族識別工作」を進めた。「民族識別工作」は、エスニック・グループの分布地域、族称、歴史、言語、経済生活、物質文化、精神文化、心理素質などを基準にして少数民族を認定した[26]。まず初めに自己申告による民族の登録が行われ、1953 年までに 400 余りの民族の届け出があったとされる。その情報をもとにして、1954 年に 38 民族が承認され、今日までに 55 の民族が公認された[27]。こうして、国家を構成する民族が共産党政府の承認によって公定され、制度としては漢民族以外を「少数民族」として位置づけられるようになった。中国における「民族」とは、以上のような「民族識別工作」を通じて公定されたものを指し、自認されるエスニック・アイデンティティに依拠した民族的分類や範疇、あるいは地域における民族的共同体のあり方を大きく変え、中国社会特有の文脈における「民族」が形成されてきた[28]。

（２）「中華民族多元一体構造」論

中国の政治的なコンテクストと密接に関連しつつ、学術的なコンテクストにおいて初めて「中華民族」を理論化したのが費孝通[29]である。費は中国の民族関係史における漢族と少数民族の関係を考察しながら新しい解釈を示し、国民統合の民族理論として「中華民族多元一体構造」論を提唱し、少数民族に関わる研究や政策に多大な影響を与えた[30]。費によれ

ば「中華民族多元一体構造」論は、次の３点で説明される（図０－２・瀬川昌久―引用）。第一に、漢族と 55 の少数民族は、長い歴史を経て、相互に依存した分割不可能な一体構造をなしており、「中華民族」は 56 の民族を包括する民族実体であり、単なる 56 民族を総称するものではない。第二に、多元一体構造が形成されるためには、分散的な多元を結合して一体を形成していく必要があるが、凝集の核心としての役割を果たしてきたのが漢族である。第三に、「中華民族」という高次のアイデンティティは下位の各民族のアイデンティティや、さらにその下位の重層的なアイデンティティを排斥するものではなく、異なる各レベルのアイデンティティは衝突せずに存在することができ、統一体の内部は、多言語的、多文化的な複合体をなしている、というものである[31]。

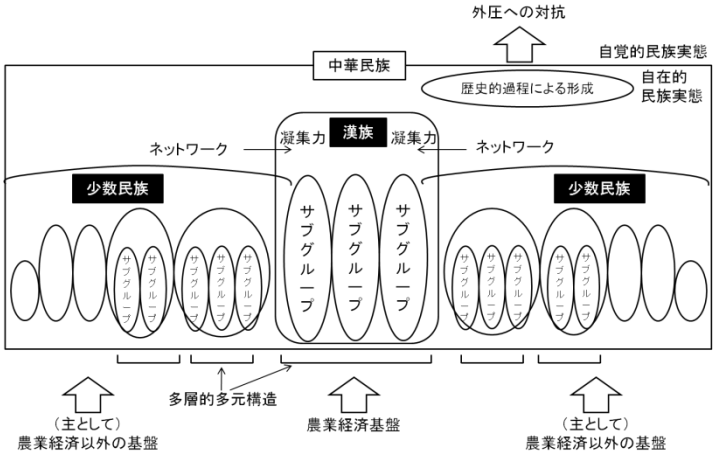

図0-2.中華民族多元一体構造論の構造・概念図
（瀬川昌入編『近現代中国における民族認識の人類学』 昭和堂、2012年、p.ｖ）

「中華民族多元一体構造」論の「中華民族」という名称は民族学上の名称としてふさわしくないとの指摘もある。たとえば、中国国内のモンゴル族とモンゴル国のモンゴル族とでは、言語や文化、歴史などにおいて共通する部分が多いにもかかわらず、中国国内のモンゴル族は「中華民族」に包摂されることになる[32]。その一方で、「中華民族多元一体構造」論が、中国における民族間関係の歴史に対して一つのマクロ・モデルを提示し、民族とは何かといった問題に対しても、新たな視点や示唆を提供しているとの評価もある[33]。たとえば、「中華民族多元一体構造」論のモデルでは、中華民族を最上位の概念として設定することにより、漢族を 55 の少数民族と同列に位置づけられている。これは従来の漢族を上位におき、その下位に 55 の少数民族をおく認識と比較すれば、大きな意識改革だとの評価である[34]。いずれにしても、費孝通が「中国の各民族は“君の中に我あり、我の中に君あり”で互いに離れがたい状況にある」と指摘している通り、「中華民族」は中国の多民族状況を説明する操作概念であり、その中心的な凝集の核心となっているのが漢族であることは変わらないといえる。

費の「中華民族多元一体構造」論では「中華民族」が形成された歴史的過程とは、分散・孤立的な民族単位が接触・雑居・結合・融合・分裂・消滅を経て、それぞれ個性をもった

多元的な統一体となった過程であるとしている。また、「中華民族」は「現在の中国の国境内にあって、民族としてのアイデンティティをもつ 11 億の人民を指す」[35]と指摘する。費はこのように定義するのは、「現実的な政治的論争に引き込まれるのを避けるためである」[36]と指摘するが、近年中央政府により愛国主義や中華民族論が強調されてきた。このように、中国において古今から現在までに「中華」を媒介にした一つのまとまり―統合理念が存在していると考える。伝統としての「中華」は歴代王朝が異民族支配を漢族が正当化させるために作り出した操作概念であった。そして、現在は中国に住む諸民族を包摂しようとした国民統合概念である「中華民族」によって「中国（中華）ナショナリズム」が創出されていると考える。

（３）中国の民族をめぐる論点

鈴木正崇は現在の公認された民族は、国家という上からの方向と、現実に生活する人々の帰属意識という下からの方向が交錯する局面で、第三のカテゴリーとして生み出されたものである。その形成には、時代背景の影響があり、強い政治的な意図に従って行われる。生活者の立場から見ると、外部からの動き掛けによって新たに民族が創り出された、と論じる[37]。一方、劉正愛は中国における民族とは、国家という枠組の中で国家によって認定され、制度的保証を与えられた、同一の文化や習慣、宗教、言語あるいは民族意識をもつと想定される人々の集団であると定義した[38]。劉の指摘と近い視点から白薩日娜は中国の民族について以下のように定義した。「ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論とエリック・ホブズボウムの作られた伝統論を踏まえて、中国における少数民族とは、民族識別をきっかけとして獲得した民族名称と民族自治地域、この二つに相応して想像され創造された伝統化された民族文化、さらに民族名称と民族文化によって形成されている民族としてのアイデンティティを持っていると想像する人びとが創造した共同体、さらに端的にいえば『想像と創造の共同体』である」[39]と定義した。ここで白は強調したのは「中国における民族の創造は、政府による政策を通じての創造なのではなく、政府による識別を通じて、民族側の人々が創造した民族文化を通じての創造なのであるという点と、創造の結果として、民族としての実体がそこにあるという点である」と論じられている。李と白の研究は少数民族側の主体性の確立を評価している点が共通している。それは国家によって創造された民族への少数民族側の想像の側面であったととらえている。これはこれまでの国民統合のために上から作ったという観点の研究を乗り越えようとする点が評価すべきところであろう。

中国の民族学学界では民族＝nation 概念の再検討が進み、それまでの民族と区別しようとする傾向がみられるようになっている。民族を nation の語訳ではなく ethnos の語訳とする、あるいはまた ethnic group 概念を用いることとし、語訳としては族群を当てるなどの議論が現れた[40]。族群概念の浮上は 1994 年１月台湾の中央研究院近代史研究所が主催した国際シンポジウム「アイデンティティと国家」において、王明珂が行った報告「過去、集団の記憶と族群のアイデンティティ：台湾の族群の経験」などがもたらした波紋が、台湾経由で中国国内にもたらされた変化であったといえる[41]。加々美光行は中国国内に台湾の学界で提起された族群概念が導入された背景には、民族を主体とする諸権利要求が、中華人民共和国成立後もしばしば政治的分離主義として抑圧を受けてきた歴史的経緯が働いていると主張する[42]。とりわけ、漢民族の大量移住によって、内モンゴル自治区のような地域、さらには複数民族が混住し雑居する地域では、少数民族のアイデンティティが徐々に希薄化を迫られる状況があり、その分、従来の民族概念を根拠とした諸権利要求の根拠が弱体化せざるを得ない状態が広がりつつあった。こうした状況下に、自己のアイデンティティの確立をむしろ民族概念から離れて、過去の集団経験の記憶の共有という一点に絞り込んだ族群概念に求めることは極めて合理的な転換と言えたのである[43]。

納日碧力戈は中国の複雑な政治的な現況を考慮し、学術討論を行う際に術語規範を守るべきとし、「英文の ethnic group と ethnos の対訳を族群に、nation と nationality の対訳を民族にし、前者は文化と情緒に基づく共同体を、後者は政治と文化的共同体を表すものである」と主張した[44]。また、馬戎は民族(nation)とは常に政治実体を指すものであり、エスニック・グループとは言語、宗教と文化習慣などの非政治性がある点での区別を強調した[45]。中国の民族研究ではエスニック・グループという語を用いることを提起している。つまり、民族と族群の本質的違いは、政治共同体なのかそれとも文化共同体なのかにあるということである。

本研究では、国家政策の枠内で中国の少数民族のおかれた状況を検討するため、制度的に認定された公定の 56 の民族のなかの 55 の少数民族を研究対象とする。ここでいう「民族」は中国の特殊な歴史的、政治的、社会的文脈において生じた特殊概念である。シンジルトは中国でいう「民族」には三つの意味が含まれていると指摘した。一つ目は国家の構成員である国民を表す時の「国民」(nation) と「市民」(citizen)、つまり中国国籍者を指す。二つ目は国家の認定を受けた公定の民族、つまり十数億人の人口をもつ漢族とそれに比べて絶対的人口の少ない 55 の少数民族、計 56 の民族を指す。三つ目は漢族以外の 55 の少数民族のみを指す[46]。本研究は公定された 55 の少数民族に対して中国政府はどのよう

な文化政策を実施し対応しているのかを検討するためで第三の指摘に従って検討する。

２．本研究における文化のとらえ方

（１）中国国内における少数民族文化の定義

近年の中国国内研究において、少数民族文化を中華文化の構成部分であるとして捉え、少数民族は中華文化の主体であると強調している。そして、少数民族文化は中華文化の形成発展に重要な貢献を与えたとし、その表れとして、①中国広大な境域の開拓と擁護②中国言語、文字の形成と発展、③中国的多元文化と中国多元一体の政治制度④中国民族宗教関係にあると論じる[47]。

一方、少数民族文化の定義はどのようになされているか。中国の学術界では少数民族文化を広義と狭義に分けて論じている。広義の少数民族文化とは各少数民族の人々は生存、発展、自由、創新及び社会生活の需要に基づき創造してきた文明である。つまり、物質文化、精神文化および制度文化の総合である。狭義の少数民文化とは、各少数民族は創造したすべての精神文明の集合であり、主に少数民族の創造能力に現われ、少数民族の人々の心理状態が強調される。『中国大百科全書・民族巻』では民族文化について以下のように定義している。「各民族はその歴史の発展の過程で創造し発展してきた民族特色をもつ文化である。物質文化と精神文化が含まれている。衣食、住宅、生産工具などは物質文化の内容に含まれ、言語、文字、科学、芸術、哲学、宗教、風俗、祭日、伝統などは精神文化の内容に含まれる」[48]。しかし、文化を「物質文化」と「精神文化」に分けることが妥当ではないとの論述もある。すなわち、物質形態から離脱した精神文化は存在しないし、ある精神を含まない物質文化も存在しないとのことである[49]。宋蜀華・陳克進編『中国民族概論』（中央民族大学出版社、2001 年）では、少数民族文化を６つに分類した[50]。つまり、①衣食住をはじめとする生活文化：服飾、飲食、建築、交通など。②婚姻家庭及び儀礼文化：恋愛、婚姻、家庭、親族呼称、生育、葬儀、交際など。③民間伝承文化：民間文学、音楽、舞踊、伝統劇、競技、民間美術など。④科学知識工芸文化：生産技術、天文暦法、民間医薬など。⑤信仰文化：宗教、崇拝、祭祀、巫術、禁忌など。⑥祭日文化：節句や民族特有の宗教、農事、記念などの祭日。

このような分類方法は物質文化と精神文化を統一化し、中国少数民族文化の基礎分類となり、一つの分類の中にまだ類別することができるといえる。例えば、生活文化の中に服飾文化、飲食文化、建築文化、交通文化などがある。

しかし、中国の民族は極めて政治的概念であり、民族文化といったときにも政治性が込

められている。先述のように、中華文化は漢族の作り上げてきた漢文化とそれぞれの少数民族文化及び両者の密接な関係と相互作用や相互浸透の中で形成されてきたものであると論じられている。そこで、民族識別活動により編入された 55 の少数民族は「多元一体」という構造の中でどのように自民族の文化を保持し、継承するかは筆者の研究関心の出発点である。以下では本研究における文化の捉え方を提示する。

（2）本研究における文化の捉え方

『広辞苑』では伝統とは「ある民族や社会・団体が長い歴史を通じて培い、伝えてきた信仰・風俗・制度・思想・学問・芸術など、とくにそれらの中心をなす精神的あり方」と定義している。しかしながら、「伝統」と呼ばれているものの多くは、近代になってから人工的に創出されたものであり、「伝統」とは、近代の発明であるとの指摘が、イギリスの歴史家ホブズボウムらによってなされている[51]。つまり、「伝統」は昔から受け継がれてきたものと考えられているが、実際は「伝統」とされるものの多くが、近年になって創り出されたとする考え方である。

また、「文化」について様々な捉え方がある。文化人類学の分野では、古典的な定義に対する批判が生じている。アメリカの文化人類学者のクリフォードは、「文化」や「伝統」を昔から伝えられてきた実体として捉え、西洋化、近代化、産業化されることによってそれが消滅していくとみる視点を「消滅の語り」と言っている。他方、文化や伝統というものは常に創造されていくものであり、新たな部分を吸収していくものであるとする視点を「生成の語り」と指摘した[52]。文化をめぐる構築主義の立場は、文化がその時代の政治経済的関係、思想的背景などとの関係によって形成されていくとするものとしての見方をもっている[53]。人類学において「純粋な文化」という視点が支配であったが、文化生成論はそれまでの本質主義的研究における真正ではないとされてきた観光場面における住民の多様な実践を、彼らが文化を創造し主体性を獲得するプロセスとして積極的に評価してきた[54]。太田好信は実体として「真正な文化」が存在するのではなく、つねに現在における解釈の結果として「真正な文化」という考え方は存在する。換言すれば、文化や伝統はある価値体系によって解釈された結果、はじめて、「真正さ」を獲得する。そのような価値体系は、その文化の担い手がつくりあげることもあれば、また、外部のものがつくりあげることもあるととらえている[55]。渡辺洋子は伝統芸能を「共有知」すなわち「時代や空間を超えてある集団の間で認知・共有され、その集団への帰属意識と集団文化の表現として次代に引き継がれる文化的価値」として位置づけている[56]。

本研究は文化生成論に依拠するが、文化の創造のなかで伝統的なものから何が継承されているかを検討することになる。また、少数民族とは国家の認定を受けた公定の民族、漢族以外の 55 の少数民族のことを指す。ここで、「少数民族の文化（民族文化）」といえばその 55 の少数民族の文化のことを示し、「中国内の各民族は長い歴史生活の中で培われ、集団の間で認知・共有されている文化的精神、価値」と定義する。その「文化的精神、価値」を体現するのが中国国内民族の風俗、習慣、芸術、祭礼などである。

第３節　先行研究の検討

本研究では民族文化政策と民族文化活動に焦点をあて先行研究を整理する。まず、政策研究においては、中国における民族政策と民族文化政策がどのように論じられてきたかを整理する。次に教育学研究における民族文化と民族文化活動に関する研究を論じる。ここで、まず、学校教育と家庭教育における民族文化に関する研究を検討し、学校教育と家庭教育における民族文化継承の限界性を示す。続いて、少数民族による主体的な創造活動を視野に入り、社会教育学における民族文化活動に関する研究を検討する。

１．中国における民族政策と民族文化政策に関する研究

新中国成立後に国家民族工作（民族活動）をまとめた文献集が出版されおり、中国の民族問題や民族政策の研究に重要な参考書となっている。例えば、「当代中国的民族工作」編集部編『当代民族工作大事記 1949−1988』（民族出版社、1989 年）は建国以来（1949 年～1988 年）40 年間の民族工作と民族地域の各領域での重要な出来事、中央の民族工作に関する決定、指示、民族政策、法令、規定などを記録したものである。また、国家民族事務委員会・中共中央文献研究室編『新時期民族工作文献選編』（1990 年、中央文献出版社）は中国共産党第 11 期中央委員会第３回全体会議（1978 年）から 1990 年までの中共中央、国務院、全国人民代表大会常務委員会の民族工作に関する重要な文書および党と国家指導者の重要な講話、決定などに関する 59 の文献がまとめられている。2003 年にも『民族工作文献選編（1990−2002 年）』（中央文献出版社）が出版された。

1990 年代に入り、国内の民族政策の理論的検討も出版されるようになった。黄光学主編『当代中国民族工作』（当代民族出版社、1993 年）は民族政策の展開を「民族工作の歴史的発展過程」、「民族平等権利と自治権利の実現」、「少数民族社会の変化」という三つの大枠に分け検討され、新中国成立期から 1988 年までの党の民族政策および少数民族地域

の状況が詳細に論じられている。また、黄光学・施聯朱主編『中国的民族識別―56 民族の来歴』（民族出版社、2005 年）は中国の 56 の民族が国家より認定されたプロセスをまとめた貴重な研究である。具体的に、中国が行った「民族識別」活動の状況、プロセス、成果と意義が記述されている。本書は国家社会科学企画（基金）会が 1990 年に批准した『中国少数民族社会調査研究―中国の民族識別』プロジェクト研究の成果である。

一方、日本において中国の民族政策関する一連の研究成果の蓄積がある。代表的な研究として、松本ますみ『中国民族政策の研究―清末から 1945 年までの『民族論』を中心に―』（多賀出版、1999 年）がある。本書では清末から抗日戦争が終結した 1945 年までの約半世紀の間に、中国の民族観・民族論と民族政策がどのように変遷したかについて論じている。また、毛里和子『周縁からの中国　民族問題と国家』（東京大学出版社、1998 年）は、中国共産党の民族政策が今日に至るまで辿った変遷を論じているとともに新疆、チベット、内モンゴルという個別の地域における区域自治政策の歩みを検討した。

近年になって、少数民族の文化政策に着目した研究も現れている。李資源等著『中国共産党少数民族文化建設研究』（人民出版社、2011 年）は、少数民族文化政策の形成の発展を少数民族公共文化施設の整備、メディア出版とラジオ・テレビ、映画事業、大衆文化活動、少数民族地域の文化産業発展、辺境地域の文化建設、少数民族文化体制改革、少数民族文化人材養成などの多面的な視点から検討が行われた。また、劉源泉『中国共産党少数民族文化政策研究』（人民出版社、2014 年）は、新中国成立前の 1921 年から現在（2014 年）までの中国共産党の少数民族文化政策を系統的に分析した。劉は少数民族文化政策を「少数民族文化教育政策」、「少数民族宗教振興政策」、「少数民族言語文字政策」、「少数民族文化芸術政策」、「医薬体育政策」に分け、各時期における民族政策の主要な内容、変化と特徴を検討した。これらの検討を通じて、少数民族文化政策が内包している課題を提示し、少数民族文化政策の改善策を提案した。現在における少数民族政策の主な課題として、①少数民族文化法の整備を強化する必要がある、②少数民族文化の伝承・保護政策はまだ不完全である、③少数民族文化建設の援助政策を完全する必要がある、④少数民族文化の開発利用政策の内容は単一である、⑤少数民族文化の宣伝教育政策を豊かにする必要があると指摘した。

以上の先行研究の特徴として、第１は、マクロの視点から民族政策、文化政策は中国共産党の指導の下でどのように行われてきたかを論じた研究がほとんどである。第２は、民族平等の視点から民族政策の根幹である区域自治区政策の歩みとその状況を論じた研究である。しかし、中国の民族政策は必ずしも少数民族の実態を十分に把握し実施されている

とはいない状況が生じていると考える。先行研究には少数民族の実態状況を含んだ政策の検討が欠落しているといえよう。さらに、中国国内の研究においては国家民族文化政策の推進を系統的に論じているが、民族文化政策の推進の背後にある国家の意図を探り、どのように国民統合を行ってきたという分析が欠けていると考える。一方、少数民族教育研究において「統制」的な視点から社会主義国家中国における平等問題を探った検討がある。例えば、小川佳万は少数民族教育を通じて、中国における平等問題の特質を明らかにするため、中国共産党が主張する「民族平等」の三つの政策理念である「差異」承認、「差異」尊重、「格差」克服から導かれた少数民族教育の政策的展開を「民族学校の設置」、「民族文化採用」、「教育普及」であると指摘し、この少数民族教育の政策の展開を具体的な少数民族地区である延辺朝鮮族自治州、涼山イ族自治州及び少数民族教育機関を対象に検討した。小川は「この三つの政策理念がそれぞれ拡大していくことが『民族平等』を実体のあるものにしていく過程であり、『民族平等』を実現していくことが、結果的に中共による「統制」をより強固なものにしていく結果になる」と論じた[57]。しかし、本研究では中国の少数民族の問題を検討する際、国家民族政策を国民統合の前提のもとで議論を展開した。小川が指摘するように、国家民族政策は結果的に中共による統制を強固する側面があるが、本研究では少数民族側はどのように国家政策を柔軟に対応し民族性を形成し、少数民族としての帰属意識を涵養し続けているのかを検討したことに意義があると考える。

２．学校教育と家庭教育における民族文化に関する研究

少数民族にとって民族教育は、少数民族の自立やアイデンティティ形成に重要な役割を果たしている。しかし、民族学校で行われている教育について、内モンゴルの民族学校を事例として取り上げたウルゲンは内モンゴルの民族学校のカリキュラムは漢民族学校をモデルとし、民族的特色を有する道徳・歴史の教科書ですら、「漢民族文化の中で書かれたものをモンゴル語に訳したにすぎない」[58]と批判した。ウルゲンは今日の民族学校の教育が民族としてのアイデンティティの形成をいかに阻害しているかを検討した。民族的アイデンティティ阻害の主な要因は、少数民族地域の日常生活で身につけた文化と民族学校の授業内容との間には大きなギャップがあると指摘した[59]。すなわち、「授業内容は漢文化中心主義であり、各少数民族についての歴史・文化についての記述は非常に少ない。さらに、学校教育で思想道徳教育という名の下に、漢族中心の教育が行われるなど、漢化・同化政策の中で、小数民族の子どもたちのアイデンティティの形成が妨げられている」と言及した。また、ハスゲレルは 2003 年に内モンゴルのモンゴル民族小中学校で使用されていたモンゴ

ル語教科書と小学校の社会と初級中学の歴史教科書を分析し、教育の在り方を検討した。教科書の分析を通じて、小学校及び初級中学のモンゴル語教科書において、モンゴル民族の伝統文化に関する説明が不十分で、内容も浅薄であると指摘している[60]。

さらに、グローバリゼーションという社会変動のもとでの少数民族の変容（就学、移動、家族）を明らかにしながら、エスニック・マイノリティの家族における民族文化の継承/断絶と実態を教育学の観点から実証的に検証することを目的とした新保敦子編『中国エスニック・マイノリティの家族―変容と文化継承をめぐって』（国際書院、2014 年）が取り上げられる。本書はモンゴル族、回族、朝鮮族、カザフ族、土族などの少数民族に対して調査に基づき執筆された８本の論文よりまとめられた。そのなか、中国の社会変動と関連づけた少数民族の家庭教育に焦点を当てた研究が注目される。例えば、サラントラが指摘するように、遊牧社会ではモンゴルの子どもたちにとって自然と生活とは切り離せない関係にあり、労働と遊びは境界線が曖昧であった。子どもたちは幼いころから「小さな大人」としてさまざまな労働に参加して生活技術を学んでいき、母親は主な「教育者」として遊牧民を代々育ててきた。子どもたちは、家庭における「母の教え」によって「生活実践」の教育を受けてきたのである。しかし、生活環境の変化を余儀なくされている今日、草原の子どもたちは、近代化された社会環境のもとで学校教育（中華人民共和国建国以来の民族教育）を受けることによって、伝統文化の変容が加速されつつあると論じられている[61]。また、新保はモンゴル族と回族の女性教師の事例を取り上げ、婚姻家庭において母親は伝統的に民族の文化を次世代に継承する役割を担ってきたが、近代学校教育を受けることで少数民族は大きな変容を遂げ、家庭におけるエスニック・マイノリティとしての文化の継承は断絶という実態に直面しつつあると指摘している[62]。

以上の先行研究は今日の民族学校と家庭内教育において文化継承の断絶の実態の要因を明らかにし、アイデンティティの形成と関連しながら文化継承の重要性を指摘している。しかし、民族文化の継承といったときに民族文化そのものの変容について論じられていない。すなわち、民族文化の何をどのように継承するかということが問われていると考える。民族文化は社会的、政治的、経済的という様々な背景のもとで不変的なものではなく再創造していく側面もある。先行研究では、民族文化の再創造の視点から民族文化の継承を捉える点が欠けているといえよう。

３．少数民族のアイデンティティに関する研究

漢族とモンゴル族の族際婚姻の調査を通じて民族意識の変化を明らかにした温都日娜の

研究では、族際婚姻家族の次世代の混血と民族所属変更により「新モンゴル族」、「新漢族」[63]が生じ、族際婚姻家族の次世代の民族意識が複合化し、曖昧化し、固定的な「民族」概念では捉えきれない民族意識が新たに創り出されていると論じられた[64]。また、金雪は中国内モンゴル自治区・フフホト市のモンゴル族の事例分析を通じて、モンゴル民族が抱えているアイデンティティとメディア利用との関係を明らかにした。インタビュー調査からみるモンゴル族の意識として、内モンゴルと外モンゴルをはっきり区別していることが分かった。内モンゴル民族は自分たちとモンゴル人は同じ民族であることを認めているが、モンゴル族はモンゴル人ではないと述べて、中国人としての意識が強いことが明らかになった。したがって、モンゴル族は中国人・モンゴル族という二重アイデンティティを抱きながら主に中国語・モンゴル自治区のメディアを利用すること、外モンゴルのマスメディアの利用率が低いということが明らかになった[65]。回族の事例として新保敦子は 1980 年代以降、グローバリゼーションに伴う激動の中で、師範教育を選択した回族女子青年が、職業生活や結婚、育児を含めての家庭生活において直面してきた諸問題を考察し、彼女たちのムスリムとしてのアイデンティティの変化や葛藤を明らかにした[66]。回族女性教師は、国家の教師としてのアイデンティティ（世俗主義を標榜する共産党政権への忠誠、仕事の重視）とムスリム女性としてのアイデンティティ（アッラーへの服従、家庭生活の尊重）というダブルアイデンティティを持ち、双方の間で揺らいでいる。つまり、彼女たちは、ナショナル・アイデンティティとエスニック・アイデンティティとの葛藤の中で生き、新たなる試練に晒されることになったと指摘する[67]。

以上の研究は中国の少数民族のアイデンティティの変化を言及し、少数民族の民族意識の動態を検証しており、有益な示唆に富んでいる。

４．社会教育における民族文化活動に関する研究

日本の社会教育学研究における民族問題や文化継承に関する研究も注目される。ここでは学校教育外で行われている地域住民による主体的な文化の継承と創造活動を視野に入れた研究を整理し、中国の少数民族の民族文化の継承を社会教育学の視点から研究する上で参考にしたい。

まず、日本の民族問題に着目した研究である。例えば、「滅び行く民族」と言われたこともあった日本のアイヌ民族は、民族的な差別を受け、政治的、経済的な不利益を受け、民族の言語・文化・伝統が否定され、民族としての社会的な自律性が失われた[68]。しかし、今日アイヌ民族の中から主体的にアイヌ文化の復興とアイヌ民族の政治的な権利回復、経

済的な自立を求める組織的な活動が起きている[69]。野元弘幸はアイヌ民族の権利回復の動きに着目し、アイヌ民族教育制度確立に向けた社会教育実践の課題を考察した[70]。アイヌ民族教育研究の成果として日本社会教育学会編『アイヌ民族・先住民族教育の現在』（東洋館、2014 年）が刊行された。本書ではアイヌ民族教育の歴史、実践（教材開発、アイヌ民族女性の学習）を検討し、アイヌ民族教育制度構想が提示された。また、上野昌之『アイヌ民族の言語復興と歴史教育の研究―教育から考える先住民族とエンパワーメント―』（風間書房、2014 年）はアイヌ民族の文化振興活動と教育活動に着目し、そうした活動の中に内在化しているエンパワーメントに視点を置き、彼らが社会的な働きかけによって、社会変革を促し、自己存在の確立を目指している姿を明らかにした。

次に、伝統芸能の継承の意義とあり方を検討した研究である。渡辺洋子は「伝統芸能」とその継承のあり方に着目し、それを「ローカルな知」の観点から捉え返しつつ、伝統芸能の盛衰や変化がそこに人々の社会生活や帰属意識とどう関わり、人々のアイデンティティの構築・再構成にいかなる意味や可能性をもち得るのかを、沖縄の事例をもとに検討した[71]。井谷泰彦は沖縄のモーアジビ（毛遊び）を事例として取り上げ、その習俗の持つ教育的機能を分析した[72]。すなわち、モーアシビの習俗が①歌舞の伝承機能、②創造活動の場としての機能、③伝統的地域体育の伝承機能、④仲間づくりの機能、⑤レクリエーション機能の５つの教育的機能をもっていることを明らかにした。また、山城千秋の研究には芸能の習得には、その背景にある歴史や文化、言語を学習し、自らの文化的アイデンティティを強にする教育的機能をもつことが指摘されている[73]。

文化継承の視点からは、地域の自治と文化を維持可能にするために青年の役割を検討した山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動」』（エイデル研究所、2007年）が取り上げられる。山城は地域青年会の民俗芸能活動に焦点を当て、青年がどのように文化創造の、ひいては地域自治の主体的な行為者へとなっていくのか、その活動実態を検討した。エイサーを中心とした民俗芸能に関する教育学研究の課題について、山城は「エイサーはどんな衣装を着て、どんな太鼓でどのように踊るのか」ではなく、エイサーを踊ることによって何を感じ、学習し、何を次代に伝えようとするのか、という文化伝承における人間の介在を明らかにすることに、教育学の役割があると指摘している[74]。地域単位の青年団における文化活動の意義は、世代を超えた文化内実の伝承と創造にあると指摘した。伝統を媒介とした創造の営みがなければ、文化の連続性は保たれない。すなわち、文化伝承には、青年の世代性としての役割と創造主体の課題が潜在的に内包されていると考えられる[75]。文化の再創造とは、伝えられなかった内実に改めて価値を与える行為であると指摘している。

以上の先行研究は本研究に大きな示唆をあたえる。つまり、日本の社会教育学研究において、マイノリティの権利回復のためマイノリティと称する人びとが社会的な働きかけによって、自己存在の確立を目指している活動に注目する点が重要な意義をもつ。また、文化活動の意義を明らかにしている点である。これまでの中国における少数民族の文化継承の課題は民族教育に力点がおかれおり、民族学校教育外の地域社会で行われている芸術団体や少数民族による主体的な創造活動を視野に入れた研究が欠落している。したがって、本研究では先述の先行研究の成果を踏まえながら、中国における民族文化の継承を学校教育、家庭教育に限定するのではなく、文化の担い手の主体的な文化の継承と創造活動がどのように展開しているかを検討する。

日本の研究を視野に入れて中国の先行研究を概括すると、以下の３点が指摘できる。第１は、民族文化政策の研究では中央レベルの政策の展開とその特徴をまとめているが、国家政策の意図の分析が欠けているといえよう。すなわち、民族文化政策は民族文化の保護、継承において意義をもつが、国家は国民統合という視点に立ったときに完全に少数民族の多元性を認めていないところがある。つまり、先行研究では、民族文化政策はどのように展開されてきたかについて論じているが、国家は民族文化政策を通じてどのように国民統合を行ってきたという分析が足りない。第２は、先の指摘にも関連するが、国家民族政策の目的、意図の変化と地方政府の対応という国家と地方の関係に基づき、民族文化活動の変化に着目した研究はなされていない。第３は、中国国内の研究では教育学研究において民族文化の継承の意義と課題に関する研究がなされているが、民族文化そのものに焦点をあて変化の過程を論じた研究は行われていない。さらに、民衆レベルにおいて、民族文化の創造に着目し少数民族の人々による主体的な文化の継承と創造活動を視野に入れた研究がなされていないと考える。

第４節　本研究の課題と方法

１．研究課題と方法

本研究は国家と少数民族を二項対立の構図でとらえるのではなく、中国の民族の創出過程を踏まえつつ、中国特殊な文脈において多元一体構造の中でモンゴル族はどのように民族文化を継承し民族性を形成しているかを検討する。

上記の目的を明らかにするため本研究は、以下の３つの課題を設定する。

課題１：民族文化活動の展開と実態を国家レベル、地方レベル、民衆レベルの３つの層

から分析し、「政治・政策の宣伝」と「民族文化の継承・普及」の実態を明らかにする。

国家レベルにおいては、建国から現在までの民族文化政策の展開を中央政府から出された各種の政策文書や共産党幹部らの発言などから明らかにする。政策検討にあたって中国の大きな政治的、社会変動の時期に基づき、中央政府による民族文化政策の展開を４つの時期区分をする。つまり、少数民族政策の展開を新中国成立期（1949 年～1965 年)、文化大革命期（1966 年～1976 年)、改革開放期（1977 年～2001 年)、グローバル時代における民族文化政策期（2002 年～）の４つの時期に分け検討する。各時期における民族文化政策の展開の検討を通じて民族文化政策の特徴とその背後にある国家の意図を探る。

地方レベルにおいては、国家による民族文化政策を受けて、地方政府がどのような文化活動を展開してきたのかについて検討する。事例として、遊牧生活を行うモンゴル族に対してモンゴル文化の普及活動を担ってきた官制の文化芸術団体であるウランムチを事例に、1957 年の結成から現在までの活動の展開を解明する。本研究で取り上げるウランムチは中国の特別な社会背景のもとで、民族的特徴をもった少数民族に政治・政策を宣伝し、民族文化を普及するという目的で結成された芸術団体である。したがって、ウランムチには「政治・政策の宣伝」と「民族文化の普及」という両義性があった。本研究では時代ごとによるウランムチの活動の検討を通じて国家民族文化政策の推進のもとでの地方政府の対応を検討する。分析方法としては、ウランムチを４つの時期に分け検討する。つまり、ウランムチの草創期（1957～1965 年)、ウランムチの停止期（1966～1976 年)、ウランムチの回復・改革期（1978～2001 年)、ウランムチのブランド化期（2002 年～現在）である。研究方法として、主に内モンゴル自治区政府から出された政策資料、通知、公文書とウランムチに関する歴史的な資料の分析のほか、ウランムチの団員への聞き取り調査の結果を踏まえて検討する。

民衆レベルにおいては、モンゴル族の伝統文化であるアンダイ文化を取り上げ、アンダイが継承される過程に見られる形態の変化について分析する。アンダイ文化は政治的・社会的背景に即してその形態を変容させながら、新アンダイを創作することにより現在においてもモンゴル族の精神的な拠り所とされている。こうしたアンダイ文化の継承の在り方を分析しながら、モンゴル族のアンダイ文化に対する意識についてアンケート調査から明らかにする。

課題２：アンダイ文化を事例に、伝統文化が時代によって形態を変化させながらも伝統の装いをまとって定着が図られている実態を明らかにする。これにより民族文化継承の一端を示す。具体的には、新アンダイとして創作されたアンダイ体操が民族学校に導入され、

学校教育を通じてアンダイ文化が普及し、定着していく過程を検討し、児童・生徒へのアンケート調査を通じて子どもたちが新たに創作されたアンダイ体操をどのように意識しているのかを分析する。調査対象は、アンダイ文化発祥の地である内モンゴル庫倫旗（クロン旗）の民族学校でアンケート調査を実施した。

課題３：課題１・２の検討を通じて、多民族国家である中国の少数民族は、中国人としての国民意識をどのように獲得し、またモンゴル族としての民族意識といかにして両立させているのかについて、民族文化の観点から明らかにする。

２．内モンゴル自治区に着目した理由

（１）内モンゴル自治区の概要

内モンゴル自治区は中国の北部に位置し、東西に長く伸びており、東から順番に黒竜江省、吉林省、遼寧省、河北省、山西省、陝西省、寧夏回族自治区、甘粛省の８つの省・自治区と隣接し、北はモンゴル国・ロシア連邦と接している。面積は 118 万３千平方キロメートルで、日本の約３倍である。内モンゴルは中国初の少数民族自治区であり、1947 年に内モンゴル自治区政府として発足した。内モンゴルは行政上３盟、９地級市、23 市管轄区、11 県級市、17 県、49 旗、３自治県に区分される[76]。

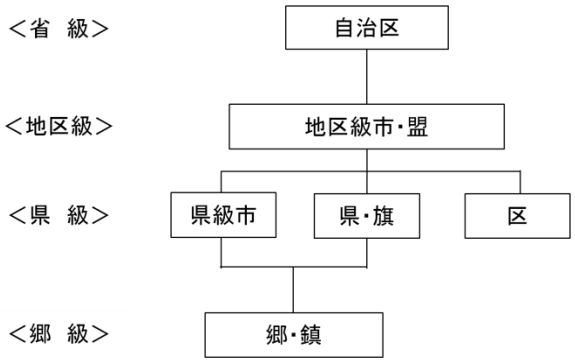

図0-3. 内モンゴル自治区行政区画

清朝時代まで、モンゴル族の多くは遊牧生活を営み、定住を前提とする農業地域は発展してこなかった。しかし、清朝末期には政府が改革と開発を目指した「移民実辺」政策を内モンゴルで実施された。「移民実辺」政策の推進に従い、内モンゴルの漢人人口はいっそう急増して 1912 年には 155 万人を超え、総人口 240.3 万人の 64.5%を占めるようになった[77]。表 0－１（次のページ）は 19 世紀初期～1957 年の内モンゴル全人口に占める蒙・漢人口比率である。「移民実辺」政策による、漢族の増大と牧草地の大規模な移民によっての開墾、さらに経済開発につれて、ほとんどのモンゴル人は遊牧から農耕へ生産手段を変え、遊牧文化から農耕文化へ変容し始めた。さらに、建国後は内モンゴルでは 1958 年～62 年の５年間で漢族が 200 万人増え、69～70 年の漢族移住は 100 万人を超えたといわれる。ソ連の軍事的緊張で内モンゴルの辺境防衛のために漢族移住が進んだのである[78]。2010 年の人口

センサスによると、中国国内に住むモンゴル民族の総人口は 580 万人で、内モンゴルに居住しているのは 422 万人で、内モンゴル総人口の 17%を占める。その他の少数民族は 3.4%を占める（表 0－２）。漢族の増加により、少数民族を漢民族文化への同化をさせる結果となっており、現実的には少数民族の言語と伝統文化の衰退が生じている。少数民族は自ら文化をどのように継承し普及していくことが大きな課題である。

表0-1. 19世紀初期～1957年の内モンゴル全人口に占める蒙・漢人口比率

時期	全人口（万人）	比率（モンゴル人：万人）	比率（漢人：万人）
19世紀初期	215	47.9%(103.0)	46.5%(100.0)
1912年	240.3	34.5%(82.9)	64.5%(155.0)
1937年	463	18.7%(86.4)	80.3%(371.9)
1947年	561.7	14.8%(83.2)	83.6%(469.5)
1949年	608.1	13.7%(83.5)	84.8%(515.4)
1953年	758.4	12.9%(98.5)	85.6%(649.3)
1957年	936	11.9%(111.6)	86.7%(811.2)

出典：リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』（集広舎、2015年）p.53を引用。

表0-2. 内モンゴル自治区における民族の人口（単位：万人、（　）内は%）

	モンゴル族	漢族	その他の民族	総人口
1953年	88.8（14.6）	512.0（83.9）	9.2（1.5）	610
1962年	138.4（11.2）	1072.9（87.0）	22.1（1.8）	1233.4
1982年	249.0（12.9）	1627.8（84.5）	50.6（2.6）	1927.4
1990年	337.5（15.7）	1729.8（80.6）	78.4（3.7）	2145.7
2000年	399.5（17.1）	1846.6（79.2）	86.2（3.7）	2332.3
2010年	422.6（17.1）	1965.1（79.5）	83.0（3.4）	2470.7

第1回～第6回までの人口センサスに基づき筆者作成。

（２）内モンゴルに着目理由

1947 年５月１日に内モンゴル自治政府は成立した。1949 年 10 月に中華人民共和国が成立すると同年 12 月に内モンゴル自治区政府と改称された。新中国成立後は各少数民族地域において推進された社会改革では、内モンゴルが最も先行された地域であり、「モデル・ケース」（模範自治区）として扱われることが多かった[79]。新中国は成立後、中央政府は異なる文化をもち異なる帰属意識をもつ人々を国民化するため文化を媒介に少数民族の国家への求心力を強化してきた。本研究で取り上げる内モンゴルのウランムチは、1950 年代にはモデルとてして扱われ、文化芸術を通じて政治・政策の宣伝を行うとともに民族文化を普及するという両義性をもっていた。したがって、本研究では内モンゴルのウランムチを取り上げ、ウランムチの草創期から現在までの歴史的変遷と実態を検討することを通じて、

多元一体構造の中での民族文化活動の位置づけを明らかにすることができると考える。

また、国家政策は少数民族の文化をどのように影響し、少数民族は国家政策をどのように対応しているかを明らかにするため、内モンゴルのアンダイ文化を取り上げ、アンダイの多様な変化を検討することを通じて、その実態を明らかにすることができると考える。なぜなら伝統アンダイの衰退化と新アンダイの出現には新中国成立後の国家政策の影響があった一方、民衆では民族文化の担い手による民族文化の復興の「工夫」があったと考えられる。

以上より、本研究では中国における民族文化活動の展開を「上から」の国家政策と「下から」の民衆の対応という二つの側面から明らかにするため、内モンゴルを研究対象として設定した。

（３）調査地の概要

本研究では調査地を内モンゴルの通遼市で実施した。通遼市は内モンゴルの東部地域に位置する。東に吉林省、南に遼寧省と隣接している。歴史的には、文革期の 1969 年に通遼市(当時：ジェリム盟)は吉林省と合併したが、その後 1979 年に通遼市は内モンゴルに返還された。通遼市は 1 市轄区（ホルチン区)、1 県級市（ホーリンゴル市)、１県（開魯県)、５旗（ホルチン左翼中旗、ホルチン左翼後旗、庫倫旗、ナイマン旗、ジャルート旗）から構成されている。通遼市は遊牧地域から半農半牧地域に変容した地域であり、漢族とモンゴル族、他の少数民族が混住している地域である。漢族は 159.23 万人（50.72%)、モンゴル族は 144.13 万人（45.92%)、その他の少数民族は 10.5 万人（3.36%）である[80]。通遼市はモンゴル族の地域文化―ホルチン文化の発祥地域であるともいわれる。ホルチン文化はホルチンモンゴルシャマニズム文化、ホルチン叙述民歌文化（古代モンゴルの叙述詩の伝統芸術である)、ホルチン語り文化を概括している[81]。その中、ホルチン民歌、アンダイ舞踊、モンゴル族の口承文芸であるウリゲルはホルチン文化の代表的な文化である。

（４）用語の説明

本研究は内モンゴル自治区及びモンゴル族の伝統文化を対象とするため、関連する用語について以下に予め説明を付きしておく。

モンゴル族伝統文化の名称

・アンダイ：モンゴル族伝統民間舞踊である。近年に入って、アンダイ劇、アンダイ体操のような劇、体育の形に変わっている。(本研究の第三章で詳しく論じる)

・好来宝：モンゴル族の芸能の一つ。内モンゴルで流行したもので、元来は民間の歌手が 1 人で演じたものだが、現在では独唱、対唱（２人でやりとりする歌)、重唱、合唱があり、四胡や馬頭琴などで伴奏する。

・ウリゲル：モンゴル族の民間における口承文芸の一つである。四胡、チョール（馬頭琴の前身）などモンゴル族の伝統的な楽器で伴奏するホーリン・ウリゲルと楽器を使わないヤボガン・ウリゲルに分かれる。歴史物語を題材とするものが多い。

また、本文の中に主な省略について以下のように示す。

全称	少数民族の文化	少数民族文化政策	中国共産党	中国共産党第11期中央委員会第3回全体会議
略称	民族文化	民族文化政策	中共	第11期3中全会

[1] 漢民族が自らを世界の中心に位置づけようとする観念を表象した表現であるが、「中国＝中華」を意図的に重ね合わせることで少数民族を包括した概念として使用されている。

[2] 中国を統治する者（天子、現在の中国共産党や歴代皇帝）は、伝統的に「天」の命によって「天下」を委任統治しているに過ぎないもの（「天下為公」（礼記)、天命の代理執行人）と考えられている。(例えば、溝口雄三『中国の公と私』研文出版、1995 年、ｐ.60-61）そのため、常に統治権の正当性を自ら示し続けることが要請される。

[3] 西澤治彦「解題―費孝通の「中華民族の多元一体構造」をめぐって」費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年、 p. 334。

[4] ウランムチはモンゴル族の民衆文化生活を活性化するために創設された基層文化事業機関団体である。内モンゴル自治区の住民が分散して居住している状況に対応して各地を巡回上演する芸術団体である。現在内モンゴル自治区に 68 団体がある。各ウランムチは 30 名前後の団員によって文芸公演を行っている。

[5] モンゴル族伝統民間舞踊である。近年に入って、アンダイ劇、アンダイ体操のような劇、体育の形に変わっている。近年のアンダイの研究では、内モンゴル大学サルラの『アンダイ文化に関する論述』(2009）がある。サルラは、アンダイを伝統アンダイと新アンダイに分けている。伝統アンダイとは、1947 年以前のものを指し、病気を治すボの儀式であり民間の伝統である。新アンダイとは、儀式的側面が弱まり、芸術の形式で発展したアンダイである。

[6] 周星「漢族とその経済生活」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想社、2001 年、p. 26。

[7] 横山廣子「少数民族の政治とディスコース」青木保ほか編『民族の生成と論理』岩波書店、1997 年、p. 177。

[8] 同上。

[9] 周星「漢族とその経済生活」佐々木信彰編、前掲書、p. 26。
[10] 同上。
[11] 横山廣子「少数民族の政治とディスコース」前掲論文、 p. 178。
[12] 同上、p. 177。
[13] 王柯『20 世紀の中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、2006 年、p. 46。
[14] 王柯『多民族国家　中国』岩波書店、2009 年、p. 41。
[15] 陳連開「中国・華夷・蕃漢・中華・中華民族―一つの内在的関係が発展して認識される過程」（塚田誠之訳）費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年、p. 156。
[16] 王柯『多民族国家　中国』前掲書、p. 41。
[17] 加々美光行『中国の民族問題―危機の本質』岩波書店、2008 年、p. 16。
[18] 陳連開「中国・華夷・蕃漢・中華・中華民族―一つの内在的関係が発展して認識される過程」（塚田誠之訳）費孝通編著、前掲書、p. 157。
[19] 加々美光行『中国の民族問題―危機の本質』前掲書、p. 16。
[20] 陳連開「中国・華夷・蕃漢・中華・中華民族―一つの内在的関係が発展して認識される過程」（塚田誠之訳）費孝通編著、前掲書、p. 159。
[21] 松本ますみ『中国民族政策の研究―清末から 1945 年までの「民族論」を中心に―』多賀出版、1999 年、p. 85。
[22] 王柯『多民族国家　中国』前掲書、p. 46。
[23] 松本ますみ『中国民族政策の研究―清末から 1945 年までの「民族論」を中心に―』前掲書、pp. 329-330。
[24] 同上、p. 330。
[25] 同上、p. 328。
[26] 王柯「『少数民族』から『国民』への道程―現代中国における国民統合という視点から」『アジア研究』Vol47、No. ４、アジア政経学会、2001 年、p. 43。
[27] 費孝通「エスニシティの探究―中国の民族に関する私の研究と見解」（塚田誠之訳）費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年、p. 314。
[28] 横山廣子「少数民族の政治的ディスコース」前掲論文、p. 167.
[29] 費孝通（1910 年～2005 年）現代中国社会学、社会文化人類学の代表的な研究者である。1930 年に燕京大学で社会学を学ぶ。1933 年に清華大学の大学院に進み、ロジア人類学者のシロコゴロフに師事した。1936 年にロンドン・スクール・オブ・エコノミックスで社会人類学を学び、1938 年抗日戦争期に帰国し、雲南大学で教える研究を続けた。1952 年に中央民族学院に移り、中央民族学院副委員長などを歴任した。1953 年から「民族識別」活動に参加した。1978 年に中国社会科学学院民族研究所の副所長を担当した。1988 年に費孝通の「中華民族の多元一体構造」の講演が香港中文大学で行われた。
[30] 周星「費孝通氏の民族理論」『文明 21』第 15 号、国際コミュニケーション学会、2005 年、p. 77。
[31] 西澤治彦「解題―費孝通の「中華民族の多元一体構造」をめぐって」費孝通編著、前掲書、pp. 333-334。
[32] 同上、p. 340。

[33] 同上、p. 343。
[34] 同上、p. 344。
[35] 費孝通「中華民族の多元一体構造」費孝通編著、前掲書、2008 年、p. 13。
[36] 同上。
[37] 鈴木正崇「創られた民族―中国の少数民族と国家形成」飯島茂編『せめぎあう『民族』と国家　人類学的視点から』アカデミア出版会、1993 年、p. 225。
[38] 劉正愛『民族生成の歴史人類学―満州・旗人・満族』風響社、2006 年、p. 29。
[39] 白薩日娜『中国の識別された民族のアイデンティティに関する社会学的研究―東北地方の斡爾民族を事例に―』島根県立大学大学院北東アジア研究科博士論文（社会学）、2013 年、p. 154。
[40] 加々美光行「中国の民族政策をめぐる新思考：『族群』『自治と共治』―内蒙古自治区を中心に―」『中国 21』（Vol. 19）愛知大学現代中国学会、2004 年、p. 43。
[41] 同上、p. 46。
[42] 同上、p. 47。
[43] 同上。
[44] 納日碧力戈『現代背景下的族群建構』雲南教育出版社、2000 年、p. 125。
[45] 馬戎『民族社会学―社会学的族群関係研究』北京大学出版社、2004 年、p. 37。
[46] シンジルト『民族の語りの文法―中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育―』風響社、2003 年、p. 38。
[47] 周明甫・金星華編『中国少数民族文化簡論』民族出版社、2006 年、pp. 33－35。
[48] 『中国大百科全書・民族巻』中国大百科全書出版社、1986 年、p. 313。
[49] 徐万邦・祁慶富『中国少数民族文化通論』中央民族大学出版社、1996 年 p. 24。
[50] 宋蜀華・陳克進編『中国民族概論』中央民族大学出版社、2001 年、p. 208。
[51] 大橋健一「観光と文化」岡本伸之編『観光学入門　ポスト・マス・ツーリズムの観光学』有斐閣アルマ、2009 年、p. 177。
[52] 渥美一弥「文化とアイデンティティ―先住民族は消滅するのか?―」奥野克巳・花淵馨也共編『文化人類学のレッスン　フィールドからの出発』学陽書房、2011 年、p. 214。
[53] 同上、p. 226。
[54] 澁谷美紀『民俗芸能の伝承活動と地域生活』農山漁村文化協会、2006 年、p. 37。
[55] 太田好信『トランスポジションの思想　文化人類学の再想像』世界思想社、2010 年、p. 73。
[56] 渡辺洋子「伝統芸能という『共有知』とローカル・アイデンティティの可能性―沖縄県島尻郡南風原町の民俗芸能復活の取組を手がかりに―」日本社会教育学会編『＜ローカルな知＞の可能性　もうひとつの生涯学習を求めて』日本の社会教育第 52 集、東洋館、2008 年。
[57] 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育―「民族平等」理念の展開』、東信堂、2000 年、p. 242。
[58] ウルゲン『中国におけるモンゴル民族の学校教育』ミネルヴァ書房、2015 年、p. 149。
[59] 同上、p. 186。

[60] ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容―バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐって』現代図書、2016 年、p. 61。
[61] サラントナラ「モンゴル人家庭における文化継承および変容―内モンゴル自治区のオルドス地域を中心に―」新保敦子編『中国エスニック・マイノリティの家族―変容と文化継承をめぐって』国際書院、2014 年、pp. 19-20。
[62] 新保敦子「近代学校の普及と少数民族家庭における文化の継承/断絶―モンゴル族および回族の女性教師を中心として」新保敦子編『中国エスニック・マイノリティの家族―変容と文化継承をめぐって』国際書院、2014 年、pp. 99-100。
[63] 民族所属とは、中国政府が認定した 56 民族の「民族所属」をさしている。温都日娜は同じ民族所属をもつ民族所属の変更者と民族所属を変更してない人々を区別する概念として、民族所属を変更した人々を「新モンゴル族」、「新漢族」と表記した。
[64] 温都日娜『多民族混住する地域における民族意識の再創造－モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究』溪水社、2007 年、p. 286。
[65] 金雪「中国モンゴル民族のアイデンティティとメディア利用：フフホト市モンゴル民族を事例として」『法学政治学論究：法律・政治・社会』Vol. 94、慶応義塾大学大学院法学研究科、2012 年、p. 60。
[66] 新保敦子「改革開放政策下での中国ムスリム女性教師―進路選択・生活実態・アイデンティティに焦点を当てて―」『日本社会教育学会紀要』No. 46、日本社会教育学会、2010 年、p. 42。
[67] 同上、pp. 48-49。
[68] 上野昌之『アイヌ民族の言語復興と歴史教育の研究―教育から考える先住民族とエンパワーメント―』風間書房、2014 年、p. ３。
[69] 同上。
[70] 野元弘幸「アイヌ民族教育制度の確立と社会教育の課題」日本社会教育学会 60 周年記念出版部会編『希望への社会教育　3. 11 後社会のために』東洋館、2013 年。
[71] 渡邊洋子「伝統芸能という「共有知」とローカル・アイデンティティの可能性―沖縄県島尻郡南風原町の民俗芸能復活の取組を手がかりに―」日本社会教育学会編、前掲書。
[72] 井谷泰彦「沖縄のモーアシビ（毛遊び）に見る「習俗としての教育」―その教育的役割と機能―」『社会教育学研究』第 50 巻第 1 号、日本社会教育学会、2014 年。
[73] 山城千秋「ボリビアのオキナワ移住地における琉球芸能の伝承」日本社会教育学会年報編集委員会編『アイヌ民族・先住民族教育の現在』日本の社会教育第 58 集、東洋館、2014 年、p. 139。
[74] 山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究所、2007 年、p. 41。
[75] 同上、p. 50。
[76] 盟：内モンゴル特有の地区級行政単位。中国の行政区分では市レベルにあたる。旗：盟の下に位置する行政単位。中国の行政では県レベルの単位である。鎮：旗の下に位置する行政単位。中国行政区分では郷のレベルにあたる。

[77] リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』集広舎、2015 年、p. 53。

[78] 毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』東京大学出版会、1998 年、p. 95。

[79] リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』前掲書、p. 9。

[80] 「通遼市 2010 年第六次全国人口調査主要データ公報」通遼市統計局ホームページ http://tjj.tongliao.gov.cn/tjj/tjgb/2016-04/26/content_4024bf1c4a0d4117b301b08310e0a999.shtml（2018 年 6 月 11 日最終確認）

[81]巴蘇和「モンゴル族ホルチン文化に関する考察」『黒龍江省民族双書』2005 年第 6 期、p. 101。

第一章　中国における少数民族文化政策の展開

本章では、国民統合の視点から建国から現在までの少数民族文化政策（以下、民族文化政策）の展開を主に中央政府の民族文化工作に着目し、国は文化推進政策を通じて民族文化をどのように制度的に保護しているのかを検討するとともにその背後にある中央政府の意図を探る。分析にあたって、中国の大きな政治的、社会変動の時期に基づき、民族文化政策の展開を４つの時期区分に分ける。新中国成立期（1949 年～1965 年）、文化大革命期（1966 年～1976 年）、改革開放期（1977 年～2001 年）、グローバル時代における民族文化政策（2002 年～現在）である。

第１節 新中国成立期における少数民族文化政策（1949 年～1965 年）

１．民族区域自治政策の制定

1949 年の建国から今日に至るまで、中国の民族政策の基調は民族区域自治に集約される。1949 年以前、かつて中国共産党（以下、中共）は「民族自決」と「連邦制」の導入を主張していたが、最終的に「民族自治」に転向し、連邦制ではなく「統一した共和国」となった。

新中国の枠組みを決めたのは 1949 年９月の人民政治協商会議第一会全体会議（以下、第一会全体会議）で採択された「中国人民政治協商会議共同綱領」（以下「共同綱領」）である。「共同綱領」に新しい中国の基本政策を定めだ[1]。すなわち「中華人民共和国境内の各民族は一律に平等であり、団結、互助を実行する（第 50 条）。各少数民族が集合する居住地域に民族区域自治を実施する。民族集合居住の人口の多少および区域の大小により、それぞれ各種民族の自治機関を設立する（第 51 条）。各少数民族は民族言語、文字を発展させ、民族風俗習慣、宗教信仰を保持し、または改革する自由を有する（第 53 条）」と規定した。「共同綱領」の規定より、「民族の集合地域」に「自治機関を設立」し、各民族の平等の実現を基本に、諸民族に対する区域自治政策を採ることが決定された。第一回全体会議の後、1949 年 10 月 1 日に毛沢東主席は中華人民共和国成立を宣告した。

民族区域自治政策は後の「中華人民共和国民族区域自治実施綱要」（1952年）（以下、「民族区域自治実施綱要」）で制度化され、「中華人民共和国憲法」（1954年）（以下、「憲法」）で確定された。「民族区域自治実施綱要」は1952年の８月の中央人民政府委員会第18回会議に批准され実施される[2]。「民族区域自治実施綱要」の第二条では「各民族の自治区はすべて中華人民共和国の切り離すことのできない一部である。各民族自治区の自治機関はすべて中央人民政府の統一的指導のもとにある地方政権であり、かつ上級の人民政府の指導を受ける」と明記した。少数民族の文化と教育に関しては、第三章の「自治権利」では、「各民

族自治区自治区機関は各民族の自己の言語、文字を採用し、各民族の文化教育事業を発展させる」（第十六条）、「各民族の自治区自治機関は適切な方法を採用し、各民族の文化、教育、芸術と衛生事業を発展させる」（第二十一条）と定めた[3]。「民族区域自治実施綱要」は各少数民族の特定の地域に限定した文化的、教育、宗教的な区域自治権を付与するが、中共は建国前に主張していた「民族自決」を否定し、少数民族は中国から「切り離すことができない」ことが定められた。

続いて、1954年の第一期全国人民代表大会第一次会議に「憲法」が可決され、「憲法」の第三条では、「中華人民共和国は統一した多民族国家であり、各民族は一律平等である。（略）本民族の言語文字を使用し発展させ、自己の風俗習慣を保持し改造する自由がある。各少数民族集居地域に区域自治を実行する」[4]ことが規定された。1954年の「憲法」では自治地方を自治区、自治州、自治県の三クラスに分けた。1958年末までに全国では15省、87の自治地方となり、具体的に４自治区、29自治州、54自治県・旗に分かれている[5]。1947年５月1日に成立した内モンゴル自治政府は、1949年に成立した中華人民共和国の最初の自治区となる。続き、新疆ウイグル自治区（1955年10月）、広西チワン族自治区（1958年３月）、寧夏回族自治区（1958年10月）が成立し、60年代に入りチベット自治区（1965年９月）を加えて５つの自治区となった。

このように中国の民族政策の基本方針は民族区域自治政策をとることが明確化され、基本的に一定地域に集中した集居形態をとる民族集団に、その集居のレベルに応じて、自治区、自治州、自治県の地方政府を組織する権限が与えられ、その機関を通じて地域内の自治が実行されるようになった。

２．民族識別による国民統合

成立して間もない中国において様々な課題が顕在化していた。新政権の民族問題に関する基本的な課題について毛里は以下の３点を指摘した。①国家の領域的統合、②辺境の対外安全保障、③忠誠心をもつ、均質な「人民」の形成である。③に関しては、新政権は辺境地域に住む人々（モンゴル人、チベット人など）に共和国のメンバーとしての一体感、アイデンティティ、あるいは忠誠心を作り出す、つまり、「人民」の形成（「国民形成」）であると論じている[6]。その面で重要な役割を担ったのが民族の発掘、権力による民族の認知、つまり「民族識別工作」である[7]。以下、民族識別工作（以下、民族識別活動）による 56 の民族の再編された過程を検討する。

民族識別活動は建国初期に中央政府が少数民族を対象に実施した主な政策の一つとなる。黄光学・施聯朱編『民族識別―56 民族の来歴』（民族出版社、2005 年）によると中共の平

等、団結、共同発展という原則に基づいて民族政策を実行するため、特に各級人民代表大会での民族代表定員数を確保し、少数民族に民族区域自治を推進し、少数民族の経済、教育、文化を発展させるため、全国各地で自己申告による民族の名称と民族成分（民族出自）の識別を行い、基本状況を明らかにする必要であったと説明する[8]。当時の民族識別活動に参加した費孝通は「民族の平等を実現するために、私たちは新たな制度を作る必要があった。政治体制の上では、各民族の代表者が参加する最高権力機関、すなわち人民代表大会の創設が必要であった。ところが、新中国の建国直後の時期には、中国に一体いくつの民族があるのか、それらはいかなる名称なのか、そして人口はいかほどなのが、私たちははっきりとわかっていなかった」と述べる[9]。諸民族に関する基本状況を明らかにするため、1950 年から 1952 年にかけて、中央政府が中央訪問団を西南、西北、中南、東北、内モンゴルの地域に派遣し、中共の民族政策を宣伝し、少数民族の居住地域に社会調査を行った。中央訪問団の任務は、民族平等という基本政策を宣伝することのほかに、各地の少数民族を訪れ、彼らの民族名称・人口・言語・歴史の概要、および彼らの文化的特徴（風俗習慣を含む）を明らかにすることであった[10]。

民族識別活動のプロセスをみると建国～1954 年までを民族識別活動の第一段階といい[11]、民族識別活動は主に社会調査を行うとともに民族出自を確定することであった。1953 年の第一回全国人口調査において、申告制により登録された民族名称は全国あわせて 400 余りに達したというが、この時期に 38 の少数民族が公認された。

黄は民族識別とは「一定地域に居住している人々の共同体、その言語、経済生活、文化と心理的素質および歴史的由来などの要素を総合的に分析、研究を通じてその民族出自と民族呼称を確定する」[12]ことであったと示す。民族識別は主に「民族特徴」と「民族意願」（以下、「民族意思」）を基準に行った[13]。「民族特徴」は共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素の４つの特徴があるといえる[14]。これは、スターリンの「民族とは人々が歴史上において形成された共通の言語、共同の地域、共通の経済生活および共通の民族文化的特徴に内包される共通の心理素質という４つの基本的特徴を有する安定している共同体である」という定義に基づいたのである[15]。また、「民族意思」には民族意識と民族願望の二つの内容が含まれる。民族意識は民族グループの多くの民衆とそのグループの民族領袖、社会上層部の帰属意識である。民族意願は人々が自己の民族は漢族かあるいは少数民族か、単一少数民族かあるいはある少数民族の支系であるかについての主観的願望の表れであると説明される[16]。

上記の二つの基準に基づき、全国範囲で民族識別活動を展開したのは 1954 年～1964 年までの第二段階（民族識別の高まりの段階）である。この段階では新しく 15 の民族を認定し

た。74 の族称の異なった少数民族が 53 の民族に合併された。続き、1965 年～1978 年までの第三段階（民族識別が妨げられた段階）は文革によって民族識別活動が停止となった時期である。1978 年～1990 年までの第四段階（民族識別の回復段階）では民族識別の主な活動は一部の人々の民族出自の回復を行い、自称少数民族グループに弁別を行った。そして、1987 年に２月に当時の国家民族事務委員会の副主任であった黄光学は「民族識別と民族成分の更改に関する活動は基本的に完成した」と発表した。1990 に実施した第四回人口センサスまでに少数民族 55、漢族を含め 56 の民族であることが正式に確認された[17]。

「民族識別活動」では複数の集団が一つの民族に統合される。すなわち、法律において「民族」として承認されなかった多数の民族が存在したのである。たとえば、リー族の「起源」は単一ではなく、「多源的」なものである。歴史文献上に「里」、「俚」「僚」「黎」などのカテゴリーとして記載されている。海南島への漢族の進出により、リー族の支配・同化の歴史の中で、その多様な先住者たちが一つの包括的なカテゴリーとしてまとめられるに至った。今日では、住民の間で「リー族」（黎）としての自己意識が普及・定着している[18]。さらに、中国政府が 1950 年代初期に認定した民族を見れば、必ずしもすべてが「識別」の全条件を揃えたわけではなかったといえる[19]。たとえば、苗族には独自の居住地域がなく、満州族はすでに民族語を忘れ、ブイ族は本来複数の自称が違うグループの集まりであった[20]。「民族識別」の最終的基準は、事実上「民族の意思」、とくにそのエスニック・グループの領袖と社会上層部の意思とされた[21]。先述のように毛里は統合が及ばなかった辺境の原住民を中国の「人民」として統合し、彼らに帰属意識を植え付けるために 1950 年代初めから精力的に行われた識別活動は「上からの国民形成」であると指摘する[22]。この点について王柯も「民族識別活動」は少数民族を国民として最も有効に統合するための方法であったとも論じる[23]。このように中国社会特有の脈絡における「民族」が形成され、漢族以外は 55 の少数民族として中国に包摂される。

３．建国初期における中央政府の民族文化工作の特徴

（１）民族文化工作の方針

建国初期の主要な民族工作は新中国の基本的民族政策の確立、民族平等の実現、民族関係の改善であった。先述のように中央人民政府は民族関係を改善し、民族間と民族内部の紛争を調停し、少数民族との関係を強化するため中央訪問団を少数民族地区に派遣していた。その主な任務は全国の少数民族に中央人民政府と毛沢東主席の指示を伝達し、「共同綱領」の民族政策を宣伝することであった。

ここで民族文化工作は民族文化事業機関、施設の設置から始まった。例えば、国家政務

の最高執行機関である政務院に全国の民族事務を主管する「民族事務委員会」[24]を設立した。また、少数民族の言語、教育、文化、習俗習慣、宗教などに関する民族文化政策が制定され、民族文化の保持・保護を行い、民族文化事業の振興に力を入れた。

文化部は 1957 年 12 月 21 日～27 日に第一次全国民族文化工作会議を開き、本会議に全国の 11 の少数民族の代表が参加した。会議ではまず、建国以来の民族文化工作の基本状況が報告された。報告によると、建国後の民族文化工作として、少数民族の文化遺産としての詩歌、音楽、舞踊、美術、歴史文物を発掘し整理した。また、国家が興した各種の文化事業が発展してきた。例えば、映画放映隊 529 団体が成立し、小数民族の生活を反映した映画 35 部を制作した。中央と地方民族歌舞団体 26 隊を結成し、256 ヵ所の文化館（ステーションを含め）を設置し、26 の流動文化服務隊を設立した。それ以外にも図書館と博物館を設置した。総合的にみて、小数民族文化工作は各民族間の相互的理解と団結を促進させ、祖国の政治、経済建設を推進させ、各民族人民の文化生活を豊富にさせ、積極的な役割を果たしたと評価している[25]。次に、これからの民族文化工作の方針と任務が提示された。国家社会主義建設の総合的要求と党の民族政策に基づいた民族文化政策の方針として、密接に各民族の政治、経済発展と協力し、各民族の特徴と実際の状況に基づき、全面的に企画し、合理的に配置し、着実に民族文化工作を発展させるとした。この方針を実行するため、民族文化工作の任務を以下のように示した。①少数民族の民衆的、アマチュア文化芸術活動を支え、積極的に少数民族文化遺産を保護、発掘し盛んにする。伝統文化を基盤にした新しい文芸創作を奨励する。②各民族の状況に基づき、多様な方法を用い、少数民族文化幹部を養成する。③各民族間の文化交流をはかり、各民族の特有文化の優れた点を発揚し、各民族間の相互学習を通じて、各民族の相互理解と団結を促進する。④全面的、積極的に少数民族地域の文化事業を発展させ、少数民族人民生活を反映した映画、劇、音楽、舞踊、美術、幻燈などの創作を積極的に発展させる。⑤各級文化部門は少数民族工作への指導を改善し強化する。また、関係部門の密接な協力と支持の獲得に努めるとした[26]。

すなわち建国初期における民族文化工作の特徴は各民族間の相互理解と団結を促進されることを前提にしながら、少数民族地域の文化事業を発展させ、伝統文化の保護を行い、映画、劇、音楽、舞踊、美術、幻燈などの創作を積極的に発展させることであった。

（２）文化の政治的機能

中共は映画、劇、音楽、舞踊、美術、幻燈などの創作を発展させることを通じて、少数民族に政策の宣伝を行っていた。特にそのなか宣伝活動の担い手となったのは文芸団体であった。中国語の「文芸」は文学と映画、演劇、美術、音楽などの芸術を総称していうこ

とばである。毛沢東は「延安文芸座談会における講話」（1942年）において「われわれの文学・芸術は、いずれも人民大衆のためのもの、なによりもまず、労働者、農民、兵士のためのものであり、労働者、農民、兵士のために創作され、労働者、農民、兵士によって利用されるものである」[27]と提示した。新中国は成立した初期の第一次全国文学芸術工作者代表大会で「文芸は工農兵に服務し、文芸はプロレタリアに服務する」精神が承認され、新中国成立初期の文化政策の基本となった[28]。文化部「1950年全国文化芸術工作報告と1951年計画要点」では「文芸団体は文芸活動と宣伝活動の最も重要な組織形式の一つである。連絡、普及、向上の架け橋であり、文芸幹部養成の流動学校である。彼らは農村、部隊、工場に入り『白毛女』、『劉胡蘭』等宣伝劇を上演し、広大な民衆に重要な教育の役割を果たした。彼らは長期的に民衆に文芸宣伝活動を行い、革命事業に貢献を果たした」[29]と謳われた。「文芸団体は文芸活動と宣伝活動の最も重要な組織形式の一つである」と示したように、1950年10月1日に各民族の代表団159名と文芸団体の団員222名は当時の中央人民政府政務院周恩来総理の招きを受け、新中国成立一周年建国記念大典に参加した。各民族の文芸団体は北京での一カ月の間に上演を通じて中共の民族政策を宣伝するとともに少数民族の文芸工作者に見学機会を与えたといえる[30]。

こうした目的をもちながら中央と地方の各級人民政府は少数民族地域に各種の文化芸術団体を結成することに援助を行っていた。1952 年に中央民族歌舞団体が結成され、団員は各民族の芸術に従事する人材によって構成された。自治州以上の民族自治地方でも各民族の専門芸術団体も結成され始めた[31]。1955 年文化部文化工作の基本方針では文芸団体は少数民族地域やその他の地域に計画的に巡回演出を行うことが示された[32]。

例えば、1957 年に内モンゴルでは、ウランムチ芸術団体が誕生している。この団体は牧民に上演を行うとともに本や医療品を送り、牧民とともに生産活動に参加していった。そのうえ、全国の各省、自治区、直轄市に巡回上演を行い中国の文芸界と民衆の歓迎を受け、ウランムチの活動は中央政府に評価されることにより、多くの省、自治区、直轄市においても「ウランムチ式」上演団体は組織された。ウランムチは中央によりモデルとして扱われ、文化芸術を通じて民衆に「革命精神」を宣伝していった。特に誠心誠意に人民に奉仕し、党と毛沢東文芸路線革命精神を貫徹することが他の文芸団体はウランムチから学ぶ中心内容となっていた。本研究の第二章ではウランムチの活動について詳しく分析する。このように新政権は、上からの国民形成のために文化芸術を通じて「革命精神」を宣伝し、毛沢東思想を民衆に伝達していた。

４．大躍進期における民族融合論

1953 年から1957 年は第一次五ヵ年計画期を終え、1958 年から1960年は大躍進期に入った。大躍進時期にはこれまでの民族政策が「民族地域特殊論」にすぎないと否定、批判され、「民族融合論」の思想が蔓延しはじめた。1950年代末期から、民族文化施設が閉鎖されたり、民族習慣の破棄が強いられたり、漢族地域の民族小学校が閉鎖されたりした[33]。王柯によると、毛沢東をはじめとする中国政府の指導者は民族関係の改善を図るため、1952～53年と1956～57年までに二回にわたって全国規模での「大漢民族主義」（少数民族を差別する意識）に対する調査と批判キャンペーンを行った。しかし、その後「地方民族主義」（自民族の利益だけを強調する意識）の台頭が心配され、「反右派闘争」において多くの少数民族出身の幹部が「地方民族主義者」として追放されたといえる[34]。大躍進期は民族政策の「地方民族主義」から「大漢民族主義」の転換である。これまで地域の実上を考慮して、比較的に穏やかに進められていた民族政策が人民公社化により急激な転換を遂げ[35]、「工・農・商・学・兵の結合した人民公社設立は共産主義に移行すべき基本方針」をとった。1958年の人民公社運動は「地方民族主義」に対して激しい攻撃を加えられ、チベットを除き一律に人民公社化が進み、民族幹部の漢族化が重視され、大量の漢族が少数民族地方に移住、「漢族への同化」が進行した[36]。

少数民族地域への漢族の移住は、工業開発や辺境開拓、辺境の防衛、そして幹部や青年の思想教育のための政治的移住などいろいろなケースがあった[37]。内モンゴルでは 1958 年～62 年の５年間で漢族が 200 万人増え、69～70 年の漢族移住は 100 万人を超えたといわれる。ソ連との軍事的緊張で内モンゴルの辺境防衛のために漢族移住が進んだのである[38]。内モンゴルの移入人口の急激な増加の最も重要な要因は、中央政府の政策と方針である。1958 年 8 月の中共中央の「青年を動員して辺境と少数民族地域の社会主義建設に参加させることに関する決定」をきっかけに少数民族地域への漢人の大量入植が本格的に進められるようになった[39]。この決定によれば、1958 年から 1963 年に「内地」漢人地域の青年 570 万人を辺境地域と少数民族居住地域に送り込むことが計画された[40]。さらに、1958 年 10 月に中央国家機関青年社会主義建設積極分子大会において「辺境地域支援」の呼びかけを行った。具体的には、河南、山東、浙江、江蘇などの省から数年間のうちに数百万人の青年を動員し、新疆、内モンゴルなどの少数民族地域へ「下放」することが計画された[41]。「辺境地域への支援」というスローガンのもと、漢人で構成される「生産建設兵団」の少数民族地域への入植、「国営農牧場」の建設とそれに伴う放牧地の農地化、そして遊牧を行っていた牧民の定住化が推進された。リンチンはこういった地域では漢人人口の急増に伴い使用言語の漢語化が進行し、このようにして少数民族の大衆の一部の生活様式や文化にも変化およ

び「漢地化」、「漢人化」が進行していくと論述する[42]。

そのあと 1961 年から 1963 年は調整期に入り、民族工作においては前段階の左傾の誤りを糾し、民族関係の改善、民族団結の強化が行われたが、1964 年から 1966 年は再び極左主義に傾斜していき、最終的に「文化大革命」の十年内乱状態を引き起こしたといえる。以下、文化大革命時期における民族文化政策を検討する。

第２節 文化大革命期における少数民族文化政策（1966 年～1976 年）

民族問題で一番早く文革の極左主義が出てきたのは、チベット「反乱」（1959年３月）をきっかけとする1959～62年の中印国境紛争、1960年以降の中ソ対立、特に新疆のイリ地区での中ソ民族紛争（1962年４～５月）というように、少数民族地区を舞台に国家間紛争が激しくなり、中国の統合そのものを脅かす状況が生まれてきたためであるといえる[43]。1966年から始まった文革には辺境防衛が最優先された、民族政策は骨抜きにされ、民族地域の経済文化は疲弊してしまった[44]。

文革には一元的な政治的・文化的統合が強行され、主に文芸界に波及していた。1966年に２月に林彪が江青に委託して「部隊文芸工作座談会」を開き、編集された『部隊文芸工作座談会紀要』では新中国成立以来の文化政策と文芸成果を全面的に否定し、「文芸黒線専政」論を提起した[45]。「黒線専政」とは「黒い糸による独裁」という意味である。文芸界は建国以来「毛主席の思想と対立する反党・反社会主義の黒い糸がわれわれに独裁を行なってきた。この黒い糸とはほかでもなく、ブルジョア階級の文学・芸術思想、現代修正主義の文学・芸術思想が、いわゆる三十年代の文学・芸術と結びついたものである」[46]という主張である。1966年５月に中共中央政治局では「中国共産党中央委員会通知」（「五・一六通知」）を採択し、特に1966年８月に中共第８期11回中全会では「プロレタリア文化大革命についての決定」を採択した後、文革の全面的な騒乱は急速に広がり、民族工作は麻痺状態になった[47]。

文革の十年の動乱中に、社会主義期における民族問題の存在を否認し、新中国成立期の民族政策と少数民族地域に実施した特殊な政策は踏みつけられた。林彪、江青とその追随者たちは少数民族の平等と自治権利を侵し、ある少数民族を「黒線」がつくった「にせ民族」とし、民族区域自治は「人為的に分裂をつくる」、「独立王国をやる」と見なされた[48]。民族区域自治が廃止する一方、ある地域を近隣の地区に合併された地域もあった。例えば、内モンゴルの東三盟と西三旗を黒竜江省、吉林省、遼寧省、甘粛省に合併させた。本研究で取り上げる通遼市（当時はジリム盟）は1969年に吉林省に合併されたが、1979年は再び

内モンゴルに編入された。

中央政府にある「民族事務委員会」も廃止され、少数民族政策である民族区域自治、民族教育の発展と民族幹部養成、少数民族風俗習慣の尊重などが撤廃された。結果的に、伝統的文化の破壊、少数民族の多くの民族幹部は迫害され、死に至った例も少なくない。統計によると「文革前の 1965 年に、少数民族文字で出版した図書は 1694 種類、2480 万冊、雑誌 36 種類、268 万冊がある。1970 年になると、少数民族文字で出版した図書は 312 種類、1331 万冊までに減り、雑誌も５種類、93 万冊になった。多くの少数民族文物、古典書を『四旧』[49]とみなし、焼いて破壊した」[50]。また、少数民族の音楽舞踊芸術の振興は阻害され、芸術の審美価値は無視され、「政治標準第一、芸術標準第二」の観念が流行となった[51]。「革命洋板劇」（「革命模範劇」）はすべての音楽舞踊芸術の形式を変えた[52]。例えば、第二章で論じる内モンゴルのウランムチは「毛沢東思想宣伝隊」と変え、完全に毛沢東文芸思想の宣伝になった。このような文革イデオロギーの強制は少数民族の民族的アイデンティティを完全に否定され、少数民族の文化が破壊された。新共和国の樹立で芽生えかけていた民族間のある種の連帯感や一体感はまったく打ち壊され、漢族への不満が鬱屈していくことになる[53]。

第３節 改革開放時期における少数民族文化政策（1977 年～2001 年）

1977 年８月に開かれた中共第 11 期全国代表大会において文革の終結が宣言された。文革の終結が宣言される前の 1977 年 7 月 16 日の中共第 10 期３中会では、華国鋒が中共中央の主席、中央軍事委員会の主席に就任することを決議した[54]。当時、華国鋒は「毛主席の決定したことはすべて支持し、毛主席の指示はすべて変えない[55]」という「二つのすべて」を宣伝した。しかし、この「二つのすべて」が 1978 年の第 11 期３中会では批判され、実践は真理を検証する唯一の基準であると指摘し、全党の工作重点を社会主義現代化建設に移行するとした[56]。それから、中国は社会主義事業の新しい歴史発展時期に入ったといわれる。中国は社会主義現代化建設時期に入り、民族工作は復活し民族団結、少数民族地域の安定や少数民族地域の経済、文化を発展させるようになった。第 11 期３中会では、「経済建設中心」の路線と「改革・開放」の基本方針が確立された。鄧小平は農業、工業、国防、科学技術の「四つの近代化」を掲げ、計画経済から市場経済体制へ移行する政策を進めていく。基本原則は先富論に代表されるように、先に豊かになれる条件を整えたところから豊かになり、その影響で他が豊かになればよいという考え方である。

文革が収束後、民族工作が回復され、各民族の芸術、文化を振興させることに着手し、

少数民族の事実上の不平等を次第になくそうとした。民族政策は毛里が指摘しているように、第一に十数年以来の極左政策で破壊された少数民族地区の経済を緩和政策で回復すること、第二に、後進的な経済社会開発のために国家の援助を増やすこと、第三に、民族幹部や専門家を急ぎ養成すること、第四に、区域自治を保障する法制をつくることの各点にわたっている[57]。そして、1984 年に中国の民族問題を解決する基本政策である「中華人民共和国民族区域自治法」（以下「民族区域自治法」）が制定された。これは少数民族政策の根幹となる法律である。以下、この時期の民族文化政策の特徴をみる。

１．文革後の民族文化工作の展開

（１）市場経済への移行期における民族文化工作の回復（1978年～1991年）

第 11 期三中会をもって民族政策は新しい発展時期に入った。文革によって廃止された中央民族事務委員会は 1978 年 11 月の全国人民代表大会第５期第一回会議における決定で、国家民族事務委員会（以下、国家民委）として復活した。国家民委は回復後、1979 年５月に第一次委員拡大会議を開き、新時期民族工作の任務について討論した。会議を通じて提出された新時期の民族工作の任務としては、改めて「民族団結、祖国統一を強化し、辺境と少数民族地地域の安定を擁護し、少数民族人民の社会主義積極性を発揮し、我国を社会主義現代化強国として建設するため奮闘する。歴史上に残された事実上の不平等を消滅し、小数民族は漢族の発展レベルに追いつき、あるいは漢族の発展レベルに接近する」[58]ことが強調された。

そして、この時期には文革期に迫害を被った民間歌手、詩人の名誉を回復した。例えば、1979 年３月、文化部、国家民委は全国芸術教育座談会を開き、会議では、少数民族地区の芸術教育と我国の民族芸術を繁栄するため人材を養成することを強調し、続き、９月に、国家民委、文化部と中国民間文芸研究会は北京で全国少数民族民間歌手、民間詩人座談会を開き、林彪、「四人組」の犯罪を批判し、迫害を被った民間歌手、詩人の名誉を回復した[59]。このように文革に被害を被った国家民委を回復し、民間歌手、詩人といった文化の担い手の名誉回復と人材養成に着手し、少数民族の独自性を尊重するようになった。一方、1984 年に「民族区域自治法」が制定され、少数民族の文化は法的に保障され、民族文化の振興にとって大きな意味をもつ。続いて、1987 年 1 月に国家民委による「民族工作のいくつかの重要な問題に関する報告」が出され、経済建設を中心に全面的に少数民族の政治、経済、文化を発展させる方針を取り、国家の民族文化政策は新たな展開に向うようになる。

（２）社会主義市場経済の下での民族工作の展開（1992 年～2001 年）

1992年以降、再び改革開放が推し進められ、経済成長は一気に加速した。しかし、都市と農村、沿海部と内陸部の地域格差は深刻化し、とりわけ農民の不満が高まった。社会主義市場経済体制のもとで、江沢民・朱鎔基政権は格差是正と一層の経済改革に取り組むことになる。90年代に入って以来、国家は全国的にまたは少数民族地域に対応した重大な文化建設工程を始め、農村地域、辺境地域、民族地域に公共文化施設の乏しい問題に対して力を入れた。例えば、1992年から開始し実施した「全国万里辺疆文化長廊建設」工程は少数民族が居住している広西、雲南、西蔵、新疆、内モンゴル、黒竜江、吉林省などの９つの省、自治区に公共文化施設を整備した[60]。

さらに、1999 年 11 月、中共中央工作会議では西部大開発戦略の実施が検討され、「西部大開発戦略を実施することは、内需拡大、経済成長の促進に直接かかわり、民族団結、社会安定と辺境防護の強化にかかわり、東部、西部の協調的発展と共同と富裕の最終的な実現にかかわる」ことが強調された。西部大開発政策により、経済発展の遅れた西部地区の経済は顕著な発達をとげて、生態環境保護活動の実施、科学技術教育の優先的発展、九年義務教育の普及などを推進している。そして、豊富多彩な観光資源である少数民族地区に観光資源の開発と計画を行って、観光戦略を実行している。2001 年 1 月の国務院西部開発会議は、「西部大開発の戦略的意義」を「共同富裕の実現、民族団結の強化、社会安定の維持、辺境の安全」と位置づけている[61]。中国政府が、経済支援の方法を財政補助金中心から、社会投資やインフラ整備に投資することへ移行したことは、中国政府の少数民族政策に関する新しい発想を端的に示したといえる。それは、中国全国共通の市場経済システムを築き、経済統合を通じて国民統合を進めることであるともいえる[62]。王柯は少数民族地域で経済開発を促進することが、経済統合を通じて周辺民族の国家への帰属意識を強化することで民族問題の解決を図るという中国政府の方針に即したものであると論じる[63]。中国政府は少数民族地域の安定に最も重要なのは経済発展であると繰り返し強調している。少数民族と漢民族の経済格差を是正し、21 世紀の半ばまでに少数民族地域の近代を実現するとの目標が掲げられ、経済統合を通じて中国人というアイデンティティを植えつけ、民族分離主義の支持基盤を崩壊させるという考えである[64]。そして、少数民族の中国人アイデンティティを強化するために地域の産業化を推進することが有効な手段になる[65]。

２.「中華人民共和国民族区域自治法」の改正

第１節で述べたように、「共同綱領」の規定より、「民族の集合地域」に「自治機関を設立」し、諸民族に対する区域自治政策を採ることが決定された。この民族区域自治政策は1954年の「憲法」で確定された。しかし、文革中の1975年に行われた「憲法」改正により、

民族区域自治政策は形骸化してしまったが、1970年代末に始まる鄧小平の改革開放路線では文革期に中断した民族政策が復活した。また、1982年に「憲法」が改正され、1954年の「憲法」の路線が復活した。「民族区域自治区法」の制定はこうした政治路線の一つの総括であるといえる[66]。1984年５月の第六期人民代表大会第２回会議では、民族区域自治の基本法である「民族区域自治法」が採択され、同年10月1日に施行された。

「民族区域自治法」は、中国の民族問題を解決する基本政策である。「序文」では、中国の民族区域自治とは、国の統一的指導の下、各少数民族が集中居住する地方に区域自治を実行し、自治機関を設立し、自治権を行使することであると示している。特に、第３章「自治機関の自治権」（第19条～第45条）では民族自治地方の持つ自治権の内容が定められている。民族自治地方の規定は、佐々木が指摘しているように少数民族に対する政治、経済面での優遇と、文化面での言語、教育などの尊重からなっているが、このような自治はあくまで、統一国家の枠内で認められるものである[67]。例えば、「民族自治地方の自治機関は国家計画の指導のもとに、地方の経済建設事業を自主的に配置し、管理することができる」（第25条）と規定され、自治機関の自治権は国家計画のもとで限定されたものである。文化面で、第38条「民族自治地方の自治機関は民族的形態と民族的特色をもつ文字、芸術、新聞、出版、ラジオ、映画、テレビなどの民族文化事業を自主的発展させる。」（第１項）、「民族自治地方の自治機関は関係部門が民族書籍を収集・整理・出版すること、民族の名所旧跡、貴重な文化財とその他の重要な歴史文化遺産を保護することを支える」（第２項）と定めた。

一方、2001年に「民族区域自治法」は改正され、「民族区域自治制度は国の基本的な政治制度である」と規定された。2001年の「民族区域自治区法」の改正では、第38条の内容に「文化事業への投資を拡大し、文化施設の建設を強化し、各種文化事業の発展をはやめる」（第１項）、「優れた民族的文化伝統を継承し発展させる」（第２項）という規定が追加された。「民族区域自治法」の改正の背景には少数民族と漢民族の経済格差の拡大、少数民族地域の教育、文化の立ち遅れがあったと考えられる。そして、2001年の「民族区域自治法」改正では少数民族地域への文化事業への投資を拡大し、各種文化事業を発展させることを明記した。経済的発展と現代化を国是として追及する国家全体の志向性の中で、少数民族の地方の幹部たちが、観光開発というものを自らの経済的発展のための重要な戦略の一つとして据えるようになる[68]。また、第38条の第２項に「優れた民族的文化伝統を継承し発展させる」と追加し、優れた民族的文化伝統とは何を指しているかを明記していないが、少数民族地域の取り組みから見ると、優れた民族的文化伝統とは文化を資源にした観光資源の戦略に反映されているものではないだろかと考える。

この時期の特徴としては、経済建設を中心に民族文化の振興が進められた。特に、鄧小

平の先富論は少数民族地域の遅れと格差問題を深刻化し、その格差是正の一環として、民族自治地域への投資と西部大開発政策が進められた。その背景には国家の経済計画の需要に基づき、民族地域経済建設を加速させる意図があるとともに経済統合を通じて少数民族の国家への帰属意識の強化があったと考えられる。

第四節　グローバル化時代における少数民族文化政策（2002 年～現在）

江沢民が 2000 年２月 25 日に広東省視察の際に行った講話の中で「三つの代表」重要思想・スローガンを始めて提起した。その内容は、中国の「先進的な社会生産力の発展の要求」、「中国の先進的文化の前進の方向」、「中国の最も広範な人民の根本的利益」の三つを代表してきたというものである。2002 年 11 月に開催された中共第 16 回大会において、江沢民の「３つの代表」がマルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論とともに党の重要思想と位置づけられた。「三つの代表」の中に「先進的文化の前進の方向」が提起され、民族精神を発揚する姿勢を表した。中国国内において文化の優越性を誇示することで国民統合の紐帯として機能させる意図があったと考えられる。

同中共第 16 回大会において、胡錦涛は江沢民に代わって総書記に主任し、胡錦涛政権が発足した。胡錦涛時代の政権スローガンとして掲げられたのが「科学的発展観」と「和諧社会」（「調和のとれた社会」）の実現である。中国は和諧社会の実現をスローガンとして掲げ、文化の振興を重視する姿勢が強く示された。特に、2011 年の中共第 17 期中央委員会第６次全体会議では、「文化体制改革を深化させ、社会主義文化大発展、大繁栄を推進することに関する若干の重大問題の決定」がなされ、文化強国をめざす国家戦略が示された。続き、2012 年に習近平が党総書記、中央軍事委員会主席に就任し、習近平政権が発足し、「中国夢」をスローガンに掲げた。最大の中国の夢は「中華民族の偉大な復興」であり、この夢は中華民族の全体的利益を体現するものであるということである。以下、グローバル時代における中国の新たな文化政策の動きを分析する。

１．文化体制改革の経緯

既述のように、2000 年代に入り、中国は和諧社会実現をスローガンとして掲げ、文化の振興を重視する姿勢が強く示された。経済のみならず、文化建設と文化体制改革の推進が強調され、文化振興政策の新たな動向がみられた。

2002 年11月に開催された中共第16回全国代表大会において、当時の江沢民総書記は、「全面的に和諧社会を建設し、中国の特色がある社会主義事業の新局面を切り開こう」との報

告の中で、初めて党の正式な公文書に文化を文化事業と文化産業に分け、積極的に文化事業と文化産業を発展させることが強調された[69]。「憲法」において文化事業として「文学・芸術事業、新聞・ラジオ・テレビ事業、出版発行事業、図書館・博物館・文化館その他の文化事業」（第22条）と示されているが、政府が「文化産業」という言葉を初めて使ったのは「国家十五計画」[70]（2001年～2005年）（以下、十五計画）の第十一章である[71]。「十五計画」のなかで、文化事業の推進と同時に、産業政策の改善、文化市場建設と管理の強化を通じ、文化産業の発展を促進すると定められた[72]。国家「十一五計画」（2006年～2010年）、「十二五計画」（2011年～2015年）、「十三五計画」（2016年～2020年）期間中にも文化産業の発展に関する項目が定められており、文化産業は現在中国経済発展の重要な産業となっている。「十二五計画」を受け2012年には、国務院「国家十二五時期文化改革発展計画」は発表され、同計画では、「文化産業は国民経済の支柱となる産業である」ことが示された。

2003年に中央宣伝部は北京で「全国文化体制改革試点工作会議」を開催し、文化体制改革の試行を行うことを決定した。北京、上海、重慶、広東、浙江、深圳、瀋陽、西安、麗江の9つの市を文化体制改革総合性モデル地域と確定した[73]。続き、2005年12月に中共中央と国務院は「文化体制改革の深化に関する若干の意見」を発表した。さらに、上述のように2011年に中共第17期中央委員会第６次全体会議では、「文化体制改革の深化による社会主義文化大発展、大繁栄の推進に関する若干の重大問題の決定」（以下、「決定」）が審議され、文化強国をめざす国家戦略が明確に示された。「決定」は９つの部分からなる。その第二の部分では、中国の特色のある社会主義文化発展の道を堅持し、社会主義文化強国の建設に努めることが示された。「文化強国」実現のための新たな要請として、2020 年までに以下の文化改革が必要とされる。すなわち、「良好な思想道徳風格を高揚し、公民の素養を向上させる。人民の需要に適応した文化生産品は豊富である。公共文化サービス体系の基本的整備を普及させる。文化産業は国民経済の支柱的産業として、全体的実力と国際的競争力をいっそう強める。公有制を主体とし、各種所有制が共に発展した文化産業構造を構築する。民族文化を主体とし、外来の有益な文化を吸収し、世界に向けて中華文化を推進する」と明記した。この時期の特徴のその一つとして、中国政府による中華文化の復興の取組みが進められている。例えば、中国政府は文化交流イベントを実施し、国外向けに中国文化を紹介し、世界各地に孔子学院を設置している。これらを通じて中華文化を世界に発信して、感化力・影響力を拡大し、「文化強国」を実現に努めている。

このように2001年のWTOの加盟をきっかけに中国のグローバル化、市場化の進展に伴い、新たな国家戦略として文化政策を重視し、政府指導で中華文化のソフト・パワーを強化する動きである。中国は文化強国を実現するために文化体制改革が行われ、公共文化サービ

スへの基本的需要を満たす文化事業の強化と新たな国家支柱産業としての文化産業の発展の取り組みが進められた。すなわち、「文化事業」を強化し、「文化産業」を振興しようとする文化体制改革であり、「公益性文化事業」と「経営性文化事業」に区分した。

２．民族文化政策の特徴

中国の国家計画のもとで、2005年に国務院「『中華人民共和国民族区域自治法』の実施に関す若干規定」（以下、「若干規定」）が発布された。これは「民族区域自治区」が発布されて以来、その実行に関する初めての行政法規である[74]。「若干規定」の第24条では少数民族文化体制について以下にように示した。「上級人民政府は政策と資金面で民族地域の少数民族文化事業の発展を支持する。文化施設の整備を強化し、民族特色がある公益性文化事業を重点的に扶助する。民族自治地方の公共文化サービス体系の建設を強化し、民族文化産業を発展させる。国家は少数民族メディア出版事業の発展を支持し、少数民族言語での放送、映画、テレビ番組の制作をしっかりと行い、少数民族言語文字出版物の翻訳と出版を扶助する。優れた少数民族伝統文化を継承し発展させる。定期的に少数民族体育運動会、少数族文芸コンクールを行い、民族文芸の創作を繁栄させ、各民族の民衆の文化生活を豊かにする」と挙げられた。また、2009年の「更なる少数民族の繁栄・発展に関する若干意見」においては、少数民族文化産業の発展を促進することが提示された。グローバル化時代における少数民族の文化政策の特徴をまとめると以下の３点が挙げられると考える。

１つ目は、少数民族地域における公共文化施設の整備の普及を図っている。

2005 年以降においては、表１－１（次のページ）に示したように文化振興の一連の計画、規定、通知が出された。政府は財政方面から民族文化の振興、民族教育事業、民族人材養成を重視し、公共文化サービス体系の確立を強調した。特に、辺境地域や農村地域に力を入れ、都市部と農村の教育格差を縮小するため、民族自治区には公共文化サービス機関の設置を目指している。たとえば、2006 年まで、全国の民族自治区に民衆文化事業機関を 7423 ヵ所設置し、1979 年に比べ 3.8 倍に増加した。文化館は 631 館、文化ステーションは 6710 ヵ所になった。1983 年に比べて、図書館は４倍（602 館）、博物館は６倍（190 館）に増加した[75]。こうした基層レベルの公共文化施設は無料開放されている。例えば、「文化建設十一五計画」（2006 年～2010 年）では、2010 年までに都市部では、10 万人ごとに公共文化サービス機関 1 つを設置し、農村郷鎮に公共文化施設設置率を 98%以上にするという目標が設定された。

表1-1．2005年～2007年の文化振興政策

実施年	計画・規定・通知
2005年	1)「中共中央国務院が民族工作への強化、少数民族地区の経済社会発展に関する決定」
	2)「国務院「中華人民共和国民族区域自治法」実施のための若干決定」
	3)「人口が比較的に少ない少数民族の発展を扶助する計画（2005年～2010）」
2006年	4)「国家十一五文化発展計画綱要」（2006年～2010年）
	5)「文化建設十一五計画」
2007年	6)「少数民族事業十一五計画」
	7)「公共サービス体系確立の強化に関する若干意見」
	8)「十一五全国郷鎮文化綜合建設計画」

２つ目は、文化産業振興が進められた。

既述のように、文化産業は現在中国経済発展の重要な産業となっている。地方政府は国家文化発展計画を踏まえた「文化発展企画」、「文化産業発展企画」などを発表し、各地域の特性や地域資源を活用した文化政策を展開している。

例えば、表１－２（次のページ）は、内モンゴル自治区文化庁の 2008 年度、2010 年度、2012 年度の活動の総括である。ここからは、近年の内モンゴル政府の文化活動の中心は芸術創作、文化サービス体系の推進、文化体制改革の推進、文化遺産の保護、文化産業、文化交流という側面が強調されたことがわかる。また、文化伝承人の認定や芸術郷の命名を推進する一方、近年の新たな動向として文化産業の発展を促進しアニメの発展を支えることが強調された。

内モンゴル政府は「十一」期間に「民族文化地域」づくりを目標として取り組みを行ってきた。2013 年に「内モンゴル自治区十二五文化発展計画」では「文化大地域」から「文化強地域」の実現を目指し、文化産業の発展を推進するようになった。内モンゴルの文化産業政策の主な内容としては、演芸・芸能、文化観光旅行、工芸美術、文化娯楽、アニメ・漫画、芸術品、文化コンベンション、芸術デザイン、インタネット文化、デジタル文化サービスなどの文化産業を育成することに重点が置かれた。さらに、内モンゴルに文化産業を集積したモデル地域を建設し、周辺地域の文化産業の発展を促進することを目指している。

表1－2．内モンゴル自治区文化庁2008年、2010年、2012年度活動総括

年度	活動総括	ポイント
2008年	1．科学的発展観活動を展開し、文化活動の全面的発展の思想基礎となった。 2.芸術創作は新たな成果をあげ、芸術活動は多彩である。 3．文化サービス体系の構築を絶え間なく改善し、社会文化事業を発展させた。 4.文化遺産保護に力を入れ、民族文化の伝承、利用、創新活動を推進した。 5．管理を強化し、文化市場の秩序を規範化した。 6.文化体制改革を推進し、文化建設を強化した。 7.対外文化交流を拡大し、草原文化の影響力を拡大した。 8.徹底的に中央と自治区精神を実行し、文化活動は金融危機に積極的に対応し、自治区の発展に大きな役割を果たした。 9.反腐敗活動を重視した。	・208名自治区無形文化遺産代表伝承人を認定した。 ・第四回自治区民間文化芸術郷36の地域を指定し、自治区の芸術之郷は67となった。 ・「内モンゴル2008～2010年文化産業発展計画」を策定した。
2010年	1．文化サービス体系を推進し、文化サービスを向上し、民衆の精神文化需要を満足させた。 2.芸術創作と演出は多彩であり、大規模に芸術祭活動を展開した。 3．文化遺産保護に力を入れ、民族文化の伝承、利用、創作活動を推進した。 4.管理を強化し、文化市場の安定的な発展を促進した。 5.文化産業の発展を促進した。 6.文化体制改革を推進し、文化建設を強化した。 7.対外文化交流を促進し、草原文化の影響力を強めた。 8．反腐敗活動を重視した。	・博物館の無料開放は自治区の「全区十大民生プロジェクト」の一つとなった。 ・「十二五」期間に自治区では、40の文化産業モデル地区を作る。 ・自治区10の動漫会社を扶助し、アニメの発展を支える。
2012年	1．文化サービス体系の構築を改善し、文化事業を推進した。 2．芸術創作と演出は多彩である。 3．文化保護遺産活動は一定の成果があった。 4．管理を強化し、文化市場の発展を促進した 5.文化産業の発展を促進した。 6．文化体制改革を推進し、文化建設を強化した。 7．対外文化交流を促進し、草原文化の影響力を強めた。 8.党の組織建設を強化し、文化建設の政治的保障となった。	・「全国美術館、公共図書館、文化館（ステーション）の無料開放に関する意見」の通知を発表した。 ・「自治区人民政府文化産業発展の若干政策意見」を制定した

出所：内モンゴル自治区文化庁発表の年度総括により筆者作成

３つ目は、「中華人民共和国無形文化遺産法」（2011 年 6 月施行）の制定による伝統文化の再認識と保護が行われている。

グローバル化が進む中、中国政府は、漢族を含め各民族の多様な文化遺産を保護しようとする意識が高まってきた。その背景として、2001 年にユネスコは「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」を公表し、2003 年に「無形文化遺産保護条約」を発表した。中国も近年、無形文化遺産の保護を重視するようになり、2003 年から「中国民族民間文化保護プロジェクト」を稼働させ、民族民間文化の整理、調査、記録を行うようになった。2005 年に国務院は「文化遺産保護の強化に関する通知」を発布し、中国は文化遺産保護事業に取り組んだ。2006 年に、指定保護政策をとり、中国初の国家レベルの無形文化遺産代表リストを公布した[76]。2011 年 2 月 25 日、全六章 45 条で構成されている「中華人民共和国無形文化遺産法」が第 11 期全国人民代表大会常務委員会第 19 回会議で可決され、同年 6 月 1 日に施行された。2011 年に「無形文化遺産法」を公表し、地方政府も次々と各地域の無形文化遺産を保護する条例などを制定した。

グローバル化の全般的な状況の中で、ユネスコの無形文化遺産保護条約の成立・発効と無形文化遺産の登録は締約国の文化政策に大きな影響を与えている[77]。ユネスコから発せられた文化政策ないし戦略は世界規模の流れの中で各地の文化と相互作用を起こしながら「無形文化遺産の保護に関する条約」に加盟した中国の文化状況を変えており、中国における国や地方の動きはこうした文化状況に積極的に対応し、国と地方政府という二つの異なるローカルのレベルでの実践が存在するといえる[78]。例えば、謝荔の研究は中国の法定祝祭日[79]の再構築のプロセスに現れるグローバルなものとローカルなものとの相互作用現象について考察した。グローバルな文化動態に連動したローカルレベルの動きとして、中国では「無形文化遺産保護条約」に加盟した後で、端午節をはじめ祝祭日に関連する「民族民間文化」が無形文化遺産として位置づけられ、その保護・伝承を強化する政策と法律が次から次へと制定・施行されるようになった。すなわち、中国の祝祭日に関する法律改定は、外部のグローバルな文化の動きの刺激を受けながら、自らの伝統的文化に再認識・再評価のもとで行われ、その結果、伝統的な祝祭日の清明節、端午節と中秋節が国の法定休日に取り入れられ、「民族国家の暦」が再構築されたといえる。もう一つの事例として、2006年には、国家よりモンゴル族の伝統文化であるアンダイ舞踊が無形文化財に指定された。地方政府はアンダイ文化を通じて知名度を高めるため政府主催の「中国・アンダイ文化芸術祭」の開催を行ったりした。アンダイの発祥地域とも言われる内モンゴルのクロン旗は2011年に国家文化部に「中国民間文化芸術の郷」と命名された。

習近平政権になってから2016年に初めての五カ年計画（2016～2020年）が発表された。同計画（「十三五計画」）は、小康社会を全面的に実現する最後の５ヵ年計画であることが強調されている。小康社会を全面的に実現するという目標を達成するには、経済を発展させるだけでなく、「国民の素質と社会の文明程度を顕著に向上させる」とし、国民の思想道徳、科学文化、健康健全な素質を顕著に引き上げなければならない。2020年までに、公共文化サービス体系を実現しなければならない。文化産業を国民経済の支柱的産業とし、同時に中華文化を世界に発信して、感化力・影響力を引き続き拡大しなければならない、と謳われた。2000年以降の中国政府の文化政策の制定とその展開、さらには文化的ソフト・パワーや国際的影響力の強化は国民の文化的アイデンティティの向上を引き上げようしていると言えよう。

本章では中華人民共和国の建国から現在までの民族文化政策の展開を検討し、各時期における民族文化政策の特徴とその背景にある国家の政策的意図を探った。

新中国成立期の少数民族文化政策（1949年～65年）の特徴は各民族間の相互理解と団結

を促進されることを前提にしながら、少数民族地域の文化事業を発展させ、伝統文化の保護を行った。建国間もない中国では中国共産党により各民族の文化的・歴史的伝統を尊重しながら、少数民族への融和政策をすすめたが、権力基盤が脆弱だった中国は、こうした理想を掲げながらも、民族識別によって国内の少数民族を確定するなど国家的統合が喫緊の課題でもあった。中共は「文芸は工農兵に服務し、文芸はプロレタリアに服務する」ことを重視し、辺境にある少数民族を共和国のメンバーとして一体感を作り出すため文化芸術を通じて「革命精神」を宣伝し、毛沢東思想を民衆に伝達していた。すなわち、文化には「革命精神」を宣伝する教化的機能が内在していたといえよう。

文化大革命期（1966 年～1976 年）には一元的な政治的・文化的統合が強行され、社会主義期における民族問題の存在を否認し、少数民族の文化が破壊され、「革命模範劇」はすべての音楽舞踊芸術の形式を変えた。

改革開放時期（1977 年～2001 年）は民族文化工作が回復され、各民族の文化を振興させることに着手し、少数民族の事実上の不平等をなくそうとした。そして、1984 年に中国の民族問題を解決する基本政策である「民族区域自治法」が制定された。経済成長とグローバル化の進展は、沿岸の経済発展地域と内陸の経済後進地域の格差を広げ、内陸に位置する少数民族地域は貧困という問題に直面していく。改革開放時期には、市場経済やグローバル化を背景に流入する豊かな漢族とともに経済発展にキャッチアップしていくことで民族意識を強化しようと模索する段階にあるといえる。この時期の特徴としては、経済建設を中心に民族文化の振興が進められた。特に、少数民族と漢民族の経済格差を是正し、経済統合を通じて少数民族の中国人アイデンティティを強化するために地域の産業化を推進することが有効な手段になった。格差是正の一環として、民族自治地域への投資と西部大開発政策が進められた。その背景には国家の経済計画の需要に基づき、民族地域経済建設を加速させる意図があるとともに経済統合を通じて少数民族の国家への帰属意識の強化があったと考えられる。

2001 年の WTO の加盟をきっかけに中国のグローバル化、市場化の進展に伴い、新たな国家戦略として文化政策を重視し、政府指導で中華文化のソフト・パワーを強化し、中国政府による中華文化の復興の取組みが進められた。グローバル時代における少数民族文化政策（2002 年～現在）の特徴として、少数民族地域における公共文化施設の整備の普及から各地域の特性や地域資源を活用した文化産業振興が進められた。すなわち中国は文化強国を実現するため公共文化サービスへの基本的需要を満たす文化事業の強化と新たな国家支柱産業としての文化産業の発展の取り組みが進められた。このように近年の中国は文化強国をめざす国家戦略を推進しているが、とりわけ少数民族の文化を「中華民族の優秀文化」

として宣伝・称賛し、エスニック・アイデンティティを刺激しながらも、国民文化へと還元しようとしている。

これらの検討を通じて、中央による民族文化政策は「国民統合」と「民族文化の保護」という両義性をもって推進されてきたことをわかる。文化面における国民統合は、建国から現在までの各時期において、異なるスローガンと民族政策により推進されたが、そこには一貫して少数民族の国家への求心力を強化することが目指されてきたことを明らかになった。以下第二章では民族文化政策の「国民統合」と「民族文化の保護」という両義性は地方レベルにおいてどのように具体化し実施されているかを内モンゴルのウランムチの活動より明らかにしたい。

---

[1] 『当代中国の民族工作』(上) 当代中国出版社、1993 年、p.51。

[2] 同上、p.89。

[3] 中国法律法規信息 (情報) 庫 http://law.npc.gov.cn/FLFG/flfgByID.action?txtid=1&flfgID=41766&showDetailType=QW (2017 年 11 月 20 月最終確認)

[4] 中国人大網 www.npc.gov.cn (2017 年 11 月 20 日最終確認)

[5] 『当代中国の民族工作』(上) 前掲書、p.91。

[6] 毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』東京大学出版会、1998 年、pp.45－46。

[7] 同上。

[8] 黄光学・施聯朱『民族識別―56 民族の来歴』民族出版社、2005 年、p.104。

[9] 費孝通 (塚田誠之訳)「エスニシティの探求―中国の民族に関する私の研究と見解」費孝通『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年、p.312。

[10] 同上。

[11] 黄光学・施聯朱『民族識別―56 民族の来歴』前掲書、p.104。

[12] 同上、p.76。

[13] 同上、p.81。

[14] 同上、p.82。

[15] 王柯「『少数民族』から『国民』への道程―現代中国における国民統合という視点から」『アジア研究』Vol.47、No.4、アジア政経学会、2001 年、pp.43-44。

[16] 黄光学・施聯朱『民族識別―56 民族の来歴』前掲書、p.102。

[17] 同上、pp.114-117。

[18] 瀬川昌久「中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義」『東北アジア研究』第 3 号、東北大学東北アジア研究センター、1999 年、pp. 89-90。

[19] 王柯「『少数民族』から『国民』への道程―現代中国における国民統合という視点から」前掲論文、p. 44。

[20] 新華社通信『新聞稿』1953 年 11 月 5 日。（王柯「『少数民族』から『国民』への道程―現代中国における国民統合という視点から」前掲論文、p. 44 より引用）

[21] 王柯「『少数民族』から『国民』への道程―現代中国における国民統合という視点から」前掲論文、p. 44。

[22] 毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』東京大学出版会、1998 年、p. 74。

[23] 王柯『多民族国家　中国』岩波書店、2009 年、p. 68。

[24] 第一回全体会議（1949 年 9 月 27 日）では「中華人民共和国中央人民政府組織法」は批准され、「組織法」によって「国家政務の最高執行機関」である「政務院」に全国の民族事務を主管する「民族事務委員会」を設立することが決まった。

[25] 『文化工作文献資料編集 1949-1959（一）』pp. 420-422。

[26] 同上、pp. 423-426。

[27] 「延安の文学・芸術座談会における講話」（1942 年 5 月）、『毛沢東選集』第３巻（李珊『新中国文化政策与少数民族音楽舞踊芸術的発展』西南交通大学出版社、2011 年、p. 89 より引用）

[28] 李珊『新中国文化政策与少数民族音楽舞踊芸術的発展』西南交通大学出版社、2011 年、p. 89。

[29] 『文化工作文献資料編集 1949-1959（一）』p. ４。

[30] 劉源泉『中国共産党少数民族文化政策研究』人民出版社、2014 年、pp. 116-117。

[31] 李資源等『中国共産党少数民族文化建設研究』人民出版社、2011 年、p. 95。

[32] 劉源泉『中国共産党少数民族文化政策研究』前掲書、p. 117。

[33] 王柯「少数民族」から「国民」への道程―現代中国における国民統合という視点から」前掲論文、p. 50。

[34] 王柯『多民族国家　中国』前掲書、p. 183。

[35] 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育―『民族平等』理念の展開―』東信堂、2001 年、p. 61。

[36] 毛里和子「中国―国家統合と『上からの近代化』の中のマイノリティ」江口朴郎編『現代世界と民族』山川出版社、1987 年、p. 472。

[37] 毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』前掲書、p. 95。

[38] 同上。

[39] リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』集広舎、2015 年、p. 170。

[40] 『当代中国の民族工作』編集部『当代中国民族工作大事記（1949～1988）』民族出版社、1989 年、p. 122。リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』集広舎、2015 年、pp. 170-171。

[41] 加々美光行『中国の民族問題　危機の本質』岩波書店、2008 年、p. 149。リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』前掲書、p. 171。

[42] 同上、p. 8。
[43] 毛里和子「中国―国家統合と『上からの近代化』の中のマイノリティ」江口朴郎編前掲書、p. 474。
[44] 毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』前掲書、p. 102。
[45] 李珊『新中国文化政策与少数民族音楽舞踊芸術的発展』西南交通大学出版社、2011 年、p. 102。
[46] 「林彪同志委託江青同志召開的部隊文芸工作座談会紀要」(辻田正雄「『文芸黒線専政』論の否定について」佛教大学学術委員会・ 文学部論集編集委員会 編『文学部論集』第 95 号、2011 年 3 月、p. 129 より引用)
[47] 『当代中国的民族工作』(上)、前掲書、pp. 146-147。
[48] 同上、p. 148。
[49] 「四旧」とは、旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣をいう。
[50] 『当代中国的民族工作』(上)、前掲書、p. 158。
[51] 同上、p. 103 。
[52] 同上。
[53] 毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』前掲書 p. 117。
[54] 『当代中国の民族工作』編集部『当代中国民族工作大事記(1949～1988)』民族出版社、1989 年、p. 239。
[55] 同上。
[56] 『当代中国』シリーズ編集委員会『当代中国の民族工作』当代中国出版社、p. 160。
[57] 毛里和子「中国―国家統合と『上からの近代化』の中のマイノリティ」江口朴郎編前掲書、p. 476。
[58] 国家民族事務委員会・中共中央文献研究室編『新時期民族工作文献選編』中央文献出版社、1990 年、pp. ５－６。
[59] 「少数民族文芸工作大事紀略」『中国民族』民族出版社、2001 年 9 月、p. 27。
[60] 国家民族事務委員会文化宣伝司・中国社会科学院文化研究中心編『中国少数民族文化発展報告 (2008)』民族出版社、2009 年、p. 10。
[61] 王柯『20 世紀の中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、2006 年、p. 273－274。
[62] 同上、p. 273。
[63] 王柯『多民族国家　中国』前掲書、p. 165。
[64] 同上。
[65] 同上、p. 167。
[66] 上野稔弘「民族区域自治改正に見る中国民族法制の現状」『東北アジア研究』第 6 号、東北大学東北アジア研究センター、2001 年、pp. 56-57。
[67] 佐々木信彰「多民族国家中国と民族区域自治区政策」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想、2001 年、p. 12。
[68] 瀬川昌久「中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義」前掲論文、p. 87。
[69] 李資源等著『中国共産党少数民族文化建設研究』前掲書、p. 501。

[70] 第 10 次 5 カ年計画。対象期間は 2011 ～ 2015 年である中国政府は 1953 年から「五年計画」を作り続けた。中国国家発展改革委員会のデータにより、国家経済発展計画の一部分として、「五年計画」は重要な建設項目、生産力の配分と国民経済の構成比率などを計画し、五年の期間中、国家経済の発展目標を発展と発展方向を示すものである。

[71] 徐隆「中国文化産業政策における動漫産業の位置づけと同産業振興政策に対する評価」『政策科学』20-1、政策科学学会、2012 年、p. 190。

[72] 同上。

[73] 李資源等著『中国共産党少数民族文化建設研究』前掲書、p. 501。

[74] 同上、p. 508。

[75] 张晓明・惠明・徐平「科学発展観のもとに少数民族文化を促進させる」『中国少数民族文化发展报告（2008)』民族出版社、2009 年、p. 8。

[76] 馮彤「中国の無形文化財の保護に関する一考察」『北東アジア研究」第 13 号、島根県立大学北東アジア地域研究センター、2007 年、pp. 137-138。

[77] 謝荔「グローカル化における祝祭日の再構築―中国の端午祭の文化変容を事例に―」韓敏編『中国社会における文化変容の諸相―グローカル化の視点から―』風響社、2015 年、p. 127。

[78] 同上、p. 126。

[79] 謝荔の論文で取り上げた祝祭日は中国の祝祭日に関する法律「全国年節及記念日放假辦法」に規定された伝統的な祝祭日に限る。公休日に指定されていない祝祭日や少数民族地域の祝祭日は本研究の対象外である。

第二章　民族文化活動の展開―内モンゴルのウランムチを事例に―

本章では国家の民族文化政策を受けて地方レベルにおいてはどのような文化活動が展開されてきたのかについて検討する。すなわち、国家政策のもとで地方レベルでの民族文化活動の変遷をたどり、時代ごとにおける民族文化活動の実態を明らかにする。ここで、内モンゴルのウランムチ芸術団体（以下、ウランムチ）の事例を取り上げ、ウランムチが結成された 1957 年から現在までの活動の展開を解明する。分析方法としては、第一章で設定した時期区分に沿って、ウランムチを４つの時期区分し、各時期における活動の変化を分析する。つまり、ウランムチの草創期（1957～65 年）、ウランムチの停止期（1966～76 年）、ウランムチの回復・改革期（1977～2001 年）、ウランムチのブランド化期（2002 年～現在）である。本研究で取り上げるウランムチは民族的特徴（形式）を通じて少数民族に政治・政策を宣伝するという目的で結成された芸術団体である。したがって、ウランムチには「政治・政策の宣伝」と「民族文化の普及」という両義性があった。ウランムチにはなぜこのような「両義性」が与えられたのか。検討にあたって主に、内モンゴル自治区政府から出された政策資料、通知、公文書とウランムチに関する歴史的な資料の分析、ウランムチの団員への聞き取り調査のデータに基づき検討する。

第１節 ウランムチの基本状況と時期区分

１．ウランムチに関する基本状況

モンゴル語で「ムチ」は「新芽」の意味で、「ウラン」は「赤い」の意味である。そのため、「ウランムチ」は赤い文化活動団体ともいわれる。ウランムチは内モンゴルの遊牧民が分散して居住しているという実際の状況に対応して結成された文化活動団体であり、現在では内モンゴルの各旗、県に内モンゴル直属ウランムチを含めて 68 団体がある[1]。ウランムチという名前の由来について『ウランムチ之路―ウランムチ結成四十周年記念―（1957～1997）』[2]（以下、『ウランムチの路』）では以下のように説明されている。

文芸工作は毛沢東「延安文芸座談会における講話」で論じられているようにプロレタリア階級革命事業の一部分である。革命事業を「大きな木」に例えれば、文化芸術事業はその「枝葉」になる。その遊牧地域における文化活動団体は「新芽」になると例えられた。新中国において「赤い文化活動団体」と名付けられたのは、ウランムチが重要な任務を負って、団員が仕事に懸命に励む奮闘精神を激励する意味が込められていた。

現在では内モンゴルの各旗、県のウランムチは 67 団体がある。1950 年代に 16 団体、1960 年代に 38 団体、1970 年代に５団体、1980 年代に１団体、1990 年代に１団体、2005 年に１団体、2006 年に２団体、2007 年に３団体が結成された[3]。

加えて、内モンゴル自治区政府直属ウランムチが 1 団体ある。1966 年 9 月 10 日に結成されたもので、国家と内モンゴルの重要な活動及び接待の任務を担当する。結成以来、農村遊牧地域で上演するとともに、国内の省、自治区、市などの地域と国外の地域を訪問している。ウランムチの活動は上演を中心に、民衆に党の政策を宣伝し、民衆のアマチュア文芸活動を指導し、民衆に奉仕することであった。

２．ウランムチの歴史的変遷の時期区分

ウランムチは結成されて以来現在までの 60 年間において、その活動は国の政治的背景や政策により大きく左右され、ウランムチの役割に変化が起こった。したがって、本研究では、ウランムチの歴史的変遷をウランムチの役割の変化に基づき、４つの時期に分ける。

1957 年～1965 年は、ウランムチが結成された時期である（ウランムチの草創期)。1957 年に中共の中央執行部と内モンゴル党委員会は特に遊牧地域、半農半牧などの遅れた地域の経済と文化を発展させると確約し、内モンゴルの遊牧民が分散し居住している状況に基づき、移動して文化活動を行う文化活動団体を組織し、ウランムチが結成された。この時期は 44 のウランムチが結成され、主に農村遊牧地域へ党の宣伝と民衆文化活動をおこなっていた。

1966 年～1977 年は､ウランムチが麻痺状態になった時期であった(ウランムチの停止期)。文革時代に社会主義における民族問題の存在を否認し、一部のウランムチの活動は停止された。活動を続けたウランムチは毛沢東文芸思想の宣伝団体となり、名称を「毛沢東思想宣伝隊」と変えたウランムチもあった。この時のウランムチのプログラムは革命様板劇（革命模範劇）を上演することが中心になっていた。

1977 年～2001 年は、ウランムチの活動が回復し、ウランムチの改革が求められた時期である（ウランムチの回復・改革期)。この時期がウランムチの回復・改革時期といえるのは、1978 年の第 11 期３中全会により、中国は社会主義事業の新しい歴史発展時期に入り、国の民族工作は民族団結、少数民族経済、文化を発展させるとしたからである。ここから民族文化事業は文革時期から回復するようになった。また、改革開放後の市場経済の導入は市場経済に対応したウランムチの管理運営が求められるようになった。ウランムチの改革は団長の管理責任制、団員の任用制を採用するということからはじまり、団長は責任をもってウランムチを運営し、各ウランムチは独自の発展を目指すことになったのである。ウランムチは上演を通じて、国家財政への依存からウランムチの芸術作品の商業化により利益を得、財政上の不足を補うようになった時期である。

2002 年からウランムチのブランド化が進められた時期である（ウランムチのブランド化期)。地方政府はウランムチの知名度を高め、内モンゴルの市場経済発展の主要な事業として位置づけられるようになった。政府はウランムチに対しての指導を強化し、ウランムチの年度事業費を増やし、ウランムチを地方政府の活動の中に組み込むということが推進されている。例えば、ウランムチは「企業誘致資金導入方式」を取り、多くの観光客及び新規参入の事業者等を招き、商取引を促進することで、旗政府の活動を担うことになった。

本研究では内モンゴルのウランムチに着目して、党の政策の宣伝と民族文化の普及を目的として結成されたウランムチの草創期から現在までの歴史的変遷と実態を検討することを通じて、社会主義国家中国における芸術団体の動きを明らかにし、時代ごとにおける民族活動の変遷をみる。ウランムチは社会主義文化芸術の普及活動に従事するが、ウランムチは結成されてから現在までに多くのモンゴル族の芸術家やモンゴル人に愛された民族の歌、舞踊、劇を創作し、モンゴル文化の普及に一定の役割を果たしてきたと考えられる。こうした活動は第一章で検討した中国の民族文化振興政策のもとで進められている。したがって、ウランムチの検討を通じて中央の政策を受け、地方の文化活動はどのように受け入れているかを検討し、中国における国家民族政策のもとでの地方政府の対応及び民族文化活動の置かれた状況とその課題を明らかにする。

第２節　ウランムチの草創期（1957 年～1965 年）

1957 年に内モンゴルのシリンゴル盟のソニトユウ旗に最初のウランムチが結成された。本節では、ウランムチが結成された背景やウランムチの役割、任務と結成された当初の活動を考察することで草創期におけるウランムチの活動の実態を検討する。

１．ウランムチ結成の背景

ウランムチの結成の背景を『ウランムチの路』によりまとめると次の二点を指摘することができる。第１は中央政府からの要求である。1957 年ごろから中国は農業合作化と資本主義商工業の社会主義的改造を進める社会主義建設に入った時期であった。1956 年に開催された中共第八回全国代表大会では、「我国は基本的に社会主義制度を建設した。国内の主要矛盾は労働者階級と資本階級の矛盾ではなく、経済、文化の迅速な発展における要求と直面する経済、文化が国民の必要を満たしていない状況の間の矛盾である」[4]と指摘した。当時の内モンゴル、特に遊牧地域、半農半牧地域は経済が遅れて、文化生活面でも豊かで

はない。民衆文化を活性化させるため内モンゴルでは文化館と文化ステーションは建設されていたが、十分に機能することができていなかった。そのため中共の中央執行部と内モンゴル党委員会は各地少数民族地域、特に牧畜地域の経済と文化の発展を求めていた。

第２は、当時の内モンゴルの状況はウランムチを必要としていた。内モンゴルでは特に牧畜地域にラジオ・テレビの放送や映画、演劇が普及していなかった。遊牧地域、半農半牧地域は地域が広く、住民は分散して居住しており、交通不便であった。1957 年に内モンゴル文化局は実際の状況を分析し、牧畜地域を文化活動の実験地に指定した。内モンゴル民衆芸術館館長を中心とした活動グループはシリンゴル盟のソニトユウ旗、セイラン旗及びウランチャブ盟の達茂旗等の地域に派遣され調査を行った。活動グループのメンバーはこれらの地域の調査を通じて、内モンゴルには「整備が軽便であり、人員は多芸であり、流動に便利である小型総合文化活動団体を結成する」ことに一致したのである[5]。

この構想に基づき、内モンゴルの牧畜地域では文化活動団体が組織され、「ウランムチ」と名づけられた。このウランムチのモデルをジョオダ盟のオンニュド旗とシリンゴル盟のソニドユウ旗に設定した。ソニドユウ旗のウランムチは最も早い時期(1956 年 6 月 17 日)に活動を試行したことでの最初のウランムチであるといわれる[6]。1958 年 1 月 10 日に内モンゴル人民委員会は内モンゴル文化局「牧畜地域と半農半牧地域におけるウランムチの建設に関する報告」を批准した後、内モンゴル各旗、県において続々とウランムチが結成された。

２．草創期における「ウランムチの工作条例」（草案）の制定

内モンゴル文化局はウランムチの活動を明確にするため「ウランムチの工作条例」(草案)（以下、「工作条例」）を 1957 年 5 月 27 日に制定した。「工作条例」では、ウランムチの役割、方針、任務、ウランムチの活動原則及び基本活動方法、ウランムチの組織分業などを以下のように規定した。

ウランムチは政府が牧畜地域の民族に民衆文化工作を展開するため、また民族の民衆文化生活を活発にさせるために設立した総合的な基層文化事業機関である。ウランムチは柔軟性のある、民族的な特徴をもつ文化宣伝の形式を用いて、遊牧地域の広大な労働人民を対象に巡回サービスと指導活動を行い、民族文化遺産を継承し発展させ、牧畜民の文化要求を満足させる。

ウランムチは牧畜地域の政治、経済の発展に協力すべきである。遊牧地域の民族的な特

徴に基づいて、社会主義思想や党と政府の各政策、法令及び時事を宣伝し、牧畜民の政治的自覚を高める。また、牧畜地域の民衆文化事業を発展させ、遊牧民のアマチュア文化芸術活動を組織・指導し、民族自治区における社会主義的民族的新たな文化の発展を促進する[7]。

上記に述べた基本工作の任務を完成するため、ウランムチは以下のような活動を行う。

①民間の芸人との交歓、または個別に取材するなどのような、各種の形式と機会を利用し、民衆文化事業の指導を行う。特に、民間芸人の組織的活動や牧畜民のアマチュア文化組織に対して重点的に指導する。これらの活動を通じて、民衆の文化生活を活気づけ、日常生活及び生産に関する科学や衛生の知識を普及させ、全人民的な文化活動を展開し、そしてその中から自らの活動内容を豊かにする。

②民族や民間の伝統的文化芸術の宣伝形式を活用する。たとえば、好来宝、説唱、歌舞、演劇、幻灯、図画、新聞・雑誌、図書等の内容と形式で活動をおこなう。

③民間の文化芸術遺産を収集し整理する。地域の特徴と合致し、そして牧畜民の好む文化芸術作品と宣伝材料を編集、創作し民衆活動の需要を満たす[8]。

上記の「工作条例」の内容から、ウランムチは党と政府の政策の宣伝、遊牧民にアマチュア文化芸術活動を指導するという任務が策定されていることがわかる。また、ウランムチは民族民間文化芸術遺産を収集し、牧畜民の好む文化芸術作品と宣伝材料を編集し創作するという機能をもっている。つまり、当初ウランムチを結成する意図は社会主義建設の宣伝と民衆文化を活発にするという点であった。一方、「工作条例」に定めている通り民衆に対して「日常生活及び生産に関する科学や衛生の知識を普及させる」という教育的な役割も果たしていたといえよう。

３．ウランムチ結成当時の基本状況と活動の展開

以下、ソニドユウ旗ウランムチの事例を取り上げ、ウランムチの基本状況をみたい。

（１）ソニドユウ旗ウランムチの結成基本状況

ソニドユウ旗ウランムチの当時の団員は、旗所属の機関や民間から選ばれた人々によって構成された。当時の団員は表２－１に示した 10 人に車夫２人を加えた 12 人であった。この 10 人の元の職業は様々であり、文化館、教育局などの仕事に携わっていた人々と小学校の教師や牧民により構成された。このようにウランムチの団員は正式な専門芸術訓練を受けた人ではではなく、各機関や民間から選ばれた多芸多才な人であったといえる。また、

表2-1. ソニドユウ旗ウランムチの団員

名前	ウリジトクト	イーラン	ウユンビリコ	アラタト	ウニゲルラ
元の職業	文化館館長	団委幹部	文教科幹部	文化館幹部	文教科幹部
名前	エルヘムト	スチンドルジ	エルドンダライ	ナリントヤ	レンホワー
元の職業	小学校の教師	牧民	牧民	歌手	商業局幹部

出所：内モンゴル自治区文化庁編『ウランムチの路』内モンゴル人民出版社、1997年、p.81より作成。
※団委は中国共産主義青年団委員会の略称。

ウランムチ試験団体の装備の状況からみると、移動に便利であるということで、馬車２台、馬６匹、幕２枚、楽器（三弦、四胡、馬頭琴、笛、アコーデオン）、ラジオ１台、テント２張などを所有しいていた。

「工作条例」ではウランムチの人員に対して、「主任１～２人、歌いと踊り手３～４人、説唱芸人１～２人、宣伝人２～３人、収集・編集・創作人１～２人を配置することができる」と規定した。また、ウランムチの経費は国家文化事業費から支出することが定められた。既述のようにウランムチの団員は各機関や民間から選ばれた多芸多才な人といわれるが、ウランムチは結成された後に内モンゴル文化局はウランムチ養成クラスを設置し、団員に舞踊、馬頭琴演奏、モンゴル民歌の歌唱方法、詩歌の創作などの科目を指導していた[9]。

1959 年 10 月 25 日の「内モンゴル日報」では「牧民はウランムチを讃える」というタイトルでソニドユウ旗ウランムチを報道した。記事によると、ソニドユウ旗ウランムチに対する評価について以下の三点が取り上げられた。１つ目は、ウランムチは内容が豊かで、民族色彩がある歌舞を上演することによって、草原の人々の生活を豊かにしている。２つ目は、ソニドユウ旗ウランムチは近三年内に、舞踊、歌曲、劇、好来宝、詩などの約 150 部の作品を創作した。３つ目は、ウランムチは上演を通じて、牧畜業社会主義改造の方針・政策、党の民族政策を宣伝し、広大な遊牧民に社会主義や共産主義教育及び愛国教育、国際主義教育を行った[10]。

さらに 1965 年から「ウランムチから学ぶ」という運動が始まり、ウランムチの活動は社会的に高い評価を受けるようになった。しかし、この頃からウランムチの役割が変化するようになり、ウランムチの活動の中心は毛沢東文芸路線革命精神の宣伝になる。以下、「ウランムチから学ぶ」運動の展開とどのような点が評価されたのかについて検討する。

（２）「ウランムチから学ぶ」運動の展開

1964 年 11 月に全国少数民族民衆アマチュア芸術公演会が北京で開催され、内モンゴルからはウランムチ代表団体と内モンゴルのアマチュア芸術団体が参加した。本公演を通じて、

ウランムチは首都（北京）文芸界の賞賛を博し、「人民日報」、「北京日報」にウランムチの「党と毛沢東文芸路線革命精神を貫徹し、誠心誠意民衆に奉仕する」点が評価された[11]。それを受け内モンゴル文化局は 1965 年 1 月に内モンゴルの各盟、市、旗、県の文化部門と各級専門芸術団体に通知を出し、全専門芸術団体はウランムチから学ぶことを呼びかけた[12]。通知では、「何を学ぶか」について以下のような指示を出した。

彼らの革命思想、革命精神、革命態度、革命への意気込みを学ぶ。彼らの毛沢東文芸思想の赤旗を高く掲げ、文芸が工農兵に奉仕し、社会主義に奉仕するという党の方針に従い、内モンゴル党委員会の指示通りに、長期にわたって遊牧地区に入りこみ、誠心誠意をもって遊牧民に奉仕し、労働者、民衆と一体になり、「三同」の革命精神を実行することを学ぶ。彼らが身軽になって活動を展開し、苦労を恐れず、いつでも労働者、牧民のために考え、たとえ一人の労働者、遊牧民だけでも上演する、という革命態度を学ぶ。彼らが党の各項の任務及び中心となる事業を協力し、革命の内容を多様な、民衆に喜ばせる形式で宣伝・演出し、民衆のアマチュア活動を指導することを学ぶ。彼らが労働者、遊牧民によりよく奉仕するために、自らの専門技術を研鑽すると同時に多芸であるという革命への意気込みを学ぶ。ひと言で言えば、ウランムチが毛主席の指示に従い、長期にわたって工農兵の生活に深く入り込み、労働者、民衆と一体になり、労働者、民衆と結びつけるという革命精神や革命行動を学ぶ[13]。

「人民日報」（1965 年 1 月 15 日）では、「真剣にウランムチを学習する」というタイトルで短評が掲載され、ウランムチから学ぶ運動の展開にあたって、全国の芸術団体は「ウランムチから何を学ぶか、どのように学ぶのか、誰に奉仕するのか、何を奉仕するのか」を中心に報じられた。各芸術団体は「ウランムチは毛沢東の指示とおり、長期にわたって確実に労農兵、労働者、民衆と一体になり、労働者、民衆と結合した革命精神と革命運動を学び」（「内モンゴル日報」1965 年 1 月 24 日」）、「文芸は広大な工農兵に奉仕する」（「人民日報」1964 年 12 月 21 日）という目的で、「上演活動を中心に行うとともに多種多様な文化宣伝工作を行い、民衆のアマチュア文芸活動を指導する」（「人民日報」1964 年 12 月 21 日）という民衆に奉仕する方式をとるとした。したがって、1960 年代において各芸術団体の中で、ウランムチはモデルになっていた。

これらの記事の内容は主に、誠心誠意に人民に奉仕し、党と毛沢東文芸路線革命精神を貫徹することを中心に学ぶことが宣伝された。ウランムチが毛沢東文芸路線革命精神を宣

伝するとともに労農兵に奉仕することで中央の要求に応じたため、中央より高く評価されたと理解できる。さらに、1965 年に１月 20 日に文化部はウランムチの全国への巡回上演に関する工作会議を開いた。また、各自治区、省、市の文化行政部門もウランムチの当該地域への上演を招請した。文化部は全国各地の文芸工作者にウランムチの革命精神を学ぶ機会をつくるため、内モンゴルのウランムチから３つのウランムチ代表団体を選び、３つのグループに分け全国を巡回上演するよう指示を出した。1965 年４月 31 日に代表の３つのグループは内モンゴルのフフホトから北京に赴き、７ヶ月半の巡回演出を経て 1966 年１月にフフホトに戻った。

この時期の特徴としては、ウランムチは結成された当時の「工作条例」のとおり、政策の宣伝と民衆文化の普及という役割をもって活動を行ってきた。しかし、1965 年の「ウランムチから学ぶ」運動に入り、ウランムチは毛沢東文芸路線革命精神の宣伝を中心にするようになった。つまり、第一章で論じたように建国初期の中国は少数民族地域への統制、改革を進めるために文化面で利用したのはウランムチのような文芸工作団体であった。新政権は上からの国民形成のためにモンゴル族のウランムチを結成し、モデルとして扱った。ウランムチの活動は中央政府の要求（民族関係の改善、団結、民族政策の宣伝など）に応じ、要求に応える役割を果したため中共に高く評価され、全国で「ウランムチから学ぶ」運動が展開されたといえる。

４．草創期の団員の思い

以上では草創期におけるウランムチの展開を紹介した。一方、ウランムチの活動に参加した団員はウランムチの活動についてどのように考えているのだろうか。以下、ウランムチの元団長である M のウランムチへの思いを分析する。本項では主に「当時のウランムチの活動の状況」に対する「団員のウランムチの活動への思い」という分析の視点からウランムチの元団長である M が執筆した『ウランムチの緑葉』(内モンゴル少年児童出版社､2006 年）（以下、『ウランムチの緑葉』）を分析する。また、半構造化インタビュー[14]の内容を補足しながら草創期におけるウランムチの団員の精神やウランムチに対するアイデンティティを明らかにする。

（１）『ウランムチの緑の葉』の内容とインタビューより

1965 年に全国の各芸術団体のモデルになったウランムチの経験を全国的に紹介するという目的から、当時の国務院総理であった周恩来の指示により中央宣伝部と文化庁は「内モ

ンゴルのウランムチから優秀な団員を選び、３つのグループに分け、全国の各省、市を巡回上演する」という通知を出した[15]。『ウランムチの緑葉』にはＭが参加した第二グループ団（1965 年 5 月 31 日～1966 年 1 月 14 日）が、北京、湖北、湖南、広東、広西、雲南、貴州、四川、河南、吉林、黒竜江、遼寧省の 12 省を回り上演したことが記されている。

当初のウランムチ巡回上演の任務としては、第１に、地方特色や民族特色、時代特色があるプログラムを創作し各地を巡回し上演することである。第２に、各地方の芸術団体に対してウランムチの経験を紹介し、革命精神を宣伝することである。第３に、各地を見学、取材することを通じてウランムチの団員が全国から学ぶことである。Ｍ の著作である『ウランムチの緑葉』は、Ｍ が各地の地方特色を詩と好来宝で紹介すると同時に出会った人、出来事や話したこと、見学したこと、自分の感想を書いた回想録であり、そこにはウランムチの団員のウランムチの精神が表れている。本の目次は表２－２に示した構成になっている。

表2-2. 『ウランムチの緑葉』の目次

目次	頁
まえがき（ウランムチの精神を称える）	
ウランムチの全国巡回上演グループの結成と北京への致着	１～17
湖北省でのこと	18～24
広東省でのこと	25～35
湖南省でのこと	36～48
広西チワン族自治区でのこと	49～56
雲南省でのこと	57～64
貴州省でのこと	65～72
四川省でのこと	73～80
河南省でのこと	81～89
毛主席との接見（北京）	90～98
吉林省でのこと	99～104
黒竜江省でのこと	105～110
遼寧省でのこと	111～122
中南海で周恩来との接見	123～148
フフホトでのこと	149～167
いくかの思い出/心の話	168～177
あとがき	178～179

M は 1942 年に生まれた。小さい頃の M の生活は貧困であったが民族文化の沈積の深い家庭に育った。すなわち、祖父と伯父が曲芸の有名人であり、小さい頃から二人の芸術薫陶を受けたのである[16]。16 歳（1958 年）の時 M は通遼市 A 旗文芸工作隊の仕事につき、20 歳（1962 年）から A 旗ウランムチの団員になった。1965 年に内モンゴル自治区ウランムチ全国巡回演出隊に参加し、全国の 12 省を回り上演した。彼は 40 年の仕事の間に A 旗ウランムチの団長、A 旗文化局局長、A 旗宣伝部党委員会書記の仕事を務め、2002 年に 60 歳で退職した。

草創期のウランムチの活動について M は以下のように語った。

当時のウランムチのプログラムは民族特色がある、時代を讃えたプログラムなどを上演していた。党、毛沢東、人民公社を讃えたプログラムがあるが、中心は民族歌舞であった。当初のウランムチの団員は 10 人ぐらいなので、一人一人は歌、舞踊、楽器などを全部できなければならない。ウランムチの主な任務は民衆に奉仕することだ。馬車に乗って春の４月に出たら８月に戻ってくるような感じであった。当時のことと現在とを比較することはできないが当時は社会の条件が悪いため、荷物を馬車に載せて上演した。途中で雨に降られたり、野外に住んだりすることなどいろいろあった。夏の夜の上演では蚊や虫にくわれ、虫が口に飛び込んできたりすることもあった。農村遊牧の上演は、６ヵ月で 140 回程度の上演をしなければならない。現在のように一時間上演したら何元かの上演料をもらうということはなかった。当時は結構厳しい状況にあったが、私はこの仕事を喜んでやっていた。（M へのインタビューより、2010 年 7 月 27 日）

M は「ウランムチの主な任務は民衆に奉仕する」と言う。ウランムチの役割の一つとしては、遊牧地域の広大な労働人民に奉仕することが「工作条例」に示されている。したがって、人民に奉仕するというのはどのように表れているのかを『ウランムチの緑葉』に書かれた出来事から見たい。

湖南省でのこと（1965 年 7 月 9 日～21 日）

7 月 15 日に激しい雨が降り長沙市近郊地区の春華公社は災難にあった。翌日に、ウランムチ巡回団体はこの状況を聞いて会議を開き慰問する準備をした。一人一人が何元かを出し、学生に鉛筆とノート、洗濯石鹸を買って準備した。午後に、六つのグループに分かれ、災難後の農民の仕事を手伝った。みんな老人を手伝い、服、布団を洗い、老人や小学生に

散髪し、内モンゴルの状況を説明した。・・・人民公社の人たちの情熱をえて、学びに来た地域の芸術団体の団員にこの実践モデルを見せた。翌日に、「湖南日報」、「長沙夕刊」にウランムチの活動やウランムチから学ぶことが報道された。(『ウランムチの緑葉』pp.42～43)

『ウランムチの緑葉』とMへのインタビューでは、上記のようなウランムチの活動が強調され、上記の事例はその一つになる。すなわち、ウランムチによる人民に奉仕するとは、民衆に対する日常生活の支援と社会的弱者である高齢者や子どもを助けることであった。もう一つ考えられるのはラジオ・テレビの放送や映画、演劇が普及していない遊牧地域、農村地域に上演することが「人民に奉仕する」としてとらえていた。草創期におけるウランムチは各地の巡回活動を通じて新政権が旧時代といかなる違いがあるかを「人民に奉仕する」ことを通じて実感させる意図があったと考えられる。

また、ウランムチによる民衆に奉仕する姿勢として、ウランムチは上演を見たい人がいれば、人数の多寡にかかわらず、場所の限定なく上演するという姿勢であった。そして、「民衆と一緒に住み、一緒に食べ、一緒に働き、上演する[17]」というのはウランムチの活動の一つの特徴であったのである。このようなウランムチの上演姿勢は当時の民衆に愛され、民衆がウランムチのことを「私達のウランムチ[18]」と呼んでいたのである。

以下の事例は広西省チワン族自治区でのことである。

広西省チワン族自治区でのこと（1965年7月21日～8月5日）

7月28日に中国西南の友誼ゲートの軍団において上演した。当時はベトナムとアメリカの戦争の時期だったため辺境を守る七人の兵士はウランムチの上演を観劇することができないということを聞いて、団員はこの七人の兵士に上演することに決めた。友誼ゲートの軍長は七人のいる場所に至る道は険しいのでやめたほうがいいといった。でも、私達は行くことにして1000メートルの山を一時間以上かけて目的地に到着した。そして私達の馬頭琴、楽器の重さが20キロぐらいであり、着いた時点で顔が真赤にあり、すごく汗が出た。七人の兵士に対してプログラムをすべて上演した。この日は別のところの上演を含めて三回上演した。翌日の「広西日報」、「南方夕刊」はウランムチを高く評価した。(『ウランムチの緑葉』pp.53－54)

そのほか、ウランムチの団員は実践の中で学ぶことが強調されていた。

湖北省でのこと（1965年6月11日～12日）

ウランムチ団員が湖北省の高等芸術学校、中国民族高等学校の分校を見学し、彼らと交流し上演するときに、私（M—引用者、以下同じ）は芸能をやっている一人から「どこの専門学校を卒業しましたか」と聞かれた。私が彼に「農村のブリン小学校を卒業した」と答えると、彼は信じなかった。私達の中に多くは中学校や高校を卒業したと紹介すると、彼は「みんなはどうしてたくさんの種類の歌や楽器ができるのか」と私に聞いた。「これは実践の中で学んだ。私達の半農半牧地域は広大、辺鄙であり移動に便利でないから私達が馬車に乗って上演した。だから、一人が一種類だけできでもだめで、多くの歌や楽器ができないと一回の上演を完成することはできないよ」と答えた。彼は「生活は芸術の源泉だ」といった。(『ウランムチの緑葉』pp.23～24)

既述のインタビューで語ったように「当時のウランムチの団員は10人ぐらいなので、一人一人は歌、舞踊、楽器などを全部できなければならない」であった。「生活は芸術の源泉」というとおり、内モンゴルの遊牧民の移動生活に応じて移動して上演するウランムチのような芸術文化団体が結成された。ウランムチは遊牧の生活を反映した作品を創作しており、作品の源泉もまた生活にあった。ウランムチの団員は人数が少ないため、団員一人ひとりが歌、舞踊、劇、楽器を全部できることが要求された。その一つの専門技術をもつと同時に多芸であることも当時の各専門芸術団体がウランムチから学ぶことの一つの内容になっていた。

また『ウランムチの緑葉』の「心の話」では、Mは次のように書いている。

私は生涯を文芸に関する仕事につとめ、26 年をウランムチに過ごした。ウランムチが私の大学であり、ウランムチが私に誰にどのように奉仕すればよいかを教えてくれた。ウランムチは私を育ってくれた揺籃であり、私はウランムチに対して深い愛がある。(『ウランムチの緑葉』p.178)

（2）Mの思いに見るウランムチの精神

M が『ウランムチの緑葉』とインタビューで強調したのは、ウランムチの団員は「どのような困難があっても」、「どこでも」、「誰にでも」という意識をもち、「人民に奉仕する」ことであった。ここでいう「人民」とは広大な遊牧民、農民たち、兵士、または社会的な弱者である高齢者、子どもなどを指していると考える。

これはウランムチから学ぶ運動の展開において強調していた「文芸が工農兵に奉仕し、誠心誠意をもって遊牧民に奉仕し、労働者、民衆と一体になる」というスローガンの実践

である。したがって、ウランムチの元々の精神というのは中国の特別な事情背景のもとに生まれた「ボランティア精神」のようなものであり、ウランムチは人民に奉仕し、いかなる報酬も求めないという意識を指すのではないかと考えられる。つまり、ウランムチの団員からみるウランムチの活動は党の宣伝、文化の普及だけではなく、「文芸、民衆、奉仕」を結び合わせたものであり、文芸を通じて人民に奉仕することであるという意識の強さが見られた。ウランムチの活動にＭは強く誇りを持っていたことが読み取れる。

第３節 ウランムチの停止期（1966 年～1976 年）

1966 年～1976 年は中国の文革の時期である。文革によって一部のウランムチの活動は停止され、ウランムチは麻痺状態になった。この時期においては新しく結成されたウランムチもあるが、名称を「毛沢東思想宣伝隊」と改称したウランムチも存在した。以下、文革期に存続したウランムチの活動はどのように活動を行ったかについて検討する。

1966 年にウランムチの３つのグループが全国巡回上演を終えて帰還した後、当時の内モンゴルの党委員会の書記、内モンゴル自治区主席のウランフはフフホトでウランムチ巡回上演団体の全員に面会し、談話では「ウランムチはさらに毛沢東文芸思想を徹底的に実行し、永久にウランムチの赤旗を保つ。内モンゴルの各業種はウランムチの誠心誠意に労農兵に奉仕する革命精神を学ぶことを呼びかける」[19]と述べた。1966 年１月にウランムチ巡回上演団体は初の公演報告を行った。表２－３（次のページ）は公演報告プログラムのタイトルである。

公演報告ではウランムチが創作したものと、全国各地から学んだものを上演した。これらの多くは全国各民族が党を愛し、毛主席を愛し、社会主義思想、革命精神を反映した歌と演劇である。「ウランムチから学ぶ運動」からここまでのウランムチの活動をみると、ウランムチは人民に奉仕するという点が強調されるが、ある意味では完全に毛沢東文芸思想の宣伝になり、さらに「毛沢東思想宣伝隊」と変えた事例も多く見られる。

1966 年８月に中共第８期 11 回中全会では「プロレタリア文化大革命についての決定」を採択した後、文革の全面的な騒乱は広がり、文革は主に文芸界に波及していた。

表2-3. ウランムチ巡回上演団体公演報告プログラムのタイトル

和訳	原文
草原の若者は延安を愛している	草原儿女爱延安（ウランムチの創作品）
祝賀歌	祝贺歌（ウランムチの創作品）
バターティーをご馳走する	请你喝一杯酥油茶（青海）
三人の老人が創作物をみる	三个老头看庄家（山東）
鍋を繕う	补锅（湖南）
果樹園の歌	果园之歌（新疆）
解放軍	解放军（新疆）
花鼓灯	花鼓灯（安徽）
ココヤシを買う娘	买椰子的姑娘（安徽）
アりりを毛主席に捧げる	阿里里献给毛主席（雲南）
劉陽河	浏阳河（湖南）
毛主席と私たちは心がつながっている	毛主席和咱心连心（上海）
人民公社は素晴らしい	人民公社好（上海）
素晴らしき私が故郷	我的家乡好（チベット）
人民公社の社員はひまわりのようだ	社员都是向阳花（四川）
前線の民兵	前线民兵(福建)

１．文革によるウランムチの停止

文革に入って、ウランムチの存在は厳しい状況になり、ウランムチの役割は変化した。一部のウランムチの団員は「罪悪」の帽子をかぶらされ、農村に下放され、労働改造を強要されたのである。表２－４は文革における被害を受け、停止になったウランムチの事例である。

表2-4. 文革における被害を受け、停止になったウランムチの状況

名称	発生した時期	状況
アルシャ右旗	1966年4月	団員の中には強制的に農村に下放され、労働改造に従事させられた。
エジナ旗	1966年4月	同上。
ウランチャブ盟	1966年7月	多数のウランムチの団員に「罪悪」の帽子をかぶせ、団体から追放され、農村に下放され労働改造を受けた。
フルンボイル盟	1967年5月	多くの団員を摘発し、批判闘争した。
バヤンノール盟	1967年8月	文革の破壊を受け、バヤンノール各盟のウランムチは正常に活動を展開できなくなった。
オンニュド旗	1969年10月	団員は上演活動を停止して、「毛澤東思想学習班」に参加し、自己批判した。
ジョオダ盟	1970年3月	多くのウランムチは遼寧省革命委員会の指示の下で、演出活動は一切停止し、農村に下放され、労働改造を受けた。

出典：内モンゴル自治区文化庁編『ウランムチの路』内モンゴル人民出版社、1997年、pp. 114－119より作成。

※ジリム盟を吉林省に合併した（1969年）後、ジリム盟の各旗、県のウランムチを「文工団」と変え、「革命様板劇」を演じするようになった。

２．活動を続けたウランムチの状況

草創期の後期(1965 年)にみられた毛沢東文芸路線革命路線の宣伝を中心に行うという傾向は、文革の影響で完全に毛沢東思想宣伝となった。1968 年 7 月にジュンガル旗革命委員会はウランムチを取り消して、「毛沢東思想宣伝隊」を結成した。1969 年 1 月にジリム盟のウランムチすべてを「毛沢東思想宣伝隊」と変えた。1970 年になり、ウランチャブ盟文化局は全盟の一部のウランムチに「革命様板劇学習クラス」を行い、「紅灯記」、「智取威虎山」、「沙家浜」などの革命様板劇（革命模範劇）を上演するようになり、ウランムチは革命様板劇を民族語で翻訳して上演していた。

1972 年になると、ウランムチの活動に回復の兆しが見られる。1972 年 1 月 28 日に「人民日報」は「ウランムチは前進している」というタイトルで通信記事を発表し、ウランムチの活動は国家により再評価され、内モンゴルの各地のウランムチも回復するようになった[20]。しかし、「ウランムチ」という名称が回復され、活動が展開されたものの、この段階ではウランムチの役割に大きな変化はなかった。

この時期の特徴は文革の政治的影響により、ウランムチの上演は革命様板劇をモデルにし、ウランムチの独自性が見られなくなって、完全に社会主義建設思想の宣伝の道具になったといえよう。ウランムチのこのような役割の変化は民族文化の独自性が政治体制により抑圧され、ウランムチによる民族文化の普及は停止されたということである。

第４節 ウランムチの回復と改革期（1977 年～2001 年）

1977 年８月に開かれた中共第 11 期全国代表大会において文革の終結が宣言された。1978 年の第 11 期３中会により、中国は社会主義事業の新しい歴史発展時期に入る。ウランムチの活動は、文革期と違って、創作の自由を得て、モンゴル劇、歌、舞踊の創作は多くに現れ、民族文化の振興の傾向にあった。

文革が終わるまではウランムチが党の基本路線を主張し、毛沢東の重要な指示を重視し、革命様板劇を模範にしたのである。1970 年代後半になり、「四人組」を批判し、ウランムチの創作の自由が強調される。1984 年の「民族区域自治法」の制定による民族文化の独自性が保障され、ウランムチにおいて 80 年代に多様な種類の作品が創作された。これを内容によって分けてみると、①党について、②英雄、人物について、③愛情について、④草原について、⑤故郷について、⑥馬についてなどさまざまなものを表現した作品を創作した。以下、ウランムチは回復時期においてどのような変化があったのかをみたい。

１.「内モンゴル自治区ウランムチ工作条例」の修正

1978 年の第 11 期３中会から民族工作は回復した。1979 年の内モンゴルのウランムチ公演大会では当時の内モンゴル自治区党委員会・宣伝部部長は「思想を開放し、勇敢に創作し、ウランムチ工作の新しい飛躍を実現する」という題目で報告を行った。また、同年にウランムチ舞踊創作座談会、ウランムチ劇作者座談会、音楽創作座談会などを開き、ウランムチの創作の自由、モンゴル語での創作、民間音楽の収集などを強調した。1980 年に赤峰市にウランムチ団長が集まった会議が開催され、会議ではウランムチは如何に更なる社会主義現代化建設に奉仕するかという課題をめぐり、ウランムチの活動の経験交流と「ウランムチ工作条例」の内容が検討された[21]。そして、1957 年の「工作条例」は大幅に修正され、1985 年８月に最終的な修正後の「内モンゴル自治区ウランムチ工作条」が公布された。「内モンゴル自治区ウランムチ工作条例」（1985 年 8 月 28 日）ではウランムチの役割と任務を以下のように定めた。

第一章　役割

第一条　ウランムチは党の文芸方針と民族政策の導きの下で、内モンゴルの実際の状況に基づいて創作された作品の上演を主とした総合的な文化工作隊であり、文化事業機関に属する。主に、社会主義文化芸術の普及工作に従事する。

第二条　ウランムチは団員が一つの専門技術をもつと同時に多芸であり、プログラムは多様であり、装備が簡便である組織形式をもつ。当地域の各族遊牧民、農民に奉仕する。各自治旗のウランムチは一般に本旗の自治民族を主要対象に奉仕する。

第二章　方針　任務

第三条　ウランムチは党の四つの基本原則を堅持する。文芸が人民に奉仕し、社会主義に奉仕する方向を堅持し、「百花斉放、推陳出新（古きを退けて新しきを出す）」、「古為今用、洋為中用（いにしえのものを現在に用い、西洋のものを中国で生かす」）方針を貫徹、実行し、文化芸術の革命化、民族化、民衆化の実現に努める。

第四条　ウランムチは上演を主とし、宣伝、補導（指導）、服務活動を行う。

①上演。ウランムチは社会主義内容、民族特色、地方特色があるプログラムを創作し、民衆文化生活を豊かにし、愛国主義、社会主義、共産主義、民族団結の思想教育を行う。

②宣伝。ウランムチは図画展覧、スライド、映画の上映などを使い、民衆に党の路線、方針、政策を宣伝する。

③指導。ウランムチは農村、遊牧地域に入り、当該地域の文化主管部門のリーダーのも

とで分散的あるいは集中的に民衆のアマチュア文芸上演と創作活動を指導し、アマチュア文芸骨幹（中心物）を養成する。

④奉仕。ウランムチは農村、遊牧地域に入り、遊牧民、農民に生活、生産サービスを行う。例えば、図書の代理販売、撮影、散髪などである。

新しい「内モンゴル自治区ウランムチ工作条例」は、ウランムチの「役割」を「主に、社会主義文化芸術の普及工作に従事する」と修正した。また、草創期におけるウランムチの主な任務は「遊牧地域の民族的な特徴に基づいて、社会主義思想や党と政府の各政策、法令及び時事を宣伝し、牧畜民の政治的自覚を高め」、「牧畜地域の民衆文化事業を発展させ、遊牧民のアマチュア文化芸術活動を組織・指導する」ことであった。修正後の「方針と任務」においては、ウランムチの任務を「上演、宣伝、指導、奉仕」という４つの機能があると明確化した。特に「上演」は「ウランムチは社会主義内容、民族特色、地方特色があるプログラムを創作し、民衆文化生活を豊かにし、愛国主義、社会主義、共産主義、民族団結の思想教育を行う」と定めた。修正後の「内モンゴル自治区ウランムチ工作条例」はウランムチの創作を民族特徴、地方特徴を重視する傾向を明確にしたといえよう。ウランムチの体制と経費については下記のように定めた。

第三章　体制

第六条　ウランムチは牧畜地域、半農半牧地域、辺境地域の旗・県と自治旗に結成する。団員は一般的に 25 人で、自治旗は 30 人を置くことができる。

ウランムチに団長と副団長各１名を置くことができる。団長責任制を実行し、団長は人事、財務、管理などの自主権を行使する。

第四章（略）

第五章　経費

第二十二条　ウランムチの経費は各級地方の財政部門から支給される。ウランムチは独立の予算部門であり、地方財政と文化主管部門の監督を受ける。

第二十三条　ウランムチは牧畜地域、半農半牧地域、辺境地域においての上演では出演料を徴収しない。ナーダム大会、接待あるいはその他の上演は規定に基づき出演料を取る。ウランムチは積極的に経営管理を強化し、収益を高める。

第二十四条　ウランムチの結成と撤回は自治区文化庁の関連部門と協議し、審査、承認を受ける。

第二十五条　ウランムチは当該地政府の文化主管部門の指導を受け、業務上は上級文化主管部門の指導を受ける。

以上より、ウランムチは体制的に団長責任制を実行し、団長は人事、財務、管理などの自主権を行使することが定められ、自律的運営に移行したことが分かる。また、ウランムチは当該地域の地方政府のもとでウランムチの活動に自由度が与えられたといえるが、「内モンゴル自治区ウランムチ工作条例」では「ウランムチの経費は国家文化事業費から支出する」ことが削除された。したがって、ウランムチは経費獲得の新たな課題に直面し、ウランムチの体制改革による新しい活動分野の拡張が進められた。

２．ウランムチの改革の探索

改革開放後は市場経済に対応したウランムチの管理運営が求められるようになった。内モンゴル文化局は 1990 年にウランムチ会議を開き、先駆的な改革を行ったシリンゴル盟のウランムチの経験を紹介した。1988 年に出された「シリンゴル盟ウランムチ改革方案」ではウランムチの管理運営の責任者である団長の任用条件や選出方法、職責を明確にした。また、団員の採用はそれまで地域や機関からの推薦制をあらため公募による任用制を行うようになった。そして、ウランムチの監督体制、評価細則などが定められ、ウランムチの団員の専門技術や学習を評価し、団員の学ぶ意欲を高めることが目指された。

ウランムチの改革は団長の管理責任制、団員の任用制を採用するということからはじまり、ウランムチの管理、運営を団長に任せるようになった。団長は責任をもってウランムチを運営し、各ウランムチは独自の発展を目指すことになったのである。ウランムチは活動を通じて、国家財政への依存から文化産業市場に参入して利益を得、財政上の不足を補うとした[22]。

３．創作品の内容の多様化

70 年代後半、80 年代に入りウランムチは多くのモンゴル人に愛される作品を創作した。この内容は多様であり、特にモンゴルという特徴を表現した草原、馬、歴史人物の歌は多くに現れた。

昔からモンゴル族は馬と分離できない関係にあり、馬はモンゴル族の生活伴侶であり、賛美の対象になっている。「牧人、駿馬、草原の完璧な組み合わせは草原音楽文化の基礎になった」[23]。したがって、草原音楽の中では馬、草原、牧人をタイトルや内容にした歌や馬

頭琴演奏は多く創作された。例えば、馬をタイトルにした作品としては「小黄馬」(歌)、「万馬奔騰」(馬頭琴演奏)、「心の中の馬群」(歌) などがあり、草原をタイトルにした作品としては、「広大な草原」(歌)、「草原賛歌」(歌)、「美しき草原」(歌)などがある。これらの作品では、内モンゴルの風景となる草原の馬、大草原を音楽にして表現され、モンゴル族の馬、草原に対する愛着が表れている。「ウランムチ 30 周年工作報告」(1987 年) ではウランムチは民族特色や地方特色がある民衆に愛される作品を創作し、1985～1987 年の３年間の統計によると、歌曲は 987 作品、舞踊は 297 作品、劇は 61 作品、器楽曲は 237 作品が創作されたと報じられた[24]。「ウランムチの 30 周年」というタイトルで人民日報 (1987 年 7 月 21 日) においても「30 年の間に、多彩な精神の糧を民衆に奉仕し、内モンゴルの民族文化業の発展と繁栄に積極的な役割を果たした。ウランムチのプログラムが表現した題材、主題、人物、芸術形式は草原の民衆に接近し、草原の民衆の必要に応じ、草原の民衆に愛された」と草創期と違った視点で評価される。

文革期において文革イデオロギーの強制は少数民族の民族的アイデンティティを否定され、民族文化が破壊されたが、文革が収束後中国は社会主義現代化建設時期に入り、民族工作は回復した。ウランムチの活動は文革の政治の道具という役割からモンゴル特徴を表現した作品が自由に作られるようになった。これはモンゴル族の人々のモンゴル意識につながる側面もあったといえる。

第５節 ウランムチのブランド化期 (2002 年～現在)

第５節では、グローバル時代においてウランムチはどのように変容していったのかついて考察する。

１．ウランムチのブランド化の始まり

2002 年 11 月に開催された中共第 16 回大会において、江沢民の「３つの代表」がマルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論とともに党の重要思想と位置づけられた。2003 年に内モンゴル自治区党委員会と自治区政府は「三つの代表」の重要思想を実践し、豊かな社会を構築するために「民族文化大区建設」の目標を提示して、「内モンゴル民族文化大区建設綱要 (試行)」(以下、「綱要」) を打ち出した。「綱要」では、「民族文化大区建設」にむけた 2010 年までの具体的な目標が示され、第１に、民族の特色や地域の特性を強調した地域づくりを目指すこと、第２に、少数民族の優秀な人材の養成を目指すこと、第３に、

民族文化活動の拠点となる文化施設を整備すること、第４に、民族文化の保持保護を行うこと、第５に、映画、出版、文化観光などの文化産業を奨励することが目指されている。具体的な目標として９つのプロジェクト[25]があげられ、ウランムチはこの中で草原文化芸術ブランドプロジェクトの一つに位置づけられ、ウランムチは国内外文化市場における著名なブランドとしての地位を確立することが計画された。同年に内モンゴル自治区ウランムチ学会の第三次会員代表大会でも、ウランムチは市場経済の需要に対応し、「民族文化大区建設」や自治区の社会経済建設の総合的な計画の中に組み入れられるべきであることが提起された[26]。以上より、ウランムチは興行活動において新たな活動領域を開拓するとともに、2003 年からはウランムチの知名度を高めることが積極的に取り組まれるなど、内モンゴルの市場経済発展の主要な事業として位置づけられていることが看取される。このような文化産業の繁栄の中で、ウランムチは「文化と企業の連携モデル」の探索を続け、経済と文化の協力関係により、文化産業を発展させ、芸術上、経済上の両方の利益を得た」といえる[27]。

２．ウランムチの上演形態の多様化

表２−５（次のページ）は、通遼市の『B ウランムチ大記事』（以下、『大記事』と略す）から作成した 2009 年の B ウランムチの活動記録である。『大記事』には B ウランムチにとって重要と認識された活動が記載されている。

本節では、2009 年の活動記録を祭りでの上演、行政イベントへの上演、各機関・団体のイベントでの上演、接待の上演に分けて分析し、ウランムチの活動の傾向をまとめた。①祭りでの上演では、春節での上演が行われている。②行政イベントでの上演からみると、通遼市の主な会議、行政幹部の懇談会での上演がある。③各機関、団体のイベントでの上演は通遼市の会社の懇談会、店の開業、歌曲コンテストでの上演である。④接待での上演は他の省からの来訪者（例えば、市長や企業社長）に対する上演である。

以上より、ウランムチの活動は農村遊牧地域での農民、遊牧民に対する上演奉仕だけではなく、各機関・団体のイベントでの上演など多様な形態が見られる。

表2－5．Bウランムチ2009年の大事記

月	演出形態				その他
	祭り	行政イベント	各機関・団体イベント	接待	
1月	通遼市春節の夕べ 春節の夕べ		通遼市人民銀行 蒙東会社の懇談会		
2月		「両会」			
3月		旗の婦人連合会「三八」の夕べ 文化系統の「三八」の夕べ	康臣薬会社 瀋陽蘭点蒙古食料理店開業祝い		
6月		通遼市老幹部懇談会 通遼市老年ゲート・ボール試合開会式	柏愛化粧品店開業三周年祝典 通遼市農牧業局 通遼市石炭技術学院「七一」交歓会		
7月			遼源鉱物局「七一」交歓会 遼源鉱物局の歌曲コンテスト	天津「ニ五四」病院のリーダー	
8月			通遼市農牧局		中央テレビ「ハッピー中国行」番組 「ホルチン民歌会」 通遼市文芸コンクール
9月		政治協商会議成立60周年交歓会	通遼市「移動通信」成立10周年祝典		
12月			商工行政管理局の交歓会		通遼市ホルチン ウリグルコンテスト

出所：Bウランムチ現地調査資料より筆者作成（2010年7月14日取得）
※両会とは全国人民代表大会と中国人民政治協議会議の略称。
※「三八」は3月8日を指している。国際労働婦人デー。中国では「三八婦人節」という。
「七一」は7月１日を指している。中国共産党創立記念日。

３．地方政府によるウランムチへの評価

内モンゴルの地方政府は現在のウランムチの活動に対し、どのようなところに重点をおいて評価しているのだろうか。本項では、「内モンゴル自治区ウランムチ評価実施細則」（以下、「実施細則」）に着目し、その評価項目のどういう項目を重視しているかを分析することで、ウランムチに何を期待しているかを明らかにする。そのことを明らかにすることはウランムチの文化活動の現状を明らかにすることでもある。

ここで取り上げる表２－６（次のページ）の「実施細則」は内モンゴルの通遼市文化局が「内モンゴル自治区文化庁第４回自治区ウランムチ工作評価に関する通知」に基づき、ウランムチに対して評価を実施するために 2009 年に定めた細則である。「実施細則」は「ウランムチに対する指導の強化」、「ウランムチの基本任務」、「ウランムチの施設建設」、「ウ

ランムチの人員養成」、「ウランムチの改革」、「その他」という６つの大きな項目で構成され、合計 100 点となる点数配分がなされている。６つの項目の中で、「ウランムチに対する指導の強化」が 40 点を占めており、最も重視されている。このほかウランムチの「ウランムチの施設建設」、「ウランムチの人員養成」、「ウランムチの改革」がそれぞれ 10 点である。また、小項目の中で、点数が一番高いのは③「ウランムチの年度事業経費に対する補助金は増加傾向にあるかどうか」（20 点）という点である。次いで①「ウランムチの活動が党委員会、政府の行事日程に組み込まれているかどうか」ことと⑥「基層レベルへの上演が少なくとも年 50 回あるかどうか」が各 10 点である。すなわち、ウランムチは事業経費の確保を最も重要な課題とし、ウランムチの活動を旗政府の工作の中に組み入れることが求め

表2-6．内モンゴル自治区ウランムチ評価の実施細則（2009年）

大項目	小項目	点数
ウランムチに対する指導の強化（40点）	①ウランムチの活動が党委員会、政府の行事日程に組み込まれているかどうか。	10点
	②ウランムチの建設を当地の経済や社会発展の総合計画に入れているかどうか。	5点
	③ウランムチの年度事業経費に対する補助金は増加傾向にあるかどうか。	20点
	④健全なウランムチの建設、発展を指導しているかどうか。	5点
ウランムチの基本任務（20点）	⑤新しい創作や演出したプログラムが少なくとも年30回あるかどうか。	5点
	⑥基層レベルへの上演が少なくとも年50回あるかどうか。	10点
	⑦宣伝、指導、サービスの活動が少なくとも年20回あるかどうか。	5点
ウランムチの施設建設（10点）	⑧ウランムチは農村、遊牧地域へ演出の交通工具を備えているかどうか。	3点
	⑨稽古するホールの面積は最低300平方メートルで、その中には事務室、琴室などの施設があるかどうか。	4点
	⑩照明、音響、楽器、道具、服装などの備品がそろっているかどうか。宣伝、指導、サービスが行える整備があるかどうか。	3点
ウランムチの人員養成（10点）	⑪リーダグループは団結で実務に励み、団員を組織して当地の文化主管部門の任務を行っているかどうか。	2点
	⑫全団員に対して少なくとも年一ヶ月以内の育成訓練をしているかどうか。	2点
	⑬管理を強化し、団員の学習、稽古、訓練などを奨励する規則をもっているかどうか。	2点
	⑭団員の平均年齢は35歳以下であり、四級レベル以上の資格を持つ団員あるいは中等専門芸術学校の学歴をもっている団員が全団員の40%を占めているかどうか。	2点
	⑮団員は二つ以上の専門技術をもっているかどうか。	2点
ウランムチの改革（10点）	⑯ウランムチの改革を積極的に進め、絶えずにウランムチの発展の新しい道を探求し、著しい効果をあげているかどうか。	4点
	⑰社会主義市場経済体制に適応する能力を絶えずに強め、活発に活動しているかどうか。	4点
	⑱市場経済に対応して、ウランムチの経営が成功しているかどうか。	2点
その他（10点）	⑲ウランムチは国外、あるいは全国、全区レベル（自治区）の主な芸術イベントに参加し、ウランムチの知名度を高めいているかどうか。	4点
	⑳ウランムチが国家、自治区、市の先進団体として表彰されているかどうか。ウランムチの団員が先進個人の称号を獲得しているかどうか。	6点

出所：ウランムチ現地調査資料（2011年8月15日取得）

られているのである。

次に「ウランムチの改革」という大項目に着目する。この項目のなかに評価対象になっているのは⑯「ウランムチの改革を積極的に進め、絶えずにウランムチの発展の新しい道を探求し、著しい効果をあげているかどうか」、⑰「社会主義市場経済体制に適応する能力を絶えず強め、活発に活動しているかどうか」と⑱「市場経済に対応して、ウランムチの経営が成功しているかどうか」という３つの点である。すなわち、社会主義経済体制に適応するため、ウランムチの改革は新しい方途を探求し、さまざまな領域の活動を開拓することが強調されている。一方で、小項目の中で、点数が低いのは⑫「団員の育成訓練」、⑮「団員の専門技術の習得」などで各２点である。ウランムチの改革は、市場経済に適応することが重視される一方で、ウランムチ内部における団員の育成については改革の項目には入っていない。

すなわち、自治区政府は「民族文化大区建設」という背景のもとに、ウランムチに対しての指導を強化し、ウランムチの年度事業費を増やし、ウランムチを旗政府の工作の中に入れるということが推進されているのである。例えば、ウランムチは「企業誘致資金導入方式」を取り、多くの観光客及び新規参入の事業者等を招き、商取引を促進することで、旗の中心工作の応援になっていると報じられている[28]。

本節では、改革開放後市場経済の導入のもとでのウランムチのブランド化をみてきた。このような背景の中で、ウランムチも「文化と企業連携」の道を選び、民族特色や地方特色がある作品を創作している。地方政府は現在の民族文化のブランド化政策を民族文化の振興政策として位置づけている。

第６節 ウランムチの活動の特徴

１．ウランムチの活動の変化

第一章では中央政府による民族文化政策の「国民統合」と「民族文化の保護」という両義性を見出した。内モンゴルにおけるウランムチの結成は中央政府の要求に対する地方政府の対応であり、ウランムチは中央政府の要求に応えたため中共に高く評価されていた。すなわち、「ウランムチ工作条例」に基づいて結成されたウランムチには「政治・政策の宣伝」と「民族文化の普及」という両義性が与えられた。本章ではウランムチの草創期からウランムチのブランド化期までのウランムチの活動の変遷をみてきた。以下、各時期におけるウランムチの活動の特徴をまとめる。

草創期においては、建国間もない中国では中国共産党により各民族の文化的・歴史的伝統を尊重しながら、少数民族への融和政策をすすめ、ウランムチのような文化芸術団体が多く結成された。団員へのインタビューでも、当時の中国共産党に対する大きな期待が語られている。草創期におけるウランムチの特徴としては、遊牧民に対して共産党の思想、社会主義思想を宣伝するという役割を担うとともに、モンゴル族への生活支援と文化的娯楽の提供という役割があった。しかし、1960 年代に入ると土地改革や人民公社の建設など社会主義改造が進められる中で、次第に中央政府による上からの管理・統制が強化されていき、ウランムチも人民に奉仕する活動を通じて民衆に中国への帰属意識と社会主義思想を啓蒙する役割が強調されていった。

停止期におけるウランムチの特徴としては、文革による政治的イデオロギーが前面に打ち出され、ウランムチは「毛沢東思想宣伝隊」として上演内容はすべて革命様板劇（革命模範劇）をモデルに歌詞や台詞が改変された。ウランムチのこのような役割の変化は、民族文化の固有性が政治体制により抑圧され、毛沢東思想に依拠した文化という前提でのみ民族文化の存続が図られたといえる。

文革の収束後、中国は改革開放の時代を迎え、回復・改革期になる。この時期にウランムチは体制改革が行われ、大きな自由度が与えられた。ウランムチの創作は政治宣伝からモンゴル族の文化的特徴を表現した作品が創り出されるようになった。このことがモンゴル族の民族意識を大いに高揚する役割を果たしたと考える。

ブランド化期には、ウランムチの活動は「文化と企業の連携」、「企業誘致資金導入方式」などにより展開され、民族文化の固有性をブランドとして商品化することで経済的利益を得ようとする手段に転嫁している。とくに 2000 年代に入り、ウランムチの活動はローカルな地域文化を強調するようになった。政府が「内モンゴル自治区文化大地域建設綱要」を打ち出したことにより、各地域のウランムチは当該地域の民族文化の固有性や独自性を強調し、そのことで各地域の民族文化が再発見され、その民族性を強調することで経済的利益に繋げようとした。

以上のように、ウランムチの民族文化活動が国策に深く影響され、その時々において政策に順応しながらも、根底において民族性を保持しつつ文化を基盤とした少数民族としての帰属意識を涵養し続け、民族文化の継承を担ってきた役割も果たしていたことが明らかとなった。

２．ウランムチに問われる課題

近年、ウランムチは行政や、外部の人々に招聘される興行活動が多くなる傾向が見られる。こうした動きの中にウランムチの新たな課題が生じているように思われる。民族文化活動を経済発展に位置づけることに対して、ウランムチの団員の意識には相違がみられる。表２－７は、現在のウランムチの活動に対する元団長と現団長のインタビューの記録である。

表 2-7．ウランムチの元団長と現団長はウランムチに対する認識

	M 団長（73 歳）	N 団長（47 歳）
履歴	・2002 年 60 歳で退職	・1985 年にウランムチの団員となった ・2002 年から現在までウランムチの団長
インタビュー内容	当時のプログラムは民族特色がある、時代を讃えたプログラムなどを上演していた。党、毛沢東、人民公社を讃えたプログラムがあるが、中心は民族歌舞であった。農村遊牧の上演は、６ヵ月で 140 回程度しなければならない。現在のように一時間上演したら何元かの上演料をもらうということはなかった。当時は結構厳しい状況にあったが、私はこの仕事を喜んでやっていた。 現在は収入がもらえなければ上演しなくなった。今は馬車が大きな車に変わった。そして、ガソリンなどにもお金がかかるし、舞台車も千元出さないと動かないのだ。農民たちはウランムチに対して不満があるのだ。今のウランムチは民衆に奉仕することができてない。上の人（行政側の幹部）に奉仕することになってしまった。	現在、企業の発展は企業文化の発展を配慮しはじめ、人心を凝集することが企業の発展に役立っている。ウランムチはこの企業文化に奉仕するのだ。特に現在、観光旅行に組み込まれている。当地の民族文化はウランムチを通じて普及する。現在経済発展にともない「企業誘致資金導入方式」が導入されている。この「企業誘致資金導入方式」により入ってきた客（観光客及び新規参入の事業者等）は地域文化を理解してもらう必要があるが、文章を読むことでこの地域を理解するのは難しいのだ。草原文化芸術を舞台に展示させれば、客は自分で見、聞くことで草原の生活をもっと理解するようになるだろう。近年、我々は大量の民族特色がある芸術作品を創作し上演した。内モンゴルの中では、民衆に宣伝し、文芸演出により故郷を愛するようになる。内モンゴル自治区以外の省に対しては、文芸演出により地域の地名度を高め、「企業誘致資金導入」の範囲を拡大する役割を果たし、地方政府の中心活動を支援している。同時に、「文化と企業の連携」の範囲を拡大し、いろいろな会社と連携したことで、大量の資金を得ることができ、設備を更新することもできた。つまり、演出レベルを高めるために良い整備条件をつくっただけではなく経済利益を得たのだ。
特徴	批判的な見方	積極的な見方

出所：2010 年 7 月 14 日～20 日の現地調査より筆者作成

表２－７に示したように、ウランムチの元団長と現団長の意識の違いが分かる。元団長である M 氏は現在のウランムチに対して、「ウランムチは収入が得られないと上演しない」傾向がある。「今のウランムチは民衆に奉仕することができていない。上の人（行政側の幹部）

に奉仕することになってしまった」とウランムチの活動に批判的である。M 氏はウランムチの創設時の団員であり、ウランムチは民衆に奉仕することを任務としてとらえている。

一方、現団長である N 氏は「特に現在、ウランムチは観光旅行に組み込まれている」、「内モンゴル自治区以外の省に対しては、文芸演出により地域の地名度を高め、『企業誘致資金導入』の範囲を拡大する役割を果たしており、地方政府の中心活動になっている」と現在のウランムチの活動の役割を肯定している。同時に、「『文化と企業の連携』の範囲を拡大し、いろいろな会社と連携したことで、大量の資金を得ることができ、設備を更新することもできた。つまり、演出レベルを高めるために良い環境整備条件をつくっただけではなく経済利益を得たのだ」と「文化と企業の連携」によるプラスの側面があることでのウランムチの活動を N 氏は肯定している。M 氏は、ウランムチが民族文化の商品化に批判的である。

元団長の M 氏へのインタビューではウランムチの活動は上演を通じて民衆に奉仕する意識が強かった。前述のように、農村、遊牧地域に入り、農民、遊牧民に演出奉仕するのはウランムチの主要な任務であった。M 氏はこうした活動をウランムチの活動の精神としてとらえていた。一方、N 団長が指摘しているように、「文化と企業」の連携は経済的利益を得る側面があるが、経済利益を強調することにより、民族文化興行活動は観光産業に利用され、経済活動の一部として位置づけられるようになり、民族文化の普及という役割が希薄化していっているのではないかとの懸念が生じる。民族文化を資源にし、観光産業に結び付けることは、国内市場の安定的な発展を基盤として成り立っているのである。したがって、少数民族自身が主体的に文化活動を行うことが求められると考える。次章では、民衆レベルにおいて、少数民族の文化振興活動がどのように主体的に文化振興（保持）活動を行っていく可能性があるのかを考察したい。

---

[1] 本データは達・阿拉坦巴干　朱嘉庚主編『ウランムチを讃える』内モンゴル自治区ウランムチ学会、2007 年、p. 61 を基づいたものである。また、内モンゴル自治区文化庁のデータによるとウランムチは現在 75 団体となっている（2018 年時点）。

[2] 内モンゴル自治区文化庁編『ウランムチの路―ウランムチ結成四十周年記念（1957～1997）』内モンゴル人民出版社、1997 年。

[3] 達・阿拉坦巴干　朱嘉庚主編『ウランムチを讃える』前掲書、pp. 61－64。

[4]『当代中国の民族工作』編集部編『当代中国民族工作大事記 1949－1988』民族出版社、1989

年、p. 79。

[5] 内モンゴル自治区文化庁編『ウランムチの路―ウランムチ結成四十周年記念(1957～1997)』前掲書、p. 80。

[6] 同上、p. 81。

[7] 同上、p. 235。

[8] 同上。

[9] 同上、p. 87。

[10] 同上、p. 359。

[11] 同上、p. 91。

[12] 内モンゴル人民出版社編『ウランムチ（一)』内モンゴル人民出版社、1965 年、p. 9。

[13] 同上。

[14] インタビューは 2010 年 7 月 27 日に M 氏のお宅を訪問し、1 時間ほど実施した。

[15] M『ウランムチの緑葉』内モンゴル少年児童出版社、2006 年、p. 2。

[16] 布仁・刘叢「洒满草原的醉歌―记曲坛名家拉西敖斯尔」『内モンゴル芸術』p. 53。

[17] M のインタビューにより。

[18] 内モンゴル自治区文化庁編『ウランムチの路―ウランムチ結成四十周年記念（1957～1997)』前掲書、p. 82。

[19] 同上、p. 112。

[20] 同上、p. 121。

[21] 同上、P. 146。

[22] 同上、p. 357。

[23] 好必斯「西部大開発と草原音楽文化の保護と伝承」『人民音楽』第 6 期、2003 年、p. 27。

[24] 内モンゴル文化庁編『ウランムチの路―ウランムチ結成四十周年記念（1957～1997)』前掲書、p. 306。

[25] 9 つのプロジェクトと言うのは、教育プロジェクト、逸品創作プロジェクト、民衆文化プロジェクト、人材養成プロジェクト、草原文化芸術ブランドプロジェクト、文物の守り、開発、利用のプロジェクト、文化産業開発プロジェクト、基礎施設プロジェクト、文化交流プロジェクトである。

[26] 賽罕、「关于发展乌兰牧骑事业的思考」『跨入新世纪的辉煌－内蒙古艺术研究所研究成果选 2000-2009』内モンゴル大学出版社、p. 254。

[27] 同上、p. 255。

[28]「通遼日報」2005 年 6 月 3 日。

第三章　モンゴル族のアンダイ文化の新たな創造の経緯と普及の過程

本章では変動の激しい中国社会に対応する民衆レベルでの対応を考察する。第一章と第二章では民族文化政策による政治的統合が進められ、民族文化は常に管理・統制の対象とされていることが明らかになった。本章では民衆レベルにおいて文化の担い手はどのように民族性を形成し続けていたのかを明らかにしたい。ここで内モンゴルのモンゴル族のアンダイ文化を取り上げ、アンダイの多様な変化を検討することを通じて、アンダイを変容させなければならない政治的背景を示し、新しい時代に適応させるための新アンダイの創作にあたっての民族文化の担い手の「工夫」と文化の継承を検討する。また、改革開放後の文化振興政策の推進のもとでの行政主導によるアンダイ文化地域づくりの経緯を明らかにし、地方政府のアンダイ文化振興の取り組みの実態及び民間レベルでの芸術団体の創出によるアンダイの普及について検討する。最後に、新たに創り出されたアンダイについて地域の人々はどのように考えているのかをアンケート調査を通じて分析する。以上は現地より得られた資料と現地に実施したインタビューとアンケート調査より明らかにする。

第１節　モンゴル族のアンダイ文化の多様化への着目

１．アンダイ文化とは

アンダイとは、モンゴル族の伝統的な民間舞踊である。中国国内では民俗学、社会学、医学の視点からのアンダイ研究は多く行われてきた。新中国成立以前のアンダイは、雨乞いを目的とする「ボリゴアンダイ」、鬼神を追い出すことを目的とする「アダーアンダイ」、婚姻と親族を表す「ウリガーアンダイ」があると指摘されている[1]。アンダイの解釈について一般的に言われていることは、「ボ（シャーマン―引用者）が歌舞によって病気を治す特有の儀式であった」[2]ということである。「アンダイとは、主として『アンダイ病』である若い女性の精神疾患を治療するために行われる歌と踊りからなるモンゴルの文化的儀礼であり、とくに 17 世紀に発展し、今世紀なかごろまで広く行われていたものである」[3]ともいわれている。煎本によれば、アンダイ歌手が疾患の原因をさまざまな質問からなる歌により明らかにした後、歌によって助言を与え、回復した患者はアンダイ歌手に加わり、治療は娯楽へ移行すると解説されている[4]。烏日古木勒は「アンダイはシャマニズムの治療儀式と音楽舞踊が結合した民間治療儀式である」と指摘した[5]。

表３−１はアダーアンダイの治療プロセスである。儀式では、会場の準備、開幕（歌い踊る）、儀式のクライマックス、閉幕（霊を追出す）という過程がある。儀式のなかでは、会場中央に車軸あるいは車輪を立てる。これを「ナイジム」という。「車（シャ）」はモンゴル族の生活、生産、征戦の重要な道具であり、また「車」はモンゴルの「雷を避ける」とか「病を

表3-1．アダーアンダイの(鬼神を追い出す)治療プロセス

儀式プロセス	会場の準備	開幕	儀式のクライマックス	閉幕
儀式詳細	・儀式の日程、規模を決める ・平坦で広い場所を設定する ・会場中央に1本の車軸あるいは車輪を立てる	・患者がイスに座り、シャーマンが歌を通じて病因を尋ねる ・歌手がハンカチをもって患者をアンダイ会場へ誘導し、患者が多くの参加者と一緒に踊る	・アンダイ歌手がお茶の賛美の歌を歌う ・患者がお茶を飲み、会場を回って走り発汗させる ・歌手が即興で歌詞を作り歌い、治療の効果を高める	・身に取りについている霊を追い出すのに必要な紙屋を準備する ・霊を患者から追い出す ・患者が自身の霊魂を取り戻し、回復する

出所：烏日古木勒「アンダイ伝説と治療儀式」『アンダイ文化研究論集』(内モンゴル人民出版社、2009年、pp.177－178)に基づき筆者作成。

避ける」という意味を持っていた[6]。伝統アンダイの伝説では、精神疾患となった女性を身内が「車」に乗せ、遠い場所へ避難させる。途中、車輪が断ち切られ、悲痛のなか身内が「車」を回り、足を踏んで泣き始めた。病気の女性は身内をまねる。無意識のなか、女性の体が温かくなり、病気が回復したとされる[7]。アンダイ伝説にみられるように、モンゴル族の生活の中に使われている「車」は「病」を「避ける」という意味で、「車軸」はその後の伝統アンダイ儀式の象徴になった。こうしたアンダイ儀式は、モンゴル族生活のもとでつくられた。

近年のアンダイの研究では、内モンゴル大学サルラの『アンダイ文化に関する論述』(2009)がある。サルラは、アンダイを伝統アンダイと新アンダイに分けている。伝統アンダイとは、1947 年以前のものを指し、病気を治すボの儀式であり民間の伝統である。新アンダイとは、儀式的側面が弱まり、芸術の形式で発展したアンダイである[8]。つまり、新アンダイは、シャマニズムという宗教的色彩が弱まり、踊りを中心に演じられるように変容した形態である。伝統アンダイでは、アンダイ歌手がリードし、患者が参加者と一緒に歌いながら踊るのが儀礼の特徴である。新中国成立後、アンダイは「封建迷信」と批判され、アンダイの宗教的性質が弱まった。また、医療技術の発展により、伝統アンダイの衰退が始まった。文化の担い手による舞台アンダイが創作され、改変されたアンダイは宗教的目的ではなく、踊りを中心にした娯楽性が強いものとなった。こうしたアンダイの変容は新アンダイとして捉えられるようになった。また、80 年代に「アンダイ伝奇」(モンゴル劇) が創作され、1988 年に「アンダイ伝奇」は「ホルチンのモンゴル劇」と命名される。アンダイのもう一つの変容として、アンダイ体操がある。

したがって、伝統アンダイからアンダイ舞踊へ、アンダイ劇およびアンダイ体操へという変容があったことが指摘できる。本章では新アンダイが創作された経緯と普及の過程を検討する。アンダイは時代によって異なる形でモンゴル人に知られてきた。本研究では、

ある目的のために行われている歌と踊りからなる宗教的儀式（または治療的儀式）である「ボリゴアンダイ」、「アダーアンダイ」、「ウリガーアンダイ」を伝統アンダイといい、踊りを中心に演じられるように変容したアンダイ舞踊とアンダイ劇、アンダイ体操のことを新アンダイとしてとらえる。

２．調査地の概要

本章に提示した課題を明らかにするため本研究では、内モンゴル通遼市の庫論（クロン）旗（以下、クロン旗）を調査地として設定した。その理由は以下の通りである。

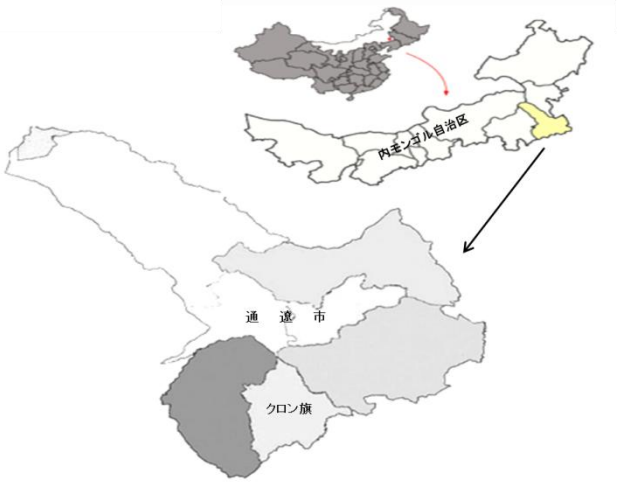

図3-1 クロン旗の位置

１つ目は、上記のアンダイの起源については、20 近くの説がアンダイの研究者によって説明されおり、そのなかで、多くの研究者はアンダイがクロン旗から発生したことを指摘している。新中国成立後、1960 年代にクロン旗は、内モンゴルの「文化旗」と命名されて、1996 年には国家文化局によって「中国アンダイ芸術の郷」と命名されている。2006 年には、国家よりモンゴル族のアンダイ舞踊が無形文化財に指定された。

２つ目は、内モンゴルは漢族とモンゴル族、他の少数民族が混住している地域である。それは都市部だけではなく、県・旗及びその下位行政単位である郷・鎮においてもこうした傾向がみられる。クロン旗は内モンゴル通遼市の西南部に位置し、東と西は内モンゴルのほかの旗と接し、南に遼寧省と隣接している。９つの鎮から構成されており、人口 17.4 万人のうちモンゴル族人口 10.5 万人（59%）、漢族は 6.7 万人（38%）を占めている。このようにクロン旗はモンゴル族と漢族が混住し、モンゴル文化と漢文化が相互に浸透している地域であると考える。調査地であるクロン鎮は旗政府の所在地であり、全旗の政治・経済・文化の中心地である。都市化が進むなか農村地域から移住した農村出身者も多いという特徴がある。

第２節　伝統アンダイの衰退化に伴う新アンダイの創造

１．伝統アンダイの衰退化の理由

表３−２は巴・蘇和主編『伝奇的クロン文化』（内モンゴル文化出版社、2013 年）において、クロン新アンダイの発展状況の記載に基づきまとめたものである。1955 年に内モンゴル文化局は「民間芸術文化遺産の調査記録に関する通知」を出し、内モンゴル歌舞団体の団員および文化館の職員は民間アンダイ芸人に聞き取り調査を行い、アンダイの基本動作、歌詞、曲を記録し、伝統アンダイの保存活動を行った。1956 年にクロン旗民間アマチュア文芸公演では初めて新アンダイが上演された。しかし、本公演では伝統アンダイをあまり改変せずに髪をおろしたアンダイ病である女性を演じたため文化局の役人に厳しく批判され、「アンダイの古きを捨てて、精髄を継承するよう」指示された。その後、クロン旗アンダイ上演団体はジリム盟文化局の指示を受け、1958 年にジリム盟で開催された演劇コンクールでは、「人民公社の十大優越性」というアンダイ舞踊を上演し、会場を沸かせたと記録されている。新アンダイは伝統アンダイのようなアンダイ病を治療する目的ではなく、ま

表3-2 ．クロン旗新アンダイの発展状況

年代	内容
1956年	クロン旗民間アマチュア文芸公演ではアンダイの芸術家たちは伝統アンダイを保存し、新たに創作したアンダイ舞踊を上演した。アンダイは初めて文芸の舞台に登場した。
1958年	1958年に通遼市で開催された演劇コンクールではクロンアンダイ代表演出団体は「人民公社の十大優越性」というアンダイ舞踊を上演し、会場を沸かせた。
1958年	全国「百万民間民謡」の会議が北京で開かれ、クロン旗アンダイの演出団体はアンダイ舞踊を上演した。（アンダイは初めて北京で上演された）
1960年	クロン旗文化館は『アンダイの収録』を編纂した。本記録ではアンダイの調査、保存を紹介するとともに改変し創作した7つのアンダイの動作を紹介した。また24のアンダイメロディーが記録された。これは初めてのアンダイについての詳細な紹介であり、アンダイの普及に役割を果たした。
1960年	内モンゴル自治区文化工作会議がクロンで開かれた。会議では500人のアンダイ舞踊が演出された。また同年、クロン旗が「文化旗」に命名された。
1965年	ウランムチは全国の29の省、自治区、市でアンダイを上演し高く評価を受けた。
1972年	クロン旗ウランムチ団体は「牧民の心は北京に向かう」というアンダイ舞踊を上演した。
1975年	ジリム歌舞団体は内モンゴル自治区成立30周年記念の開幕式で伝統アンダイの音楽に民間歌の要素を入れて創作したアンダイを上演した。
1980年	クロン旗ウランムチが創作し上演した「アンダイの歌」はジリム盟の文芸コンクールで優秀なプログラムと評価された。
1985年	斯巴特尓が編集し、クロン旗ウランムチが上演した劇「アンダイ伝奇」は内モンゴル自治区の文芸コンクーで「双優秀賞」（創作、上演）を受けた。
1988年	内モンゴル文化庁は「アンダイ伝奇」を「ホルチンのモンゴル劇」と命名した。
1996年	クロン旗は国家文化局より「中国アンダイ芸術の郷」と命名された。
1998年	クロン旗は第一回アンダイ芸術祭を開催した。
2006年	クロン旗が届け出した「モンゴル族アンダイ舞踊」は国家級無形文化遺産と批准された。
2009年	中国・クロンアンダイ文化芸術祭を開催した。
2011年	クロン旗はアンダイ芸術祭をもって国家文化部より「中国民間文化芸術の郷」と命名された。

出所：巴・蘇和主編『伝奇的クロン文化』内モンゴル文化出版社、2013年、pp. 238-240に基づき筆者作成。

たは雨乞いを目的とするでもなく、アンダイの歌詞は新中国成立後の新しい時代の新しい生活を讃えて、党の政策を速やかに宣伝するという内容で創作されたため当時の社会に受け入れられたといえよう。しかしながら、新アンダイの出現の背景には伝統アンダイの衰退化があった。伝統アンダイの衰退化の要因には以下の２つの点があると考えられる。

１つ目は新中国成立後の国家政策の影響である。新中国成立後は、各民族の社会改革は大きく二つの段階を経て行われた。まず、解放前の封建的な（一部、農奴制や奴隷制）土地制度を廃止し、一律に人民に土地をわけあたえる改革を中心に進められた「民主改革」であり、次の段階として、それまでの生産資本の私有制を社会主義体制に改め、主に農業の集団化を中心として進められた「社会主義改造」である[9]。内モンゴル地域における土地改革は、東部地域においては 1947～1948 年に、西部においては 1951～1953 年に行われた。1947 年の土地改革の時期には、伝統文化は現代化を阻害するものとして見なされていた。中共は社会主義国家の建設に向けて、土地改革、人民公社の編成、封建迷信の打破などを次々と実行していた。とくに、文革期では、民族文化が否定され、アンダイは反革命的、封建的、迷信的なものと見なされ、「国を裏切る道具」と批判された。アンダイを調査し記録していた民間の芸人が「妖怪」と批判され抑圧された。前述のように、アンダイの上演では、髪をおろしたアンダイ病である女性を演じたため迷信的なものと批判された。こうした国家背景により、伝統アンダイが否定され、病気を治療する儀式の衰退化につながったと考えられる。

２つ目は現代医療技術の発展の影響である。伝統アンダイの衰退のもう一つの背景として、新中国成立後、医療技術の発展を重視し、医療機関の設置に伴い以前のシャーマンを招き、シャマニズムを通じて治療する儀式が行われなくなったと考えられる。

こうした社会的背景のもとで、アンダイチン[10]は当時の時代に合わせ社会主義を反映した内容と民族特徴を表現した舞台アンダイを創作した。新アンダイの「新」とは新中国成立という新しい時代背景のもとに出現したという意味合いをもつとともに、伝統アンダイを改変することによりアンダイの動作が美しくなった（芸術的になった）という意味合いを持っている。

２．新アンダイの創作にあたっての文化の担い手の「工夫」

1950 年代は内モンゴル文化局「民間芸術文化遺産の調査記録に関する通知」（1955 年）とジリム盟文化局「より一層アンダイ遺産の発掘と保存に関する通知」（1958 年）の公布によりクロン旗の農村地域にはアンダイのフィールド調査が行われた。しかし、その活動は

当時の「百花斉放、古きを退けて新しきを出す」という方針のもとで、アンダイの古きを捨てて、精髄を継承すると指示され、アンダイは意図的に改変されることに至った。アンダイを変容させなければならない当時の状況について『アンダイ文化研究論集』[11]に記載されている「クロン旗アンダイの発掘と記録について」に基づき分析する。本記録はフィールド調査に参加したＹ氏の口述である。

Ｙは 1953 年にクロン旗文化館に勤め始めた。具体的な仕事は民衆のアマチュア文化を指導することであった。1955 年に内モンゴル文化局「民間文化遺産の調査記録に関する通知」が出されためジリム盟文化局よりアンダイを発掘する活動が提案された。その任務はＹに与えられた。以下、Ｙの語りに基づき新アンダイが創作された政治的背景を分析する。

① 伝統アンダイの保存活動の始まりと政治の制約

私（Ｙのこと）はクロン旗のスウス（地域名）の二人のベテランアンダイチンを訪問した。お二人によると建国前にスウスではアンダイは活発に行われていたという。1947 年の土地改革の時期ではアンダイは「封建迷信」と禁止されたためやむを得ず数年の間にアンダイを歌うこと踊ることができなかったという。私はお二人にアンダイについて聞いたら、二人は「アンダイを歌うのが封建迷信を復活させることになるから」と質問に答えるのを拒否した。私は内モンゴル文化局とジリム盟の通知を再び説明したところお二人の心配がなくなり私にアンダイについてお話してくれた。今回のことを通じて私はお二人にアンダイの動作を指導してもらい、アンダイの曲を学び、アンダイの伝説を教えてもらった。この一年間に私はスウスソムに６回行き、一回半月の期間でアンダイの調査記録を行った。自分もアンダイを歌い踊るようになった。

1956 年の年末に春節に行うクロン旗民衆アマチュア文化コンコールのプログラムを準備するため、再びスウスに行った。今回はスリブガチャ（村）の党委員会の許可を受け、スリブガチャの演出団体を結成し、約 20 名の文芸に興味がある若い男女に参加してもらった。この演出団体の主なプログラムはアンダイである。一ヵ月の練習を経て、1957 年 1 月（旧暦）にクロン旗で行われた民衆アマチュア文化コンコールに参加した。これはアンダイの初の舞台での上演であった。しかし、今回の上演は失敗に至った。プログラムを評価したジルム盟文化局の方はアンダイが「封建迷信」であると厳しく批判した。今回の失敗に私は主な責任を取るべきである。私は「百花斉放、古きを退けて新しきを出す」という文芸の方針と民族民間文化芸術遺産の発掘には古きを捨て、精髄を残すという原則への理解が不十分であったと思う。民間に行われたアンダイを内容から形式までは改変せずそのまま

舞台にもってきたため批判されたと思う。その後アンダイを言い出す勇気がなくなった。

（中略）

② 新しい時代に適用させるための工夫

1958 年４月に内モンゴル文化局はジリム盟演劇コンコール大会（９月）を開催することを決定した。ジリム盟の各旗、県は演出団体を組織することが要求された。ジリム盟文化局はとりわけクロン旗文化局にさらなる民間アンダイの発掘を行い、文芸の舞台に持ってくることが要求された。この任務はまた私に与えられた。このことは私にとって予想外であり、とてもうれしかった。したがって、私は再びアンダイの発掘活動に取り組んだ。今回は改めて少人数の演出団体を結成し、アンダイ舞踊の準備に至った。前回の失敗と教訓を受け、今回は新時代の新たな物事を賛美した全く新しくアンダイの歌詞を創作した。当時は大躍進の時期であり、人民公社は新しい物事として全国で始まっていた。私のアンダイの歌詞は人民公社の十大の優越性を書いた。ちょうどこのとき、『人民日報』では「人民公社は良い」という題目で文書が発表されていた。私はアンダイの歌詞を書くときにこの題目を引用したのである。ジリム盟文化局のリーダーの指示のもとでさらなる修正を行った。（中略）9 月上旬のある日ジリム盟通遼市演劇コンクール大会は開催された。最初の一番目のプログラムはクロンアンダイ舞踊である。今回の上演は前回と違ったところは私たちがあでやかな民族衣装を着て、手に赤い絹布を持った。アンダイは今までの民間上演と違って、新しい歌詞、新しい動作、新たな服飾を加え、照明と音響が一体となって会場を沸かせたのである。

（中略）

今回のコンクール大会は約十日間行われた。ジリム盟の盟長は閉会式の挨拶ではアンダイが民族民間文化芸術の一つの形式であると肯定した。盟長は今回のコンクール大会に向けて民族民間文化遺産を発掘し、舞台アンダイを作ったことが今回のコンクール大会の大きな成果であると指摘した。今回のコンクール大会を受け、アンダイは民族民間文化芸術の一つの形式として人々に改めて認識され内モンゴルの各地域に普及するようになった。

（中略）

1960 年 8 月に内モンゴル自治区文化活動会議はクロン旗で開催された。クロン旗文化局は会議に『アンダイの収録』を配布し、会場の建物の広場で 500 人のアンダイ舞踊を上演した。本会議をきっかけにアンダイを内モンゴルの各地域に推進し普及することができ、クロン旗は「アンダイの郷」と呼ばれるようになった。

上記の Y の語りでは、伝統アンダイは「封建迷信」と批判されたためやむをえず行われなくなったことが分かる。モンゴル人の間では伝統アンダイを踊ることに「政治的な怖さを感じ」、アンダイチンはアンダイを歌うこと、踊ることができなかった。「民間文化遺産の調査記録に関する通知」の公布をきっかけに、文化館の職員によるアンダイの記録が行われ、初の舞台アンダイは上演されたが、再びジリム盟文化局に「封建迷信」と批判される状況となった。その原因は「アンダイを内容から形式まで改変せず」に上演したことにあると Y は言及する。つまり、新中国の新しい時代に適用していなかったという当時の幹部の判断であった。

一方、「古きを退けて新しきを出す」という方針のもとで Y は「前回の失敗と教訓を受け、アンダイの宗教的な要素を捨て、新時代の新たな物事を賛否した新たなアンダイの歌詞を創った」。また、ジリム盟文化局のリーダーの指示のもとでさらなる修正を行い、新たに創作されたアンダイは社会的（政府）に認められた。つまり、アンダイ芸術家たちは、その文化を中国社会に適用させるために試行錯誤しながら新たな舞台アンダイを創作した。アンダイの創作者はアンダイの宗教的要素を捨て、新時代の新しい出来事を内容に盛り込み、中国社会に適用できる形で「新アンダイ」として登場させたのである。

中国は建国当初、民族の自決、平等、尊重を掲げ、民族融和政策を指向していた。しかし、アンダイ文化の保存・継承の観点から見れば伝統文化をそのまま容認したわけでなく、社会主義の思想に即して封建批判、迷信打破を指導し、新国家への政治的統合を進めることが意図されていた。一方、モンゴル族にとっても伝統アンダイから宗教的要素を排除し、踊りを中心にした娯楽性の強い文化としてアンダイ文化を再構築しながら、新アンダイとしてアンダイの伝統を受け継ぐ新たな形態として捉えようとしていった。

新アンダイの登場をきっかけに表３－２に示しているように、1958 年からクロン旗民間アマチュア文芸芸術団体による舞台アンダイは上演されるようになり、1960 年にクロン旗文化局は『アンダイの収録』を編纂し、アンダイの動作を記録し紹介した。『アンダイの収録』には内モンゴル歌舞団体の団員によるアンダイ調査の整理・記録とアンダイの新たな７つの動作を紹介し、伝統アンダイの動作を美化し、規範化したと指摘されている[12]。『アンダイの収録』では初めて文字でアンダイの基本動作が紹介され、アンダイの普及に貢献したのである。1965 年に内モンゴルのウランムチ全国巡回上演団体は 29 の省、自治区、市においての上演でも新アンダイを踊り、好評を受けたのである[13]。

３．新アンダイの多様化

新アンダイは普及しつつあったが、50 年代、60 年代は主に「人民公社」を讃えるような中国社会を称賛する内容が中心であった。文革期にアンダイは反革命的、封建的、迷信的なものと見なされ、「国を裏切る道具」と批判され、アンダイを調査し記録していた民間の芸人が「妖怪」と批判される。

一方、80 年代からアンダイに創作において内容の政治的縛りからアンダイチンの自由な発想に基づく作品が創作されるようになった。1985 年にクロン旗ウランムチに所属していたス・バテルが「アンダイという芸術の物語をどのように舞台に表現するか、それの具体的な時代、場所、人物をどのように芸術の形にするか」という発想をもち、「アンダイ伝奇」の創作を始めた。「アンダイ伝奇」の特徴は、伝統アンダイが踊ったり歌ったりする部分を継承し、歌、踊り、劇が融合し一体化した表現形式である。劇の主旨は、アンダイがモンゴル族の生活に基づき発生したことと、モンゴル民族の封建社会の下での厳しい状況を表し、自由、幸福な社会への期待を表すものである。特に政教一体の封建統治の下で民衆がいかに生き抜き、持つべき自由と愛情を勝ち取ったかを表し、現在の人々に美しい未来を創造する精神をもつことを激励している[14]。ス・バテルが創作した「アンダイ伝奇」は、1988 年に「ホルチンのモンゴル劇」と命名される。白は「『アンダイ伝奇』は伝統アンダイが踊ったり歌ったりする部分を継承し、歌、踊り、劇が融合し一体化した表現形式であり、『アンダイ伝奇』は新時代のホルチンモンゴル族の生活、精神世界を反映し、現代のホルチンモンゴル族の審美意識に一致した逸品になる」と指摘している[15]。したがって、「アンダイ伝奇」の創作から見ると、内容は政治的宣伝という側面から離れモンゴル族の生活、精神世界を反映しているという特徴がある。アンダイのもう一つの変容として、アンダイ体操がある。伝統アンダイの儀式では会場を回り踊ることにより、患者の体を発汗させ、体をリラックスさせる効果がある。このようなアンダイの機能的効果に基づき、アンダイ体操の普及は現代の人々にフィットネスの健身効果をあたえている。

以上のとおり、新アンダイはさまざまな形へ変容してきた。宗教色彩のあった伝統アンダイからアンダイ舞踊、アンダイ劇およびアンダイ体操へという変容があったことが指摘できる。2000 年代に入り新アンダイはモンゴル文化のシンボルとしてクロン地域に定着するようになる。以下では地方政府によるアンダイ文化の推進取組みについて検討する。

第３節 クロン旗におけるアンダイ文化の推進

新アンダイは、民族文化の担い手たちによって民衆に普及しやすい形に変容させられ、多くの民衆に受け入れられることを通じて、アンダイ文化が広がっていった。本節ではクロン旗政府によるアンダイ文化の推進と民間レベルでのアンダイ文化継承活動に着目し検討する。

１．クロン旗政府によるアンダイ文化地域づくり

国家文化部は 1987 年から全国的に民間芸術之郷と特色芸術之郷命名活動を展開した。2002 までに全国では 486 の県が「中国民間芸術之郷」と「中国特色芸術之郷」と命名された。内モンゴル政府は 2003 年に「内モンゴル民族文化大区建設綱要」(「内モンゴル文化大地域づくり綱要」、以下「綱要」)を打ち出し、民族の特色や地域の特性を強調した地域づくりを目指した。そして、内モンゴルの多くの地域は「民族文化大区」(民族文化大地域)に命名された。例えば、通遼市の地域は「中国民間芸術の郷」、「ホルチン叙述民歌の郷」という名称がつけられている。

2007 年に文化部より「中国民間文化芸術之郷命名方法」を発布し、名称を「中国民間文化芸術之郷」と統一化するよう以下のように規定された。

第一条　社会主義先進文化の振興および中華民族の優秀文化を継承するため、民間文化芸術事業の繁栄と発展を推進し、「中国民間文化芸術之郷」の命名および管理を規定化する。

第二条　「中国民間文化芸術之郷」とは当該地域では広く普及されているある種の大衆的な文化芸術活動は鮮明な特色をもっており、当該地域の民衆文化生活および経済発展に大きな影響力ある県（県級市、区）、郷と社区のことである。

第三条　「中国民間文化芸術之郷」は次の基本条件を満たす必要がある。

（一）既に省級文化行政主管部門から各種類の文化芸術之郷に命名されていること。

（二）当該地域の政府は民間文化芸術之郷づくりを重視すると同時に、当該地域の文化振興の全体計画に取り入れ、当該地域の精神文明建設や経済発展を促進する。

（三）民族と地域特色がある文化芸術活動を広く展開し、当該地域の人々に広く認識させ、当該地域の民衆文化生活に大きな影響をもつべき。

（四）民間文化芸術活動の展開にあたって代表人物と中心団体をもっており、芸術や文化の創作、上演、展示、養成、交流などの活動を常に行っていること。また、民間文化芸術郷づくりの資料室（保存）を整えていること。

（五）常に民間文化芸術活動を行う場所、設備などが備えており、活動を展開する経費の保障があること。

通遼市のクロン旗は 1996 年に国家文化局より「中国アンダイ芸術郷」と命名された。2006 年にクロン旗が届け出した「モンゴル族アンダイ舞踊」は国家級無形文化遺産として認定された。2011 年に「中国民間文化芸術の郷」と命名された。

クロン旗政府がアンダイ文化を通じて地方の知名度を高めるため行った取り組みの一つが旗政府主催の「中国・クロン第一回アンダイ文化芸術祭」（以下、アンダイ文化芸術祭）の開催であった。アンダイ文化芸術祭は民間で行われている伝統的な祭りと違っており、主にアンダイ文化の発信と経済交渉を行うことを目的としている。2009 年８月６日に中共クロン旗委員会、クロン旗人民政府と内モンゴル社会科学学院共催の「中国・クロンアンダイ学術検討会」は内モンゴルのフフホトで開催され、検討会では主にアンダイ文化芸術祭開催にあたって重要なプログラムの内容が検討された。会議には中国社会科学院、北京大学、中央民族大学、内モンゴル大学、内モンゴル民族大学などからの 41 名の研究者を招いた。そして、2009 年９月８日～10 日にアンダイ文化芸術祭を開催することが決まり、その主なプログラムとして 2009 人（2009 年という数字と合わせるため）のアンダイ舞踊の上演と内モンゴルテレビ番組「魅力中国」と共同で大型の文芸の夕べを開催する。そのほか、学術検討会を行う一方クロン旗経済社会発展と民俗民間芸術の展覧および経済交渉会などを行うことが決まった[16]。

アンダイ文化芸術祭の開催にあたって巴・蘇和主編『アンダイ文化研究集成』（内モンゴル人民出版社、2009 年 7 月）が出版された。本書はアンダイ文化芸術祭の開催に向け出版されたものであり、クロン旗宣伝部の部長は編集委員会の委員長を務め、内モンゴル民族大学の巴・蘇和教授を中心に編集された。本書にはモンゴル語と漢語で発表されている 46 のアンダイを対象にした研究、調査報告などが掲載された。

また、2011 年６月 15 日に中国共産党クロン旗委員会、クロン旗政府と内モンゴル民族大学が共催して「親書『アンダイ之郷―クロン旗歴史文化概要』[17]出版式典」が開催された。さらに、2012 年にクロン旗政府、内モンゴル大学との共同プロジェクト『クロン歴史文化研究シリーズ』の成果となる『クロンアンダイ史論』[18]がクロン旗人民政府の出資、支援のもとで出版された。『クロンアンダイ史論』は伝統アンダイから新アンダイの歴史的変遷を時系列に検討した学術的な研究となる一方、本書には著名なアンダイ伝承人の紹介などがまとめされており、クロン地域を理解する貴重な研究および参考書となっている。このよ

うに旗政府は大学と共同でクロン旗の文化をまとめ、クロン旗の歴史、文化を記録として残している。一方、これらの成果は旗政府にとってアンダイ文化を発信する手段ともなっている。

これ以外にも政府によるアンダイ文化の保存活動が行われている。例えば、アンダイ文化を保存する取り組みでは、旗政府は 4500 万元を投資しアンダイ博物館の建設に着手した。2012 年にアンダイ博物館は地域の人々にアンダイの歴史と文化を理解する場として設置されている。

さらに、アンダイ伝承人を認定する取り組みとアンダイチンを養成する取り組みもみられる。伝承人認定の目的は民衆の文化生活を活発にさせ、アンダイ文化を振興させ、次世代を養成ためである。そして、アンダイの伝承人を国家級、市級、旗級の３つのレベルに分けている。アンダイの伝承人は民衆にアンダイを普及していく役割を担っている。

一方、クロン旗の各地域において民間芸術団体が成立し、2015 年にクロン旗の 186 農村、９社区では 195 アマチュア芸術団体が設立された。こうした民間アマチュア団体は自発的に組織されたものである。そしてアンダイ文化を発展させるために、専門芸術団体（ウランムチ）は農村に入りアンダイ舞踊を教える活動も行っている。そのほか、民間のアンダイ伝承人は地域住民にアンダイ踊りを教える活動も行っている。2015 年には文化建設活動に結びつけ、旗政府はアンダイ文化「六進」[19]（各機関、企業、学校、兵営、社区、農村）活動を展開した。「六進」活動を通じて、地域の人々は誰でもアンダイを踊るようになり、地域の良好な雰囲気をつくり、民衆のアマチュア文化生活を豊かにするとしている。実施方法として、専門芸術団体であるウランムチを中心にアンダイ曲とアンダイ舞踊の動作を統一し、統一させたアンダイ舞踊はウランムチを通じて地域住民に広げていく活動が計画された。

以上はクロン旗政府によるアンダイ文化推進の取り組みであった。次に民間芸人によるアンダイ文化継承活動について検討する。

２．民間レベルでのアンダイ文化の継承

新アンダイは、アンダイチンよって中国社会に適応したモンゴル族の新しい文化として創造された。新アンダイの登場はアンダイの新しい発展であると評価され、新アンダイを創作した民間芸人たちを新アンダイ創始人と呼称した。本節では、クロン旗におけるアンダイ伝承人へのインタビューを通じて、民間芸人による文化継承活動について検討する。インタビューの対象者と実施日程は下記の通りである（表３-３）。

表3-3. インタビュー調査の対象者と実施日程

	年齢	職歴	伝承人	インタビュー実施日程
X氏	70代	1965年9月～2005年7月　白音花鎮中学校　教員　現在退職	通遼市級アンダイ伝承人	2015年6月13日
Z氏	70代	1966年～2006年　教員　現在退職	無形文化遺産アンダイ代表性伝承人	2014年5月14日
W氏	50代	1984年～1986年　養畜牧ソム文化ステーション　ステーション長 1986年～1998年　ジャルト旗図書館 1998年～2006年　クロン旗政府 現在退職	通遼市級アンダイ伝承人	2014年5月10日 2016年6月8日
L氏	40代	農民	無形文化遺産アンダイ代表性伝承人	2014年5月13日

（1）地域のベテランアンダイチンから学ぶ

クロン旗における養畜牧艾里（村)、坤地艾里、泊白艾里の３つの地域はアンダイ文化の中心地域といわれ、アンダイをほかの地域へと伝播させ、アンダイを創新させた中心地域であると知られている。この三つの地域では、多くの著名な民間アンダイチンがいたことで、建国後に彼らを対象にアンダイのフィールド調査が行われ、彼らによって新たに創作されたアンダイは新アンダイとして知られている。こうした文化的特徴がある地域であるため村人の生活のなかでアンダイは先人から後代へ継承されてきた。

X 氏と Z 氏は幼いときの時の状況を以下のように語る。

X は坤地ガチャ（村）出身であり、坤地ガチャには伝統アンダイの伝承者、新アンダイの奠基者（創造者）ともいわれるアンダイチン哈斯哈達とアンダイの伝承・創新者である哈斯額尓敦などのような著名なアンダイチンは多くいた。X は小さい頃からアンダイ舞踊の動作、歌い方、アンダイ歌詞、曲などの特徴に興味をもち彼らから学んだと言及する。X は「父の話によると、私が小さいとき家の前に大きな楡木があった。風に当たることにより楡木の根が地面上に出て椅子のようになったという。夕方になると地域の人々はここに集まる。当時テレビ、ラジオ等がなかった。楡木に集まって歌を歌ったり、木を回って踊ったりしていた」と村の状況を語った。

また、Z は「1953 年に小学校に入った。養畜牧ガチャは民間芸術がとても振興した地域であった。私の小さい頃、村にはクラブ（文化室）があった。毎週土曜、日曜日にクラブには多くの人が集まり民間の歌を歌ったり、アンダイを踊ったりしていた。私はこれらをとても興味深く見ていた」。「1958 年の大躍進の時、私は小学校五年生となり、学校では学生による『芸術班』があって、その時私は初めてアンダイ踊りを学んだ。クロン旗は 1960 年に『アンダイ文化旗』と命名されたことで、同年 8 月に内モンゴル自治区文化工作会議はクロン旗で開催された。会議では 500 人のアンダイ舞踊を上演することが計画された。そのとき私はクロン第一中学校に通っていた。クロン第一中学校は 50 人のアンダイ芸術団

を結成し、500 人のアンダイ上演に参加することになった。私もその中の 1 人になった」。そして Z は「養畜牧ガチャに育てられたのでアンダイの伝承・創造者とも言われる額尔敦巴拉よりアンダイの動作を真剣に学んだ」という。Z は 1965 年に故郷に戻り教員となり、村の芸術団に参加し、正月や村のイベントで上演を行っていた。1970 年に 12 人によるアマチュア芸術団を結成し、モンゴル族の民間歌、好来宝、アンダイを中心に村で上演活動を行っていた。その活動を 2006 年まで続けたと言及する。

伝統アンダイは歌を中心に、舞踊動作が伴った民間芸術形式であった。そして歌詞が豊富であり、伝統アンダイの儀式では歌詞の多くの部分は歌い手と儀式に参加した人々は即興に創作したものである[20]。一方、新アンダイは伝統アンダイの動作を美化し、規範化したとしてとらえている。インタビューの中で表れているアンダイの伝承・創新者らは 1950 年代にこの新アンダイの創作に携わった人たちであり、ある意味では民族文化のモンゴルらしさを保持し、社会主義的内容を反映することによりアンダイを新しい形―踊りの部分を継承し、振興させたといえよう。X と Z は小さい頃からアンダイに興味を持ったため上述のような村のベテランアンダイチンからアンダイの歌や踊りを学んだのである。そして村のベテランアンダイチンの踊りを模倣し、何度も繰り返し練習する中、自分なりのアンダイの踊りができその後の活動を続けたのである。

（２）民間芸人の活動

アンダイの伝承人のインタビューを通じて、アンダイの伝承人の活動は主にアンダイ文化の創造活動による文化の継承とアンダイ芸術団の結成による民衆の文化生活の活発化という点にあることがわかった。

１）伝承人によるアンダイ文化の創造

アンダイチンは民衆に文化支援活動を積極的に展開している一方、アンダイチンによるアンダイの創造活動はアンダイ文化の継承にとって重要な側面であると考える。例えば文化伝承人である W はクロン旗で活動している地域住民により組織された「草の根芸術団体」の団長であり、現在本団体は６つの種類のアンダイを創作し上演していると説明した（W の履歴について以下２）で詳しく説明する）。つまり、①広場アンダイ（大衆的で動作が簡単である）、②原生態アンダイ（伝統アンダイの動作、曲を重んじる）、③激情アンダイ（昔の音楽に沿って、動作は多様である）、④アンダイ伝奇（アンダイの起源のついての紹介を趣旨としている）、⑤ 舞台アンダイ（現代社会や旗政府の活動を反映した内容が中心としている）、⑥アンダイ体操（動作が軽い、簡単である）である。これらの創作では基本的に

伝統アンダイの曲と動作を守っているという。このようにアンダイチンは伝統アンダイと呼ばれる過去の文化を受けとめ、伝統文化に基づいて新たな文化を創造しているのである。

２）民間芸術団体の創出

W は 1962 年 11 月にクロン旗に生まれた。幼いときから民間芸人の影響を受け、アンダイ舞踊を踊るのが好きであった。小学校の時に学校の文芸団体に参加し、高校卒業までは学校の文芸中心的存在になっていた。W は養畜牧ソムとクロン鎮の文化ステーション長を勤めたことがある。仕事の期間中にアマチュア文化芸術団体を結成し、自分たちでプログラムを創作し上演していた。これらの活動を通して伝統アンダイの特徴と基本動作を学んだという。たびたびアンダイの伝承人である吉木彦と額尔頓巴拉を訪問し、アンダイの曲と動作を学んでいた。2006 年に退職し、2006 年～2009 年まで主に健康のために広場でアンダイ（広場アンダイ）を踊っていた。(W 氏へのインタビューより)

W を中心に 2009 年５月 17 日に「草の根芸術団体」を結成した。最初は 7 人だったが、現在は 36 人となり、毎日午前９時から 11 時 30 分に街道事務室の一部屋を使い、アンダイ舞踊、その他のモンゴル舞踊の創作や踊りの練習を行っている。「草の根芸術団体」は「健康、快楽、調和、奉仕」という目的で、文化支援サービス活動を積極的に展開し、アンダイ文化芸術を伝承してきた。約 30 の文化芸術団体と連携し、クロン旗の６つの農村と９つの社区の草根ネットワークをつくっている[21]。旗政府より「草の根芸術団体」にアンダイ伝習所」という任務が与えられた。

W と一緒に活動している L は農業に従事しており、仕事の間に約 20 年間アンダイ舞踊を踊ってきたと言及する。L は地域の人々やクロン旗における民族学校の児童生徒にアンダイ舞踊を教えることを重視してきた。L の活動は評価され 2008 年に「無形文化遺産アンダイ代表性伝承人」になった。

クロン旗においては 2015 年までにクロン旗の 186 農村、９社区では 195 芸術団体が成立した。W と L のような民間のアンダイ伝承人はアンダイ文化を振興させるために地域住民にアンダイ踊りを教えている。また、こうした団体は日々の演芸学習活動のほかに、政府や社区が主催の公演イベントに参加し、共同出演を行い、相互の交流や連携を促している。近年では「草の根芸術団体」は地域での活動を超え、中央テレビ番組にも出演し、モンゴル族の伝統文化を紹介する一方、モンゴル共和国と韓国への上演を行っている。その活動はクロン旗の地方新聞などにも報じられている。

本研究で取り上げた X と Z も村の人々を招きアンダイ芸術団を組織し、地域の人々にア

ンダイ舞踊を教え村の文化生活を豊かにしている。このように文化伝承人はアンダイを踊ることに「楽しい、健康的」であると感じながら余暇活動の時間に村人や社区の住民を集め、自発的なアマチュア芸術団体を組織している。そして、その活動には子どもからお年寄りまで誰でも気軽に一緒に踊り、日々の悩み、緊張、疲労を解消し、参加者にとってリラックスした楽しい時間となっている。

３．新たな文化の推進（普及）の特徴

2000 年代に入ってアンダイ文化の推進は国家民族文化振興政策、内モンゴルの文化大地域づくりの取り組みのもとで行われ、特にアンダイの発祥地であるクロン地域に進められた。この新たな文化の推進の特徴は以下の３点に現われている。

第一に、政府、大学、民族学校、芸術団体の協力、連携関係がみられる。クロン旗のアンダイ文化推進取組みからみられるように、アンダイ文化の発信と経済交渉会を行うことを目的とした旗政府主催の「アンダイ文化芸術祭」の開催にあたって大学の研究者も携わっている経緯がみられる。特に旗政府は大学と共同でクロン旗の文化を著書としてまとめた『アンダイ文化研究集成』、『アンダイ之郷―クロン旗歴史文化概要』、『クロン歴史文化研究シリーズ』の出版を通じてクロン旗の歴史、文化を記録として残している。これらの成果は旗政府にとってアンダイ文化を発信する手段となるとともに地域の人々にとってクロン旗の歴史を知る媒介ともなると考える。また、地域の人々は誰でもアンダイを踊るようになり、地域の良好な雰囲気をつくり、民衆のアマチュア文化生活を豊かにするため、専門芸術団体であるウランムチを中心にアンダイ曲とアンダイ舞踊の動作を統一し、統一させたアンダイ舞踊はウランムチを通じて地域住民に広げていく活動が計画され行われた。

第二に、アンダイの伝承人によるアンダイ文化の普及が行われている。民間で活躍しているアンダイチンが政府によりアンダイ伝承人として認定されている。伝承人認定の目的は民衆の文化生活を活発させ、アンダイの文化を振興させるためであった。アンダイの伝承人は民衆にアンダイを普及していく役割を担っている。その役割として、①アンダイチンは村の人々や社区の人々を招きアンダイ芸術団を組織し、アンダイ舞踊を教え地域の文化生活を豊かにしている。②アンダイ文化を継承するために次世代にアンダイ舞踊を伝達し、次の伝承人の養成にも力点を置いている。③アンダイチンは民衆に対する文化支援活動を積極的に展開している一方、アンダイの創造活動を続け、アンダイ文化を継承している。アンダイチンによってこれまでにアンダイがアンダイ舞踊、劇、体操として新しく創作され民衆の間に広がっている。

第三に、自発的な民間芸術団体の創出によるアンダイ文化の普及がみられる。アンダイ文化の広がりにはアンダイの伝承人と専門芸術団体の役割だけではなく、自発的に結成されたアマチュア芸術団体がアンダイ文化の普及の新たな担い手になっている。地域ではアンダイを踊る人が増えている主な要因としては、「アンダイは美しいから、健康的であるから、楽しいから」と考える人が増えているからである。アマチュア芸術団体の結成は互いの交流を進め、民間芸能活動を行うことによりアンダイ文化を継承している。

第４節　地域住民のアンダイ文化に対する意識―アンケート調査分析―

第３節まではアンダイの変容のプロセスと旗政府によるアンダイ文化の推進と民間伝承人によるアンダイの継承活動をみてきた。本節では、クロン旗における地域住民は政府の取り組みとアンダイ文化についてどのように考えているのかについてアンケート調査を通じて明らかにしたい。

筆者は 2015 年 5 月 25 日～6 月 27 日にクロン鎮において「モンゴル文化に対する地域住民の意識についてアンケート調査」を行った。調査は 18 歳以上のクロン鎮に居住している地域住民を対象に、クロン鎮にある行政機関、医療機関、学校、地域の商店街に調査票を配布し、回収した。アンケート調査票の配布数 523、回収数 434（83%）、有効回答数 388（74%）であった。そのうち、漢族とその他（回族、満族）の民族 58（15%）人に調査協力を得て回答してもらった。したがって、調査対象は正確なサンプルではないが、調査結果はある程度現在の内モンゴル東部地域のモンゴル族の実態と民族文化の状況を示していると考える。アンケート調査は①回答者の基本状況、②地域や文化（地域伝統行事活動、アンダイの変化について）③民族意識という大きな三つの項目で設定した。

１．回答者の基本状況と民族意識

（１）回答者の基本状況

今回のアンケート回答者の民族属性の構成は、モンゴル族は 330 人（85%）、その他の民族 58 人（15%）であり、そのうち漢族は 48 人（12%）である。性別にみると男性は 157 人(40%)、女性は 231 人(60%)である。調査回答者の年齢層をみると、10 代が 98 人(25.3%)、20 代 102 人（26.3%）、30 代 86 人（22.2%）、40 代 41 人（10.6%）、50 代 36 人（9.3%）、60 代 15 人（3.9%）である。民族学校の高校３年生の生徒及び民族学校の教師に調査票を配布したため、10 代、20 代の年齢の回答者が多く、かつモンゴル族の割合も多いという傾

向がある。

（２）地域の人々（モンゴル族）の民族意識とその基盤にあるもの

筆者が実施した地域の人々へのアンケート調査では、モンゴル人を対象に「あなた自身はモンゴル族の 1 人であることを自覚していますか」(N=330) という問いに「自覚している」と答えた人は 90.9%を占め、「自覚していない」と「関心がない」と答えた人はそれぞれ 3.3%と 5.8%であった。その「モンゴル族であることを自覚していない」(「関心がない」を含め) 人の属性からみると、20 代と 30 代の人が多く、従事業は会社員と自営業と答えた人の割合が高かった。また、「家庭使用言語」の項目からみると、「漢語」と答えた人の割合が一番高かった。

一方、「あなたはモンゴル人であることで困ったことがありますか」(N=330) と質問したところ「困ったことがある」と答えた人は 60.9%、「困ったことがない」と答えた人は 39.1%であった。この数字からみると「困ったことがある」人は多くいることが分かる。さらに、「困ったことがある」と答えた人たちはどのような時に困ったかを明らかにするため、質問項目を設定したところ以下のような結果となった。つまり、「公共機関あるいは病院などでほとんど漢語を使用しているため、気軽に声をかけられない」(76.6%) は一番高く、次は「漢語で話すのが苦手で、日常生活のなかで漢族との交流が難しい」(37.3%) であった。

「モンゴル人であることで困ったことがある」と答えた人の割合が高いにもかかわらず「モンゴル族であることを自覚している」人が多いのである。これはなぜだろうか。ここで、「モンゴル人であることを自覚している」と答えた人たちに「モンゴル族であることを最も意識するのはどのような時ですか」(N=300) という問いに対し、「モンゴルの歌や踊りを聞いたり見たりするとき」は一番高く 30.3%でした（表３－４）。また、「あなたの身近にあるモンゴル文化は何ですか」と質問したところ、「モンゴル舞踊、歌」93%、「モンゴル語」

表3-4.モンゴル族であることを最も意識するのはどのような時ですか（N=300）

	モンゴル人であること最も強く意識するのはどのような時ですか	
モンゴルの歌や踊りを聞いたり、見たりするとき	91	30.3
モンゴル族の祭りや儀式に参加するとき	67	22.3
モンゴルの歴史や物語りを聞くとき	59	19.7
ほかの人にモンゴル人らしいと言われるとき	21	7
ほかの民族の人と接触するとき	47	15.7
そのた	15	5
合計	300	100

88.7%、「競馬」87.7%、「モンゴルレスリング」85.3%、「モンゴル族の歴史」82%、「伝統祭り」81.7%、「その他」８%という結果となった。

したがって、モンゴル文化に対するモンゴル人のアイデンティティはモンゴル舞踊、音楽、歴史などの文化に根ざしており、それがモンゴル人であることを自覚することにつながっているのではないだろうかと考えられる。一方、アンダイ文化について地域の人々はどのように考えているのか。

２．アンダイ文化に対する地域住民の意識

（１）アンダイの受容意識

既述のように、新中国成立後、1960 年代にクロン旗は内モンゴルの「文化旗」と命名されて、1996 年には国家文化局によってクロン旗は「中国アンダイ芸術の郷」と命名されている。

ところで、地域住民はアンダイ芸術の郷の命名をどのように評価しているのかをみたい。まず、クロン旗はアンダイ芸術の郷として命名されていることについて民族別と年齢別にみる（表３－５）と、全体的に「知っている」と答えた人は約 96%を占める。モンゴル族において、その他の民族においても「知っている」と答えた人が全体の９割を占めている。年齢別において、「知らない」と答えた人は主に 10 代～30 代に集中していることがわかる。

次に、アンダイ芸術の郷の命名により地域にどのような変化をあたえたのかをみたい。アンダイ芸術の郷の命名によるクロン旗の変化について地域住民はアンダイ芸術の郷の命名を肯定的に見ている傾向がある。アンダイ芸術の郷の命名は「表層的なスローガンだ」と「そう思わない（あまりそう思わないを含め」と答えた人は 61.1%を占めている。また、アンダイ芸術の郷の命名により「地域の活性化が進んでいる」と答えた人は約８割を占め、「アンダイ文化の普及を推進した」と思う人も約８割を占めている。上記のデータより、

表 3-5. アンダイ芸術の郷について（単位：人、（ ）は%）

		知っている	知らない	合計
民族別（N＝385）	モンゴル族	318(97.2)	9(2.8)	327(100)
	漢族	43(89.6)	5(10.4)	48(100)
	満族・回族	10(100)	0(0)	10(100)
合計		371(96.4)	14(3.6)	385(100)
年齢別（N＝376）	10代	94(95.9)	4(4.1)	98(100)
	20代	96(94.1)	6(5.9)	102(100)
	30代	80(95.2)	4(4.8))	84(100)
	40代	41(100)	0(0)	41(100)
	50代	36(100)	0(0)	36(100)
	60代	15(100)	0(0)	15(100)
合計		362(96.3)	14(3.7)	376(100)

アンダイ芸術の郷の命名をモンゴル族だけではなく他の民族も意識していることがわかる。

ここで、「アンダイ芸術の郷の命名は地域住民の人々の自慢になる」という項目に対して、表３－６に示した民族別にみると、モンゴル族以外の 52 人（漢族、その他）の回答者の中「自慢に思う（ややそう思うを含め)」と答えた人は約９割である。ここより、アンダイ芸術の郷の命名はモンゴル族だけではなくクロン旗に居住しているその他の民族も「自慢になる」と思っている傾向があると考える。特にアンダイ文化に関する自由記述では漢族の人々はアンダイ舞踊がクロン地域の特徴であり、クロン地域のシンボルであるという意識をもっていることがわかる（表３－７)。例えば、記述では「アンダイ文化の価値は高く、もっと広げるべきである。私たちクロンの人々の自慢である」(No. １)、「アンダイ舞踊は国家級無形文化財となった。私たちクロンの人々はアンダイ文化を継承し広げるべきである。アンダイ舞踊はクロン地域のシンボルであり、アンダイを通じて中国人はクロンを知る、内モンゴルを知るようになる」(No. ５)、「アンダイ文化はクロン地域の特有の文化であり、もっと振興させるべきである」(No. ６)と書いているように漢族にとってアンダイ文化は「クロン地域の文化」であるという認識が強い傾向にある。

一方、モンゴル族のアンダイに関する自由記述では多かったのは「アンダイはモンゴル文化の重要な一つである」、または「アンダイ文化はクロン旗のモンゴル族の誇りになる」であり、モンゴル族の回答者はアンダイ文化が「モンゴル族の文化」であることを強調している傾向にある。しかし、自由記述の内容よりモンゴル族、漢族とも「アンダイ文化を

表3-6. 民族 と アンダイ文化の郷の命名は地域の人々の自慢になると思う のクロス表

		自慢になる					合計
		そう思う	ややそう思う	どちらともいえ	あまりそう思わない	そう思わない	
民族	モンゴル族	282 (90)	26 (8.3)	2 (0.6)	4 (1.3)	1 (0.3)	315 (100)
	漢族	37 (88.1)	2 (4.8)	3 (7.1)	0 (0)	0 (0)	42 (100)
	満族・回族	9 (90)	1 (10)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (100)

表3－7. アンダイ文化についての自由記述（漢族）

番号	職業	年齢	内容
1	公務員	55	アンダイ文化の価値は高くもっと広げるべきである。私たちクロンの人々の自慢である。
2	公務員	40	アンダイ舞踊を見たことがあるがあまり深く知らない。
3	看護師	32	アンダイは民族文化の一つである。アンダイ文化の発祥地として、一人ひとりはアンダイ文化に誇りをもち、もっと広げるべきるである。
4	自営業	33	アンダイ文化を保護すべきである
5	医師	28	アンダイ舞踊は国家無形文化財となった。私たちクロンの人々はアンダイ文化を継承し広げるべきである。アンダイ舞踊はクロン地域のシンボルであり、アンダイを通じて中国人はクロンを知る、内モンゴルを知るようになる。
6	医師	31	アンダイ文化はクロン地域の特有の文化であり、もっと振興させるべきである。
7	公務員	27	アンダイ文化の宣伝に力を入れ、民族地域に居住している小中学生に小さいごろからアンダイ舞踊を教え、継承していくべきである。
8	教師	32	クロン地域以外の人々にもアンダイ文化を広く紹介し、故郷の風俗、文化を継承すべきである。
9	教師	35	アンダイはモンゴル文化のシンボルである。また、クロン地域の特色である。もっと保護、振興すべきである。

保護し、継承すべき」という共通の認識をもっている傾向もあった。

（２）アンダイ文化の変化について

新アンダイは伝統アンダイからさまざまな形に変化している。地域住民はアンダイの変化をどのように理解し、評価しているのか。以下は、アンダイの変化に対する地域住民の答えである。表３－８にアンダイの変化を知っているかどうかについて民族別にまとめた。全体的に見ると、アンダイの変化を「知っている」と答えた人は 49.4%であり、「知らない」と答えた人は 50.6%を占めている。約５割の人はアンダイの変化を知らないことがわかった。漢族の中にはアンダイの変化を知らないと答えた人の割合が高い傾向にある。

表3-8. 民族 と アンダイの変化 のクロス表

		アンダイの変化ついて		合計
		知っている	知らない	
民族	モンゴル族	173 (52.4)	157 (47.6)	330 (100)
	漢族	12 (25.5)	35 (74.5)	47 (100)
	満族・回族	6 (60)	4 (40)	10 (100)
合計		191 (49.4)	196 (50.6)	387 (100)

表３－９では、アンダイの変化を知っていると答えた人(N=191)がアンダイの変化をどのように考えているかをまとめた。アンダイの変化により、「アンダイ舞踊が美しくなっている」と思う人は 85.3%であり、「現在のアンダイ体操をアンダイ文化として見ています」と思う人は 84.3%である。「アンダイは時代の変化に適合し創られています。アンダイの変化を肯定的に見ている」と思う人は約 76.4%を占め、「アンダイのさまざまな変化では伝統アンダイの本質部分が失われていると思います。アンダイの変化を否定的に見ます」と答えた人は 47.6%を占めている。全体的に見ると地域の人々は現代のアンダイの変化は美しくなっている、アンダイの変化を肯定的に見ていると読み取れる。

しかし、回答者のなかで、「アンダイの変化を肯定的に見る」人は 76.4%を占めているが、一方「アンダイの変化を否定的に見る」人も 47.6%であった。つまり、「アンダイの変化」に肯定的な面を見る一方、「アンダイの変化」を否定的に見るという、両義的な受け止め方

表3-9. アンダイの変化について

	そう思う	そう思わない	わからない	合計
アンダイは昔のシャマニズム文化から現在の芸術のアンダイに変化し、アンダイ舞踊は美しくなっていると思います。	163(85.3)	9(4.7)	19(9.9)	191(100)
現在のアンダイ体操をアンダイ文化として見ています	161(84.3)	23(12.0)	7(3.7)	191(100)
アンダイは時代の変化に適合し創られています。アンダイの変化を肯定的に見ています	146(76.4)	33(17.3)	12(6.3)	191(100)
アンダイのさまざまな変化では伝統アンダイの本質部分が失われていると思います。アンダイの変化を否定的に見ています	91(47.6)	78(40.8)	22(11.5)	191(100)

をしている人がいることがわかる。このような回答が見られたことについて、筆者は、アンダイは時代の変化に適合し創られていることを肯定的に見るとともにアンダイの変化のなかで本質部分が失われることを懸念している意識もあるのではないかと考える。

以上、新たに創られたアンダイに対して地域住民はどのように考えているかをアンケート調査より明らかにした。地方政府の取り組みとアンダイ文化に対する地域住民の考えを以下のようにまとめた。

①新アンダイの普及に対する地域の人々の評価である。今回の調査結果は内モンゴル全体におけるアンダイ文化の普及の実態を捉えた訳ではないが、クロン旗の事例より新アンダイはクロン旗に定着しつつあると考える。先行研究ではアンダイはクロン旗から発祥し、アンダイの起源及び変化に対して民俗学、社会学、医学の視点から行われてきたが、新アンダイの普及に対する実証的な研究はまだなされていない。したがって、本調査より明らかにしたことは、地域の人々は「アンダイ芸術の郷」の命名による地域の変化を高く評価し、アンダイの変化を肯定的に見ている傾向があると考える。

②新アンダイの広がりである。クロン旗において、新アンダイの広がりはモンゴル族だけではなく他の民族にも受け入れられつつある傾向がみられる。アンダイ文化はモンゴル文化であるが、アンダイ芸術の郷の命名は地域住民の人々の自慢になると思う漢族の人々もいる。また、自由記述（表３－７）では「（省略）アンダイはクロン地域のシンボルだ。アンダイを通じて中国人はクロンを知る、内モンゴルを知るようになる」（漢族）というように、漢族もアンダイ文化を受け入れクロン地域の文化としてとらえる傾向がみられる。

③アンダイの変化をどのようにとらえるか。アンダイの変化に関しては「知らない」と答えた人は 50.6％で、高い割合を占めている。本研究では新アンダイの創造の経緯を第１節で明らかになった。1950 年代にアンダイチンは政治的背景のもとで中国社会に適用させるため試行錯誤しながら新たな舞台アンダイを創作した。80 年代に入りアンダイチンの自由な発想に基づき多様なアンダイが創作されている。しかし、多くのモンゴル人にとってアンダイの変化の過程と変容された伝統アンダイが持っていた意味について十分に伝わっていない現状も指摘できる。したがって、民族文化の担い手は文化の継承を行うときに「民族文化とは何か」、「民族文化の何を継承するか」を主体的に考え、真の文化継承活動が求められると考える。

[1] 耿学剛・譚宏宇「モンゴル族アンダイの美学特徴に関する考察」『アンダイ文化研究論集』内モンゴル人民出版社、2009 年、p. 378。
[2] 白翠英「ホルチンモンゴル劇の発生と発展」『黒龍江民族文化叢書』1997 年、第 1 期、p. 90。
[3] 煎本孝「モンゴル・シャマニズムの文化人類学的分析―内モンゴル，ホルチン・ボのシャマニズムにおける歴史意識と宇宙論的秩序」『東北アジア諸民族の文化動態』北海道大学図書刊行会、2002 年、p. 420。
[4] 同上。
[5] 烏日古木勒「アンダイ伝説と治療儀式」『アンダイ文化研究論集』前掲書、p. 177。
[6] 白翠英「文化変遷の中のアンダイ車」『アンダイ文化研究論集』前掲書、p. 283。
[7] 同上。
[8] サルラ『アンダイ文化に関する論述』内モンゴル文化出版社、2009 年、p. 259.
[9] 栗原悟「社会変動の中の少数民族―少数民族に見る伝統と近代」野村浩一ほか『岩波講座現代中国第 3 巻　静かな社会変動』岩波書店、1989 年、p. 299。
[10] モンゴル語でアンダイを歌ったり、踊ったりする人をアンダイチンという。
[11] 僧格扎布（口述）奇克其（記録）「クロン旗アンダイの発掘と記録について」『アンダイ文化研究論集』前掲書、pp. 439-442。
[12] 白翠英・刑源等『アンダイの起源とその発展』1983 年、p. 52。
[13] 同上、p. 74。
[14] 喬鹿「『安代伝奇』にみるホルチンモンゴル劇の創作に関する考察」『アンダイ文化研究論集』前掲書、p. 434。
[15] 白翠英「ホルチンモンゴル劇の発生と発展」『黒龍江民族文化叢書』1997 年 p. 90。
[16] 通遼日報（2009 年 8 月 6 日）
[17] 巴・蘇和主編『アンダイ之郷―クロン旗歴史文化概要』内モンゴル文化出版社、2010 年 12 月。
[18] サルラ主編『クロンアンダイ史論』内モンゴル文化出版社、2012 年。
[19] アンダイ文化を各機関、企業、学校、兵営、社区、農村に浸透させることを指す。
[20] 白翠英・刑源等『アンダイの起源とその発展』1983 年、p. 38。
[21] 草の根芸術団体の団長へのインタビューより（2015 年 6 月 10）。

第四章　民族学校にアンダイ体操の導入
—クロン旗の民族学校におけるアンケート調査分析—

本章では新アンダイとして創作されたアンダイ体操を事例に、民族学校で実施されることの意義を検討し、学校教育を通じてモンゴル族の子どもたちが新たに創作されたアンダイ体操をどのように意識しているのかについて、児童・生徒へのアンケート調査をもとに分析する。これにより民族学校における民族文化継承の実態の一端を明らかにする。調査をアンダイ文化の発祥の地であるクロン旗の民族学校で実施した。

第１節 民族学校における文化継承の状況

中国の学校教育のカリキュラムは「教育計画」と「教育大綱」と「教科書（教材）」から構成されている[1]。内モンゴルの民族学校のカリキュラムは漢民族学校をモデルとしている[2]。2001 年に教育部は「基礎教育課程改革綱要（試行）」（以下、「綱要」）を発布し、カリキュラム改革の具体的な方針を示した。「綱要」では、「過度に集中した課程管理の現状を改め、国家・地方・学級という三級の管理体制を実施し、それぞれの地方や学校、児童・生徒に対する教育課程の柔軟性を高める」ことが示された。この改革を受け、地方でも教科書が作成できるようになったことにあわせて、教材編集者や学校、教師が柔軟に対応できるような配慮が随所になされている[3]。しかし、内モンゴルの民族学校のカリキュラムは漢民族学校をモデルとし、民族的特色を有する道徳・歴史の教科書ですら、漢民族文化の中で書かれたものをモンゴル語に訳したにすぎない[4]との批判がある。ハスゲレルは 2003 年に内モンゴルのモンゴル民族小中学校で使用されていたモンゴル語教科書と小学校の社会と初級中学の歴史教科書を分析し、教育の在り方を検討した。教科書の分析を通じて、小学校及び初級中学のモンゴル語教科書において、モンゴル民族の伝統文化に関する説明が不十分で、内容も浅薄であると指摘している[5]。また、初級中学における『中国歴史』教科書は漢語で書かれたものをモンゴル語に訳し、その中でモンゴル民族に関わる部分は多民族国家中国の統一のために貢献した人物や物事しか取りあげられていないと指摘している[6]。例えば、「元朝期」の項目では、チンギス・ハン、フビライが多民族国家の統一と発展に最も貢献した人物として取り上げられている[7]。

歴史教育の面では、初級中学における『中国歴史』教科書のほかに民族史としての『モンゴル民族の歴史』教科書がある。「中学歴史教育大綱」（1992 版）では「中国歴史を教える際には、各省、自治区、直轄市は当該地域の民族史教材を編纂し教えることができる。

教授時間は五四制と六三制学校[8]は約 10 時間」であると定められていた。この規定を受け内モンゴルでは 1998 年に『モンゴル民族の歴史』が出版された[9]。しかし、高級中学進学試験には入っていないため民族学校では『モンゴル民族の歴史』の授業が開設されなかった。2001 年の「綱要」の発布により、内モンゴルの民族学校ではモンゴル歴史文化の授業の開設の重要性があらためて指摘された[10]。しかし、実態として、内モンゴルの赤峰市の民族学校（初級中学）でしか『モンゴル民族の歴史』は教えられていないのである[11]（2014 年時点）。2008 年に赤峰市の教育研究センターの１名の教員は『モンゴル民族の歴史』を赤峰市の統一試験に入れるよう提案した[12]。この提案を受けて赤峰市の高級中学進学試験の歴史科目の点数は 120 点になった。歴史科目 120 点の中には漢民族学校の試験を翻訳したのは 100 点で、『モンゴル民族の歴史』は 20 点であった[13]。そのほかの地域では、『モンゴル民族の歴史』は高級中学進学の試験対象になっていないため、授業として開設されておらず補足教材として生徒に配布している。以上からわかるように、民族学校において民族史としての『モンゴル民族の歴史』が児童生徒に教えられていないという課題がある。

一方、民族学校におけるモンゴル語教育はモンゴル民族学校の唯一モンゴル民族の歴史文化を学び、自民族に対する認識を高める教育である[14]。モンゴル語教科書の記述内容から見ると、小学校の教科書のモンゴル民族に関する記述が初級中学の教科書の内容より多い傾向がある。モンゴル民族の伝統文化を小学校及び初級中学のモンゴル語の教科書に取り入れることは、児童生徒が自民族の伝統文化を理解するには大変役に立つ側面がある[15]。内容をみるとふるさとへの思いに関する記述は多数を占めている[16]。例えば、小学校１年のモンゴル語教科書に「私はモンゴル人」という詩がある。授業の目標として「１．詩を感情を込めて流暢に朗読できる。２．新しいモンゴル語文を正しく書くことを教えるとともにその意味を理解させる。３．授業を通じて子どもにモンゴル民族への誇りを感じさせ学ぶ意欲を向上させる」としている[17]。表４－１は「私はモンゴル人」（詩）の翻訳である。この詩ではふるさとへの思い、愛着があらわれ、子どもにモンゴル人としての誇りを感じさせるのである。表４－１は詩の１節と２節であるが、この続きでは「この人こそモンゴル人、ふるさとを愛する人よ」という言葉がある。子どもは小学校一年生より「私はモンゴル人」を暗記し覚える。授業を通じて子どもたちに小さいときからモンゴル人であることを意識させる教育が行われている。

表4－1.私はモンゴル人

アリガリの煙立ちのぼる	生まれ落ちたこの大地を
牧民の家に生まれた私	自分の身体のように愛しく思い
故郷の草原を	産湯にした清らかな川を
揺りかごだと思う	母の乳のように懐かしく思う

出所：義務教育教科書『語文』内モンゴル教育出版社、2014年、pp.43－44より。（※アルガリは牛の糞を乾燥させた燃料です）

一方、近年の民族学校における文化継承の新たな取り組みとしてモンゴル族の伝統文化教育について、個別の学校では学校カリキュラムとして編成され、課外活動の時間に教えている事例がある。例えば、通遼市のジャルト旗魯北モンゴル族実験小学校では「民族の伝統を継承し、現代化と融合し、特色を際立たせる」という理念を持つ、2007 年に民族文化特色教育として、「創建民族文化特色品牌学校」（民族文化特色的ブランド学校）というスローガンが掲げられ、「民族特色クラス」を開設した[18]。同学校では「民歌クラス」、「馬頭琴クラス」、「版画クラス」「モンゴル舞踊クラス」、「モンゴル族将棋クラス」、「モンゴル搏克クラス」（モンゴル相撲）などを設置し、モンゴル族の芸能文化を教えている。「民族特色クラス」は授業の第８時間帯（16：45～17：30）の課外活動の時間に行われている。これは民族小学校において民族文化を保護するため、子どもにモンゴル族の伝統文化を体験させ、伝統文化を学ばせるという目的で開設された。しかし、こうした「民族特色クラス」の開設は条件が整った学校に限定され、すべての民族学校で開設されているのではない。また、授業に使用する道具（馬頭琴、モンゴル将棋など）を購入する資金が必要とされるため、通遼市ではジャルト旗魯北モンゴル族実験小学校以外では、財政面、資金面では足りないため民族特色クラスを開設していない状況があった。

民族学校における民族文化は主にモンゴル語教育を通じて教えられているといえよう。以上より内モンゴルにおける民族学校のカリキュラムは漢民族学校をモデルとしているため、学校教育の中で、自民族の伝統文化を教えることが困難であったことが分かる。一方、2000 年以降の民族特色教育は子どもにモンゴル族の芸能文化を教えることを通じて、伝統文化を継承させるとしているが、ほとんどの民族学校には普及されていないという状況があった。

以下では民族学校の新しい取り組みとして、通遼市のクロン旗の民族学校の事例を取り上げ、モンゴル族小中学校ではラジオ体操の時間にアンダイ体操を行っている状況を検討する。このことは子どもに民族文化を学ぶ機会を提供することであり、モンゴル文化を意識する機会となっていると考えられるからである。

第２節 アンダイ体操を学校教育に導入する過程

1995 年 6 月に国務院は「全民健身企画綱要」を発布した。本綱要の 2010 年までの目標は体育と国民経済、社会事業の協調的な発展の実現に努め、中華民族の体質と健康レベルを全面的に向上させるとした。そのなかの重点的な活動の一つとして、少数民族体育を積極

的に振興し、民族地域では少数民族伝統体育項目を主とした体育健身活動を広く展開することであった。また、各級少数民族体育協会を成立し、少数民族体育人材を養成するとした。その一方、中国は 2003 年から「中国民族民間文化保護プロジェクト」を稼働させ、2004 年にユネスコの採択した「無形文化遺産保護条約」に正式に加盟し、民族民間文化の調査、整理、記録などを行ってきた。2005 年 12 月に国務院は「文化遺産保護強化に関する通達」（国発［2005］42 号）を公布し、モンゴル族のアンダイ舞踊が無形文化財に指定された。

「全民健身企画綱要」の発布とアンダイ舞踊の無形文化財に指定されことにより、内モンゴルは民族体育を通した全民健身運動の発展を率先した。こうした流れの中で内モンゴル通遼市は民衆体育の展開活動にあたってアンダイ舞踊の民族特色を生かし、その建身（フィットネス）精髄を発掘するため内モンゴル民族大学体育学院のフィットネスの専門家と民族音楽専門家を招き、鮮明な民族特色と時代の息吹みなぎるアンダイ健身舞を創作した[19]。アンダイ健身舞は会場、時間、人数の制限がないという特徴があるためアンダイ健身舞は通遼市に広く普及した。通遼市体育局局長の紹介によると、通遼市ではアンダイ健身舞のアマチュア指導員約 150 名であり、130 万人がアンダイ健身活動に参加したと報じられている。また通遼市ではアンダイ健身舞を普及するためアンダイの健身舞大会（コンクール）を行ったりしている。2008 年にアンダイ健身舞を学校に取り入れるためアンダイ体操を創作した。張は安代体操の創作について以下のように論じている[20]。

・アンダイ健身体操の創作要求：民族特色と時代の息吹を表現する。アンダイ体操の創作にあたって伝統アンダイ舞踊の原始動作を参考して伝統的要素と現代的要素を有機的に結合する。その動作に舞の趣と体操の動感を賦与させる。

・アンダイ健身体操の創作原則：身体の全面的な発展は体を鍛えることの趣旨である。したがって、アンダイ体操の創作にはできるだけ体全体を動かし、身体の各部分の筋肉、関節、靭帯、内臓器官を全面的に鍛える。その動作は首、上肢、下肢、胴体の各部位の動作が含まれて、この身体の各部位を動かすという前提のもとにさまざまな動作を選べる。たとえば、曲げる、伸ばす、挙げる、振る、回る、歩く、走る、ジャンプ、蹴る、回転などの動作は体を均衡的かつ全面的に発展させることができる。

・健身、娯楽的原則：アンダイ体操の目的は健身、娯楽にある。したがって創作過程では、目的的に、選択的に、伝統アンダイ舞踊、健身操（エアロビクス体操）と現代体育の基本動作、優美な動作を利用し、この上腕、下肢の動作を増加する。

伝統アンダイの儀式では会場を回り踊ることにより、患者の体を発汗させ、体をリラックスさせる効果がある。アンダイ体操はアンダイの機能的効果に基づき、伝統アンダイ舞

踊を参照しながら現代的要素を入れ、動作に舞の趣と体操の動感を賦与させた。アンダイ体操の普及は現代の人々にフィットネスの健身効果と娯楽としての価値をあたえている。2008 年に内モンゴル通遼市の文化局、教育局、体育局、宣伝部は、民族文化を青少年に教育・普及する目的をもって、学校の授業としてアンダイの練習時間を組み込むという通知を出した。同年に通遼市体育と教育局が共同でアンダイ体操の養成クラスを設置し、アンダイ体操を通遼市の小中学校へ普及する準備に入った[21]。現在、通遼市のいくつかのモンゴル族小中学校では、ラジオ体操の時間にアンダイ体操を行っている。

第３節 児童・生徒のアンダイ文化に対する認識―アンケート調査分析―

本節では民族学校でアンダイ体操を実施されることにより、モンゴル族の子どもたちは新たに創作されたアンダイ体操をどのように認識しているかをアンケート調査より明らかにしたい。

クロン旗は９つの郷・鎮から構成されており、人口 17.4 万人のうちモンゴル族人口 10.5 万人（59%）、漢族は 6.7 万人（38%）を占めている。内モンゴルの各地域において民族学校の統廃合が行われ、小中学校は郷・鎮に集中している。したがって、周辺の農村部から郷・鎮の学校に通う寄宿生が多い。今回はクロン旗政府の所在地であるクロン鎮の民族学校の児童生徒にアンケート調査を実施した。クロン鎮に２つの民族小学校（クロン旗モンゴル小学校、クロン旗実験小学校）、１民族中学校（クロン旗第四中学校）、１民族高校（クロン旗第一高級中学校）がある。今回はアンダイ体操を行っている学校で調査許可を得られた２つの民族学校の小学校６年生と中学校１、２年生を対象に調査票を配布し、回収した（配布数 258、回収数 256）[22]。調査対象となった２つの学校とも 2006 年よりラジオ体操の時間にアンダイ体操を行っている。アンケート調査は①回答者の基本状況、②学校生活について、③回答者の趣味について、④地域や文化について⑤アンダイ体操について、⑥民族意識という項目で設定した。回答者の基本状況は以下の通りである。

１．回答者の基本状況

回答者は全員モンゴル族である。表４－２は回答者の学年と性別を示している。生徒の約７割以上は農村出身者である。したがって、表４－３からも分かるように両親の約

表4－2. 回答者の学年と性別（単位：人、（ ）は%）

学年	男性	女性	合計
小・6	40(51.9)	37(48.1)	77(100)
中・1	48(49.5)	49(50.5)	97(100)
中・2	35(42.7)	47(57.3)	82(100)
合計	123(48)	133(52)	256(100)

７割は農業に従事している。農業従事者が多くなっているのは先述のように内モンゴルでは小中学校は郷・鎮に集中しているため、周辺の農村部から通学してくる生徒が多いからである。そして家庭内において、約６割以上の家庭ではモンゴル語で会話しており、３割の家庭では漢語とモンゴル語を使用している（表４－４）。３割の家庭では漢語とモンゴル語を使用している状況の要因として、日々の生活の中で漢族との触れ合いがあり、日常生活のなかで漢語の使用度が高いため漢語とモンゴル語両方使用していると考えられる。また、生徒は実際の生活のなかでも漢文化を積極的に受け入れている傾向がある。例えば、今回の調査では子どもたちの個人の趣味について質問したところ、「漢族の現代流行歌」などが好きである傾向がみられる。子どもの趣味への質問では「音楽を聞く」は一番高く 65.6%であり、次に「テレビを見る」は 64.8%であった。この二つの項目を詳細に見てみると、子どもたちにとって「最も好きな音楽」（N=165 ）の比率は以下の通りである。「現代流行歌（漢族)」55.3%、現代流行歌（モンゴル族)」14.3%、「ミュージック」11.3%、「伝統モンゴル族の歌」7.1%、「ヒープホップ」5.4%、「クラシック」4.2%、「その他」2.4%の回答であった。また、「最も関心を持っているテレビ番組」(N=166) についても「中国語放送の映画、ドラマ」は最も高く 42.8%であり、次に「モンゴル語放送の音楽番組」18.7%、「中国語放送のアニメ」16.9%であった。この結果より、子どもたちは実際の生活のなかで漢文化を積極的に受け入れていることがわかる。このように日常生活のなかで漢文化の影響を強く受ける中モンゴル族の児童生徒はモンゴル文化をどのように認識しているのかを明らかにするため以下アンダイ体操に着目して検討したい。

表4－3. 両親の従事業

	父親	母親
農民	186(72.7)	186(72.7)
個人経営	22(8.6)	26(10.2)
会社員	13(5.1)	3(1.2)
行政職員	9(3.6)	6(2.4)
医者	4(1.6)	5(2)
教師	6(2.3)	14(5.5)
その他	4(1.6)	3(1.2)
無職	1(0.4)	5(2)
無回答	11(4.3)	8(3.1)
合計	256(100)	256(100)

表4－4. 家庭内使用言語

	人数	割合(%)
漢語	5	2
モンゴル語	167	65.2
漢語とモンゴル語	83	32.4
無回答	1	0.4
合計	256	100

２．児童生徒のアンダイ体操に対する認識

まず、児童生徒に「クロン旗は『アンダイ文化の郷』であるといわれていることをご存知ですか」という質問に、９割の児童生徒はクロン旗がアンダイ芸術の郷であることを知っていると答えている。児童生徒はアンダイ芸術の郷のことを知ったきっかけは家族や学校の先生、テレビ・ラジオの放送、祭りへの参加を通じてであった（表４－５）。つまり、

日常生活のなかでクロン旗はアンダイ文化の地域であるということが知られていると思う。

次に、児童生徒に「アンダイ体操とラジオ体操のどちらかが好きですか」と質問したところ、「アンダイ体操が好き」と答えた児童生徒は65.6%を占め、「ラジオ体操が好き」と答えたのは16.4%、「どちらともいえない」と答えたのは 18%である。ここでそれぞれの理由を表４－６と表４－７に示す。児童生徒のなかでアンダイ体操が好きな理由（複数回答）としては「アンダイ体操はモンゴル族の文化であるから」と答えた児童生徒は約９割を占めている。または、生徒に「アンダイ体操をこれからも学校で教えてほしいですか」（N＝256）という質問に対して「これからも教えてほしい」と答えたのは約５を占めている。その理由を自由記述（表４－８）から見ると、「アンダイはモンゴル族の文化であるから」、「モンゴル文化を継承してほしい」、「クロンはアンダイ芸術の郷である」という記述が多かった。この結果よりクロン旗の民族学校において多くの児童生徒にとってアンダイ体操はモンゴル文化のシンボルになっていると捉えられているのではないだろうか。このことから、新アンダイは子どもたちにアンダイ文化として受容され、定着していると考えられる。

表4－5. アンダイ芸術の郷を知ったきっかけ（複数回答）

	人数	割合（%）
家族に教えてもらった	99	38.7
学校の先生に教えてもらった	72	28.1
テレビ・ラジオ放送で分かった	81	31.6
祭りに参加してわかった	37	14.5
その他	4	1.6
無回答	1	0.4

表4-6. アンダイ体操が好きな理由（N=168）

理由	人数	割合（%）
アンダイ体操の動作が美しいから	17	10.1
アンダイ体操は体に良いから	19	11.3
アンダイ体操はモンゴル族の文化であるから	146	86.9
その他	1	0.6

表4-7. ラジオ体操が好きな理由（N=42）

理由	人数	割合（%）
ラジオ体操が全国的に行われているから	22	52.4
ラジオ体操は体に良いから	15	35.7
ラジオ体操はアンダイ体操より動作が簡単であるから	5	11.9

一方、アンダイ体操を学校で教えてほしくない理由として３名の生徒はそれぞれ「学校の勉強が忙しい」（中２）、「時間がない」（中１）、「アンダイ体操が好きではない」（小６）と回答した。

しかし、既述のように民族学校において歴史教育を含め、アンダイ文化についてアンダイ体操だけを教えることにとどまっており、教科書の中に編纂されているわけではないのである。つまり、アンダイの変容、アンダイの歌、曲、踊りなどが教えられていないのである。この点について、先行研究ではその要因を以下のように指摘した。①民族学校の教員はアンダイ体操を授業として開設する必要性に認識が低いということである。多くの教

4-8. アンダイ体操をこれからも学校で教えてほしい理由

学年	性別	理由
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	好きであるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	男	モンゴル族の文化を継承してほしい
小6	男	モンゴル族の文化を継承してほしい
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイ体操が好きであるから
小6	男	クロンはアンダイ芸術の郷であるから
小6	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	男	クロンはアンダイ芸術の郷であるから
小6	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	男	クロンはアンダイ芸術の郷である
小6	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	男	アンダイはモンゴル族文化のシンボルであるから
小6	男	モンゴル族の文化であるから
小6	男	アンダイはモンゴル族であるため
小6	男	クロンはアンダイ芸術の郷であるから
小6	女	クロンはアンダイ芸術の郷であるから
小6	男	モンゴル族の文化を継承してほしい
小6	女	モンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
小6	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中1	女	アンダイ体操を継承することができるから
中1	女	アンダイは体に良いから
中1	女	モンゴル族の文化を発展させることができるから
中1	男	モンゴル族の文化を継承すべきから
中1	女	アンダイ体操が好きであるから
中1	女	クロンはアンダイ芸術の郷である。
中1	女	アンダイはクロンの文化である
中1	男	アンダイ体操は体に良いから
中1	女	モンゴル族の文化を継承するため
中1	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化を継承してほしい
中1	女	クロンはアンダイ芸術の郷である
中1	女	モンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化であるから
中1	男	モンゴル族の文化を継承してほしい
中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	男	モンゴル族の文化であるから

中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化が消失してほしくない
中1	女	アンダイが好きであるから
中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化であるから
中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化を継承してほしい
中1	男	モンゴル族の文化を継承してほしい
中1	女	モンゴル族の文化を継承してほしい
中1	男	動作が簡単であるから
中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	男	体に良いから
中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	女	クロンはアンダイ芸術の郷である
中1	男	好きであるから
中1	男	モンゴル族の文化であるから
中1	女	モンゴル族の文化であるから
中2	女	アンダイ体操はモンゴル族の文化であるから
中2	女	アンダイ体操はモンゴル族の文化であるから
中2	男	アンダイ舞踊はクロン人より継承されているから
中2	女	私たちは自分の文化を継承すべき
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	男	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	女	モンゴル族の文化を発展させるから
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	女	モンゴル文化のために
中2	女	クロンはアンダイ芸術の郷である。
中2	女	アンダイ体操が好きであるから
中2	女	クロンはアンダイ芸術の郷である
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから。アンダイは美しいから
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	女	モンゴル族の文化を継承してほしい
中2	女	モンゴル族の文化を継承してほしい
中2	女	モンゴル族の文化を継承してほしい
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	女	クロンはアンダイの芸術郷であるから
中2	女	アンダイはモンゴル族の文化であるから
中2	女	モンゴル族の文化を継承してほしい
中2	女	アンダイ体操の動作が美しいから
中2	女	文化のシンボルであるから
中2	女	モンゴル族の文化であるから
中2	男	体に良いから
中2	女	モンゴル族の文化であるから
中2	女	クロンの代表的な文化であるから
中2	男	好きであるから
中2	女	体に良いから
中2	女	体に良いから
中2	女	体に良いから
中2	女	モンゴル族の文化であるから
中2	女	モンゴル族の文化を継承してほしい

員は児童・生徒の期末テストと進学受験を重視している。②学校は財政、資金面で乏しいことである。③アンダイ体操についての理解が不十分である。一部の教員はアンダイ体操の変容した過程、アンダイの歴史的理解が不十分であるといえる。④アンダイ体操の授業の開設に専門的な指導が乏しい。⑤教員の相互の交流が少ないことが指摘されている[23]。この指摘より民族学校の教員は受動的な立場に置かれている状況があり、児童・生徒にアンダイの変容などについて詳細に教えていない現状がある。

一方、今回のアンケート調査データからみると、多くの児童生徒は「アンダイ体操が好きである」、「アンダイ体操はモンゴル族の文化である」と回答している傾向がある。以下では、筆者は児童生徒がこのような考えを持つことのその根底にあるものが何かということを検討したい。

３．民族意識の基盤にあるもの

（１）児童生徒にとってのモンゴル文化

民族学校に通っている児童生徒は現在のモンゴル文化をどのように考えているのだろうか。児童生徒は「あなたの身近にあるモンゴル文化は何ですか」（表４-９）という問いに、回答で一番多かったのが「モンゴル族の歴史」64.1%であった。このような回答が多かったのは、第１節で述べたように、モンゴル族の歴史として、チンギス・ハンの時代、13 世紀の歴史が紹介され、チンギス・ハンがモンゴル族の精神的な誇り、民族意識のシンボルとなっているため「モンゴル族の歴史」を選択する児童生徒が一番多かったと推察される。

表4-9日. あなたの身近にあるモンゴル文化は何ですか（複数回答）

	実数（人）	割合（%）
言語	115	44.9
モンゴル族の歌、踊り	123	48
祭り	105	41
レスリング	93	36.3
乗馬	101	39.5
モンゴル族の歴史	164	64.1
その他	3	1.2
無回答	1	0.4

また、児童生徒のモンゴル文化についての自由な記述を表４－10 にまとめた。この結果より児童生徒にとってのモンゴル文化は下記のようなモンゴルらしさ（イメージ）が児童生徒に受け入れていることが分かる。つまり、「モンゴル服飾、モンゴル舞踊、歌、馬、モンゴル語、アンダイ、祭り、競馬、モンゴル相撲、アーチェリー、ふるさと、歴史、自然、遊牧生活、習慣」であった。生徒は民族文化に誇りをもつ一方、現在のモンゴル文化の消失を実感し、継承していくことの大切さを述べている。（「私にとってモンゴル文化はモンゴル語とモンゴル歴史であり、モンゴル族の特有なものである。しかし、これらを忘れ行くものが多く継承していくべきである」（No.1）、「私はモンゴル族の一人になったことを誇

りに感じる。これからもモンゴル文化を丁寧に学び、モンゴルのための力になりたい」(No.35))

表4-10.モンゴル文化について自由記述

番号	学年	内容
1	小6	私にとってモンゴル文化はモンゴル語とモンゴル歴史であり、モンゴル族の特有なものである。しかし、これらを忘れ行くものが多く継承していくべきである
2	小6	アンダイ舞踊、アーチェリー、競馬、モンゴル相撲
3	小6	モンゴル文化はモンゴル族の生活と密接に関係している。例えば、モンゴル飲食、モンゴル語、歴史、祭りなどがある
4	小6	私たちの民族文化であるモンゴル語、舞踊、歌などは美しいである
5	小6	私はモンゴル族の伝統文化が豊かであると考える。しかし、私はモンゴル族のダンスと歌があまり好きではない。私いつもモンゴル語で話している。たまにモンゴル語で放送の番組をみている
6	小6	私にとってモンゴル文化とはモンゴル族の祭りである。たとえば、競馬、アーチェリー、レスリングの伝統活動がある。モンゴル人は重要な祭りにアンダイ舞踊を踊る
7	小6	私にとってモンゴル文化とはアンダイである。または、競馬、アーチェリー、レスリングなどの伝統がある
8	小6	モンゴル文化には競馬、アーチェリー、レスリングがある。モンゴル人は乳食品文化を守っていくべきである
9	中1	モンゴル族の伝統儀式
10	中1	モンゴル舞踊とモンゴル歌、モンゴル族の伝統祭りなど
11	中1	モンゴル文化はモンゴル舞踊とモンゴル歌、モンゴル族の伝統儀式である。私たちモンゴル人として誇りをもつべきである
12	中1	モンゴル族は遊牧民族であり、アーチェリー、競馬、モンゴル相撲などはモンゴル族の文化である
13	中1	アンダイと伝統祭り
14	中1	モンゴル舞踊、アンダイ、伝統儀式
15	中1	モンゴル族は他の民族と異なる歴史を有しており、私たちはモンゴル文化を振興すべきである
16	中1	モンゴル文化はモンゴル語とモンゴル歴史である
17	中1	アンダイ舞踊
18	中1	アンダイ舞踊、歌、アーチェリー、競馬、モンゴル相撲
19	中1	アンダイ舞踊、競馬、モンゴル相撲
20	中1	アンダイ舞踊、モンゴル歌、モンゴル歴史、競馬
21	中1	伝統祭りとモンゴル歴史
22	中1	モンゴル舞踊、歌、モンゴル歴史
23	中1	モンゴル族であること誇りをもつ
24	中1	モンゴル語、モンゴル舞踊、歌
25	中1	モンゴル族悠久な歴史をもった遊牧民族である、モンゴル文化を大切にべきである
26	中1	モンゴル文化は多様であり、私がモンゴル歌と舞踊が大好きである
27	中1	モンゴル文化は遊牧文化である。モンゴル族は善良な民族である
28	中2	モンゴル文化は神聖であり、私たちもっとモンゴル文化を広げるべきである
29	中2	モンゴル人として生まれたことに誇りをもっており、モンゴル文化を大切にしたい。モンゴル語をしっかりと学び継承していきたい
30	中2	私たちのモンゴル文化は特有の特徴がある。モンゴル族の服飾はきれいであり、モンゴルの歴史は世界に有名である
31	中2	私たちのモンゴル族は寛大な精神があり、善良な心があると思う。また、モンゴル族は馬の背の上での民族である。モンゴル族にはさまざまな伝統文化がある。たとえば、レスリング(相撲)、競馬、アーチェリーなどがある。
32	中2	私はモンゴル族の言語を保護すべきだと思う
33	中2	私はモンゴル族の文化は永遠に存在してほしい
34	中2	私はモンゴル文化をずっと保護してほしい、大事にしてほしい
35	中2	私はモンゴル族の一人になったことを誇りに感じる。これからもモンゴル文化を丁寧に学び、モンゴルのための力になりたい
36	中2	私はモンゴル文化は特有の特徴があると思う。モンゴル語は美しい言語である。とくにモンゴル族のアンダイ、歌、ダンス祭りは特有の特徴をもっている。私はモンゴル語に愛着をもっている。モンゴル文化を繁栄させるよう頑張っていきたい
37	中2	私はモンゴル文化が特有の特徴をもっているため、モンゴル文化を愛着すべきだと思う
38	中2	私たちのモンゴル族は親切であり、独特な風俗習慣を持っている
39	中2	私はモンゴル文化神聖であると思う。競馬するときの激情、レスリングをするときの力、アーチェリーをするときの表情は素晴らしいと思う
40	中2	私はモンゴル言語・文字は一番美しい言語・文字であると思う。世界一つしかの縦文字である。私はモンゴル族の後代になって生まれたことを心より誇りに思う。モンゴル族のためにという思いは私たちの心につながっている。生まれてから習ってきた母語、忘れてはいけない文化、死ぬまで いきていくところ、離れてはいけない場所。私はモンゴル文化を振興させるために努力していきたい

41	中2	私はモンゴル族の言語が特有の特徴を持っており、崇拝するチンギスハンを誇りに思っている。私たちは民族を愛し、世界にモンゴル文化を知らせているいくべきである
42	中2	私はモンゴル族の文化をもっと振興させるべきだと思う
43	中2	私はモンゴル族の伝統文化がさ多様であると思う。また、モンゴル族はミルクの白さのような心を持っている
44	中2	モンゴル文化は悠久な歴史がある。唯一縦に書かれた文字を持っている。モンゴルはわしたの誇り。自分の文化をしっかりと学び、文化を保護し、発展させようと思う
45	中2	私の故郷はアンダイの郷である。私はモンゴル文字を保護していきたいと思う
46	中2	モンゴル文化は特有の特徴を持っている。私たちの文化を継承していくことを願っている
47	中2	モンゴル族の文化をもっと保護すべきだと思う
48	中2	モンゴル文化は特有の特徴を持っている。私たちは文化をもっと継承していくべきである
49	中2	私はモンゴル人は親切であり、牧畜に愛着を持っていると考える。チンギスハンの後代の私たちはモンゴル族を愛着べきである
50	中2	私はモンゴル文字は美しい文字であると思う。私たちの母語は、世界唯一の縦文字である。私はモンゴル族の後代になって生まれたこと心よりうれしく思っています
51	中2	モンゴル人一人ひとりは自分の文化を保護し発展させるべきだ
52	中2	モンゴル文化の一つとして毎年の秋の季節に祭りを行い、その中主な種目として競馬、アーチェリー、レスリングがある
53	中2	モンゴル人はふるさとをを守っていくべきだ
54	中2	モンゴル人の心はやさしいし、モンゴル人はモンゴルの乳食品文化に愛着をもっている
55	中2	モンゴル族は植物、自然を愛する民族である
56	中2	モンゴル族の遊牧生活は文化文化の基本である
57	中2	モンゴル文化にアンダイがある
58	中2	モンゴル族の習慣は多様である

（2）モンゴル語教育の学び

児童生徒は「あなた自身はモンゴル族のひとりであることを自覚していますか」（表４－11）という質問に対し、「自覚している」と答えた児童生徒は 79.3%を占め、「自覚していない」と答えた児童生徒は5.1%であり、「関心がない」のは14.8%であった。ここで、「自覚している」と答えた203の児童生徒に対し、「モンゴル族であることを最も強く意識するのはどのようなときですか」（表４-12）と質問したところ、「モンゴル族の歴史や物語を習ったとき」が一番多く38.4%を占めている。次は「モンゴル族の歌や踊りを聞いたり、見たりするとき」は28.6%、「モンゴル族

表4－11. 民族意識について

	自覚している	自覚していない	関心がない	無回答	合計
小6	58(75.3)	7(9.1)	12(15.6)	0(0)	77(100)
中1	81(83.5)	3(3.1)	12(12.4)	1(1)	97(100)
中2	64(78)	3(3.7)	14(17.1)	1(1.2)	82(100)
合計	203(79.3)	13(5.1)	38(14.8)	2(0.8)	256(100)

表4-12. モンゴル族であることを最も意識する場面(N=203)

	人数	割合(%)
モンゴル族の歌や踊りを聞いたり、見たりするとき	58	28.6
モンゴル族の伝統行事活動に参加するとき	36	17.7
モンゴル族の歴史や物語を習ったとき	78	38.4
ほかの人にモンゴル人らしいと言われたとき	5	2.5
ほかの民族の人と接触するとき	22	10.8
その他	3	1.5
無回答	1	0.5
合計	203	100

の伝統行事活動に参加するとき」は 17.7%であった。この結果よりモンゴル族の歴史は子どもの民族意識形成の重要な側面であるといえよう。つまり、多くの児童生徒は自分がモンゴル族であることを自覚していることがわかる。一方、自由記述（表４－10）のなかにモンゴル語に関して 1 人の生徒は「私はモンゴル言語・文字は一番美しい言語・文字であると思う。世界に一つしかない縦文字である。私はモンゴル族の後代になって生まれたことを心より誇りに思う。モンゴル族のためにという思いは私の心につながっている。生まれてから習ってきた母語、忘れていけない文化、死ぬまで生きていくところ、離れていけない場所。私はモンゴル文化を振興させるために努力していきたい」（No.40）とモンゴル語への思いを強く表現している。内モンゴルの民族学校では現在モンゴル語が話せない若者が増えているため、モンゴル語教育のなかで母語を大切にすべきという教育が行われているからである。生徒の「生まれてから習ってきた母語、忘れていけない文化、死ぬまで生きていくところ、離れていけない場所」という記述は初級中学のモンゴル語教科書の「私のふるさと」という詩の内容である。したがって、生徒はこの詩を引用しモンゴル文化への思いを表現した。同じく、小学校３年のモンゴル語教科書に「母語」という詩がある。同詩はモンゴル族が継承してきたモンゴル語・モンゴル文字を称賛した詩であり、詩では美しいモンゴル語を継承し保護する義務があるという内容が含まれている[24]。このように、子どもたちはモンゴル語教育の学びを通じてモンゴル語および自民族に対し強い思いを持つようになっていると思われる。

先述のように児童生徒にとってのモンゴル文化は「モンゴル服飾、馬、モンゴル語、アンダイ、モンゴル歌・ダンス、祭り、競馬、モンゴル相撲、アーチェリー、ふるさと、歴史、自然、遊牧生活、習慣」であった。これらはモンゴル語教育の学びと大きなかかわりがあると思われる。モンゴル民族の伝統文化が小学校及び初級中学のモンゴル語の教科書に取り入れられているため、児童生徒が自民族の伝統文化を理解する手段となっている。児童生徒はモンゴル語教育の学びを通じて自民族への思い、モンゴル文化への愛着を育んでいるのではないかと考える。

アンダイ体操の事例よりも表４-13 に示しているように「モンゴル族であることを自覚し

表4-13. モンゴル族の意識 と 好きな体操 のクロス表

		好きな体操						合計
		アンダイ体操		ラジオ体操		どちらともいえない		
モンゴル族の意識	自覚している	147	72.4	25	12.3	31	15.3	203
	自覚していない	5	38.5	5	38.5	3	23.1	13
	関心がない	15	39.5	12	31.6	11	28.9	38
	無回答	2						2
合計		168	65.6	42	16.4	46	18.0	256

ている」児童生徒は「アンダイ体操が好き」との回答が高い割合を示している。今回の調査結果より、多くの児童生徒は「アンダイはモンゴル族の文化である」、「モンゴル族の文化を継承してほしい」からアンダイ体操をこれからも民族学校で教えてほしいと思っていることが明らかになった。このことより児童生徒のモンゴル文化への愛着の基盤として民族学校におけるモンゴル語教育とモンゴル文化の学びがあると思われる。

---

[1] 「教学計画」は、主に学校単位における教育課程の設置と設置の順序及び時間などを規定するものである。「教育大綱」は個別教科の学習内容を規定するものである。（ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容―バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐって―』現代図書、2016 年、p. 41 を参照。）

[2] ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容―バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐって―』現代図書、2016 年とウルゲン『中国におけるモンゴル族民族の学校教育』ミネルヴァ書房、2015 年を参照。

[3] 楠山研『現代中国初中等教育の多様化と制度改革』東信堂、2010 年、p. 76。

[4] ウルゲン『中国におけるモンゴル族民族の学校教育』前掲書、p. 149。

[5] ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容―バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐって―』前掲書、p. 61。

[6] 同上、p. 71。

[7] 同上。

[8] 小学と初級中学は 5-4 制の学校と 6-3 制の学校を指す。

[9] 李那木拉「モンゴル語で教授している中学校にモンゴル族歴史課程の開設において存在する問題及び解決方法」内モンゴル師範大学修士論文、2014 年、p. ６。

[10] 例えば、宝楽日「モンゴル族の民族中学校に地方課程―モンゴル民族の歴史文化の開設に関する考察」『内モンゴル師範大学学報（教育科学版）』（第 16 巻第 6 期、2003 年）では民族学校に『モンゴル民族の歴史』を開設することは内モンゴル民族教育の発展の需要であり、民族学校の子どもは基本的なモンゴル族の歴史と文化を身につけることができると指摘した。

[11] 李那木拉「モンゴル語で教授している中学校にモンゴル族歴史課程の開設において存在する問題及び解決方法」前掲論文、p. 27。

[12] 同上。

[13] 同上。

[14] ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容―バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐって―』前掲書、p. 43。

[15] 同上、pp. 60-61。

[16] 同上、p.61。

[17] 義務教育教科書語文『教師教学用書（1年級・下』内モンゴル教育出版社、2014年、p.48。

[18] 「ジャルト旗Aモンゴル族小学校創立30周年記念」雑誌より。

[19] 「アンダイは牧野草原から都市の広場へ　モンゴル健身舞は都市へ」（2005年3月27日）新華網 http://sports.sina.com.cn

[20] 張麗滓「民族健身新項目　安代健身操的創編与価値」『内モンゴル民族大学学報（自然科学版）』第23巻第２期、2008年３月、pp.226-227。

[21] 『通遼日報』2008年４月21日。

[22] 筆者は2015年5月25日～6月27日にクロン鎮においてモンゴル文化に対する児童生徒の意識についてのアンケート調査を行った。調査内容は漢語で作成した。

[23] 英雄「アンダイ体操課程価値に関する民族誌的研究」内モンゴル師範大学修士学位論文、2013年、pp.51-55。

[24] 義務教育教科書語文『教師教学用書(3年級・上)』内モンゴル教育出版社、2013年、pp.93-94。

第五章　中華民族多元一体構造の中の少数民族文化の継承と教育的課題

本研究は中国における民族文化政策の展開を辿りながら、民族文化が少数民族の固有の民族意識形成に大きな影響を与えると同時に、国民統合に果たしてきた役割について明らかにすることを目的としている。中国政府により民族文化政策が推進されてきたが、各時期における民族文化活動の特徴からみると中央政府は単なる民族文化の保持・継承をおこなってきただけではなく、背後には文化面における国民統合を推進してきたことがわかる。表５－1 は国家レベル、地方政府レベル、民衆レベルにおいて、それぞれの時代区分において民族文化活動がどのような特徴を有しているかをまとめたものである。これによると、民族文化活動には「国民統合」と「民族文化の継承」という両義的な意図が内在していたことが分かる。以下、これまでの各章を踏まえて、まず、中央政府から見た民族文化の意味、つまり民族文化の中華文化への包摂を検討し、文化面における国民統合の過程を考察する。次に、国家枠組の中で少数民族がどのように文化を継承し民族性を形成しているかを検討する。

表5－1. 各時期における民族文化活動の特徴

時期区分 / 3つの層の特徴	1949-1965	1966－1976	1977－2001	2002－現在
国家レベルにおける民族文化政策	民族平等を実現し、民族関係の改善を図る(上からの国民形成のために文化活動を通じて「革命精神」を宣伝し、毛沢東思想を民衆に伝達する)	一元的な政治的・文化的統合が強行された（少数民族の民族アイデンティティが否定された）	経済建設を中心とした民族文化の振興が進められた（経済統合を通じて少数民族の国家への意識を強化する）	文化強国を目指し 中華文化のソフトパワーを強化する（中華文化の推進を通じて中華ナショナリズムを強化する）
地方レベルにおけるウランムチ（1957－現在）	政治・政策の宣伝と民族文化の普及に努めた	毛沢東の宣伝隊となった ウランムチの上演は革命模範劇をモデルにした	・ウランムチの活動領域を開拓し、文化産業市場に参入して利益を得ることに努めた ・モンゴル民族の文化的特徴を表現した草原、馬、故郷などの歌を中心に行うようになった	ウランムチは民族文化のブランドとする政策がとられ、地域文化（民族特徴）を強調するようになった
民衆レベルにおけるアンダイ	社会主義を反映した内容と民族特徴を表現した舞台アンダイ（新アンダイ）が創作された	反革命的、封建的、迷信的なものとみなされた	アンダイチンの自由な発想に基づく作品が創作されるようになった	・2006年に国家無形文化財に指定された ・2011年クロン旗は「中国民間文化芸術郷」と命名された ・アンダイ体操を民族学校に導入

第１節　国民統合の手段としての民族文化

本研究では民族文化は国家政策のもとでどのように位置づけられているかについて国家レベルにおける民族政策、地方レベルにおけるウランムチの活動、民衆レベルにおけるモンゴル族のアンダイ文化の創造という３つの層の文化活動の実態より明らかになった。これらの検討を通じて、本節では建国から現在までの民族文化による国民統合の過程を考察する。

１．民族文化の政治、政策の宣伝的役割（1949～1976 年）

第一章では少数民族を国民として最も有効に統合するための方法であった民族識別活動を検討し、中国社会特有の脈絡における民族が形成された過程を論じた。民族識別活動は建国初期から行われており、その背後には毛里が指摘しているように新政権は辺境地域に住む人々（モンゴル人、チベット人など）に共和国のメンバーとしての一体感、アイデンティティ、あるいは忠誠心を作り出す課題があった[1]。そのため、新中国成立後の建国初期の主要な民族活動は、新中国の基本的民族政策の確立、民族平等の実現、民族関係の改善であった。中央人民政府は民族関係を改善し、民族間と民族内部の紛争を調停し、少数民族との関係を強化するため中央訪問団を少数民族地域に派遣し、全国の少数民族に中央の民族政策の宣伝を行った。その中、「文芸団体は文芸活動と宣伝活動の最も重要な組織形式の一つである。連絡、普及の架け橋」[2]として位置づけられた。すなわち、その宣伝活動の担い手となったのは文芸工作団体であり、その手段となるのが民族文化であった。建国初期における文化活動の特徴は民族融和の精神から民族文化への理解と尊重という理想と文化芸術を通じて「革命精神」を宣伝する教化・宣伝としての現実が、「人民に奉仕する」というスローガンとして浸透していた。このような民族文化政策のもとで地方レベルにおいて 1950 年代に内モンゴルにウランムチが結成され、各文芸団体のモデルとして扱われていた。1965 年に全国で「ウランムチから学ぶ」運動が展開され、全文芸団体はウランムチの「誠心誠意に人民に奉仕し、党と毛沢東文芸路線革命精神を貫徹する」ことを中心に学ぶ活動を行った。内モンゴルにおけるウランムチの結成は中央政府の要求に対する地方政府の対応であり、ウランムチの活動は中央政府の要求に応えたため中共に高く評価されたのである。

一方、民族文化の政治・政策宣伝への扱いは民衆レベルでの文化活動にも浸透し、民族文化の「伝統的な要素」が現代化を阻害する「封建的な」ものと見なされ、民族文化を改変する実態に至った。これは第三章で検討したアンダイの事例から窺える。中央の「古きを退けて新しきを出す」という方針のもとで、アンダイ芸術家たちは、その文化を中国社会に適用させるために試行錯誤しながら新たな舞台アンダイを創作した。アンダイの創作者はアンダイの宗教的要素を捨て、新時代の新しい出来事を内容に盛り込み、中国社会に適用できる形で「新アンダイ」として登場させたのである。アンダイの歌詞は新中国成立後の新しい時代の新しい生活を讃えて、党の政策を速やかに宣伝するという内容で創作された新中国社会の少数民族へのアピールであった。しかし、これは行き過ぎたために文革時期のウランムチの活動は完全に社会主義建設思想の宣伝の道具になってしまった。すなわち、建国初期と文革の時期では民族文化は国民統合としての「政治・政策の宣伝」的役

割が鮮明であった。

２．文化の経済的価値への評価による国家への帰属意識の強化（1977～2001 年）

文革の収束後、中央政府は各民族の芸術、文化を振興させることに着手した。1984 年に中国の民族問題を解決する基本政策である「民族区域自治法」が制定される。「民族区域自治法」の第 38 条では「民族自治地方の自治機関は民族的形態と民族的特色をもつ文字、芸術、新聞、出版、ラジオ、映画、テレビなどの民族文化事業を自主的に発展させる」ことが示された。この時期では地方において、ウランムチには大きな自由度が与えられ、モンゴル族の文化的特徴を表現した作品が創り出されるようになった。さらに、アンダイの創作にあたっても 80 年代に入り内容の政治的縛りからアンダイ創作者の自由な発想に基づく作品が創作するようになった。

しかし、改革開放後の国家民族文化政策の特徴からみると、経済建設を中心に少数民族の文化の振興が進められた点にある。国家は全国的に農村地域、辺境地域、民族地域の乏しい公共文化施設の改善に力を入れ、民族自治地域への投資と西部大開発政策を推進したが、その背景には都市部と農村、沿海部と内陸部の地域格差が深刻し、少数民族と漢民族の経済格差を是正するため経済統合を通じて少数民族の国家への帰属意識を強化しようという意図があった。少数民族の中国人アイデンティティを強化するために地域の産業化を推進することが有効な手段になり[3]、特色ある地域文化を文化資源化し、観光産業に結びつけ、文化の経済的価値への注目が高まった。また、地方において、改革開放期に入りウランムチは経費獲得の新たな課題に直面し、ウランムチの活動は新しい活動領域を開拓し、文化産業市場に参入して利益を得ることに努めるようになった。したがって、この時期では文化の多様性および創作の自由が認められるようになったが、経済建設を中心とした文化の振興が進められ、経済発展という利害を通じた少数民族の国家への帰属意識が強化された。

３．民族文化の中華文化への包摂による中華民族への帰属意識の強化（2002～現在）

2001 年の WTO の加盟をきっかけに中国のグローバル化、市場化の進展に伴い、新たな国家戦略として文化政策を重視し、政府指導で中華文化のソフト・パワーを強化する動きが見られ、中国の文化をめぐる国家戦略は新たな局面を迎えた。特に、2011 年に中国共産党第 17 期中央委員会第６次全体会議では、「文化体制改革を深化させ、社会主義文化大発展、大繁栄を推進することに関する若干の重大問題の決定」がなされ、文化強国をめざす国家

戦略が示された。「文化強国」実現のための新たな要請として、「文化産業は国民経済の支柱的産業として、全体的実力と国際的競争力をいっそう強める。民族文化を主体とし、外来有益な文化を吸収し、世界に向けて中華文化を推進し、文化の開かれた構造を改善する」と明記した。これを受け近年では文化産業を国民経済の支柱的産業とし、同時に政府指導で中華文化のソフト・パワーを強化し、中華文化を世界に発信して、感化力・影響力を拡大することが謳われている。

国家政策を踏まえた地方政策の取り組みも行われている。例えば、内モンゴル自治区政府が「内モンゴル自治区文化大区建設綱要」を打ち出し、内モンゴルの多くの地域を民族文化地域として命名し、地域文化を強調し、各地域ではオリジナルな取り組みが行われている。その後の 2013 年「内モンゴル自治区十二五文化発展計画」では「文化大地域」から「文化強地域」建設を目指し、文化産業の発展を推進するようになった。また、文化部による社会主義先進文化の振興および「中華民族の優秀文化を継承する」という方針のもとで、少数民族のある特定文化は「中華民族の優秀文化」として捉えられている。このように、近年の中国は文化強国をめざす国家戦略を推進しているが、とりわけ少数民族の文化を「中華民族の優秀文化」として宣伝・称賛し、エスニック・アイデンティティを刺激しながらも、国民文化へと還元しようとしている。つまり「中華」思想を利用しながら民族性を国家と一体化させる政策が展開されているといえる。

本節ではまず、中央政府から見た民族文化の意味、つまり民族文化の中華文化への包摂を検討し、文化面における国民統合の過程を考察した。建国初期における文化活動の特徴は民族融和の精神から民族文化への理解と尊重という理想と文化芸術を通じて「革命精神」を宣伝する教化・宣伝としての現実が、「人民に奉仕する」というスローガンとして浸透していた。その後、毛沢東思想に依拠した民族文化の従属と破壊を経て、改革開放政策によって文化は単なる社会主義イデオロギーの教化手段ではなくなり、文化の多様性および創作の自由が認められるようになった。しかし経済建設を中心とした文化の振興が進められ、経済発展という利害を通じた少数民族の国家への帰属意識が強化された。2000年以降の文化的ソフト・パワーや国際的影響力の強化は、「偉大なる中華民族の復興」というスローガンの下で少数民族を包摂した国民の文化向上によって国民的統合を強化する作用を果たしている。

第２節　民族文化の創造による文化の継承と教育的課題

第１節では国家民族文化政策の展開を国民統合という視点から検討した。本節ではこうした国家枠組の中では少数民族がどのように民族性を形成しているかを検討する。ここで、第三章で取り上げたモンゴル族のアンダイの事例を通じて検討したい。

アンダイの事例から見ると、新中国成立後、アンダイは「封建迷信」と批判され、一時的に消滅の危機にあったが、アンダイの創作者は中国社会に適用させるため試行錯誤しながら新たな舞台アンダイを創作した。すなわち、国家政策のもとでモンゴル族は自ら伝統アンダイといったものを変容させたことが第三章で明らかになった。この新アンダイの創作にあたって文化の担い手の「工夫」が見られ、改変されたアンダイは宗教的目的ではなく、踊りを中心にした娯楽性が強いものとなった。本研究ではこうしたアンダイの変容を文化の創造として捉えた。今日までは多様なアンダイの形態が見られるが、これらはモンゴル族の文化として共有されてきた。以下、文化の担い手による民族文化の創造の意義と文化の継承を考察する。

１．身体を媒介にした学習/継承

本研究は少数民族文化の継承を論じる際、民族学校教育外の地域社会で行われている文化の創造活動に着目し、民族文化の担い手による文化の新たな創造を文化の継承としてとらえたい。ここで、日本の沖縄の芸能の伝承過程を検討した山城千秋の文化伝承と教育に関する指摘を参考にしたい。

山城は沖縄のシマ社会の社会教育関係団体による文化の伝承と学習を論じる際、その学習には大別して二つの方法があると指摘した[4]。つまり、一つは、他者あるいは媒体を介して知識や情報を得ること、もう一つは、身体を媒介とした直接的な相互行為によって得る知識と認識である[5]。そこで、地域文化の伝承は書籍や古老からの伝聞によって知識を獲得することがあっても、その殆どは身体を伴う学習活動であると言える[6]。また、山城はシマ社会が自己を大きく規定している経験に基づいて、シマの「無意図の教育作用」は総世代の交わりによる日常的な文化伝承の中に見いだされるということである。それは、学校教育とは対照的に、普遍的な知識よりも土着的な知識を、観念的な知識よりも身体的な知識に比重を置くことによって、いわば生活の場でおのずと学習する教育がなされていると論じる[7]。さらに、伝承における「形」と「型」について次のように指摘している。青年の民俗芸能の学習は、年月と場数を重ねることが熟達への道へとされるのである。青年団に入った新入会員は踊りの「形」を模倣することから始まり、先輩の「形」を模倣し、繰り返すのである。そして一通り覚えたら次の芸能の模倣へ移り、何度も模倣することにより、

身体を通して「型」を理解するようになるといえる[8]。ここでいう「形」というのは表面上に現れた可視的な動きであり、それに対して「型」とは、文化的、歴史的な意味の認識であると論じる[9]。その芸能の「わざ」の習得には、伝承する先行世代との言語と身体を介した学習過程が付随し、芸能の歴史性と意味を解釈することに教育的価値があると指摘している[10]。民俗芸能の習得は、その「形」の模倣を超えた、「型」を身体全体を通して認識することにあり、その学習過程には経験者の蓄積という歴史性を自らの日常生活との連続の中でその「形」の意味を解釈することにほかならない。地域の民俗芸能の場合は、「教師」の模倣から「わざ」の習得という到達点以外に、「芸能を創造する」ことが伝承文化においては重要な要素となっていると指摘した[11]。

山城の論を借りれば本研究の場合は、第三章で取り上げたベテランアンダイチンは「教師」的な存在であり、「学習者」は「教師」の模倣から「わざ」を習得し、そのあと「型」を理解し、アンダイの創造活動を続けたと考える。第三章で取り上げたX、Z、W、L氏は小さいころからアンダイに興味を持ち、村のアンダイの伝承・創造者にアンダイの動作を学び、自分なりのアンダイの踊りができ「一人前」となる。地域の人々や子どもにアンダイ舞踊を教える活動を続き、現在はアンダイの伝承人と評価されるようになった。

アンダイチンによるアンダイの創造活動はアンダイ文化の継承にとって重要な側面であると考える。文化伝承人であるW氏はインタビューでは6つの種類[12]のアンダイを創作し上演していると答えた。そして、W氏はこれらの創作では基本的に伝統的なアンダイの曲と動作を守っている指摘する。つまり、伝統アンダイと呼ばれる過去の文化を受けとめ、伝統文化に基づいて新たな文化を創造しているのである。クロン旗はアンダイ文化の中心地域といわれるのは多くの著名な民間アンダイチンがいたことで、彼らによる新たに創作されたアンダイはほかの地域へと伝播されているからである。アンダイチンは身体を通して「型」を理解し、文化を創造してきた。文化の担い手による文化の創造では、先人からアンダイの「わざ」の習得があり、身体を介した学習過程が付随するとともにアンダイの歴史性と意味の認識があることに教育的価値があると考える。以下、文化の新たな創造による継承について検討する。

（1）伝統の「形」を基本に据えた文化の新たな創造―アンダイの伝承人による創造活動

サルラは、アンダイを伝統アンダイ、新アンダイに分けている。伝統アンダイとは、1947年以前のものを指し、病気を治すボ（シャーマン）の儀式であり民間の伝統である。新アンダイとは、儀式的側面が弱まり、芸術の形式で発展したアンダイである[13]。新アンダイは、

シャマニズムという宗教的色彩が弱まり、踊りを中心に演じられるように変容した形態である。伝統アンダイでは、アンダイ歌手がリードし、患者が参加者と一緒に歌いながら踊るのが儀礼の特徴である。ここではアダーアンダイとアンダイ伝奇を例に、新アンダイが伝統アンダイのどの部分を継承したかについて具体的に見ていくことにしたい。

表５−２には、伝統アンダイから新アンダイへの変容部分とその共通点をまとめた。伝統アンダイでは、患者とシャーマンの関係があり、歌を中心に治療するという目的で行われるが、新アンダイは踊りを中心に民衆の娯楽的なものになる。「アンダイ伝奇」の特徴は、伝統アンダイが踊ったり歌ったりする部分を継承し、歌、踊り、劇が融合し一体化した表現形式である。劇の主旨は、アンダイがモンゴル族の生活に基づき発生したことと、モンゴル民族の封建社会下での厳しい状況を表し、自由、幸福な社会への期待を表すものである。新アンダイにおいて、車軸はなくなるが、「車」を舞台背景にした「アンダイ伝奇」の上演では、「車」がモンゴル生活や伝統アンダイの表現になっている。

モンゴル人は、昔から「太陽」と「月」を信仰している。その理由は、「太陽」と「月」は、人類に光、暖かさを与えると同時に、「円」の形はモンゴル人にとって吉兆、円満、幸福の象徴となっているからである[14]。アダーアンダイにおいて「ナイジム」（車軸）を回り踊るのはその習慣に基づく。アンダイ文化の回って踊ることに吉兆を込めるというモンゴル族の習慣が守られている[15]。また、足踏み踊りは元時代では広く流布していた集団踊りであり、その後のアンダイ踊りの主要な部分となっている。張は、アンダイ舞踊では踏歩（足踏み）、走歩（歩く）、跳跃（ジャンプ）、旋转（回る）という動作は腕の動きと合わせてアンダイの特徴的な動作であると指摘している。そして、左足を前に踏み出すと同時に左腕

表5-2.伝統アンダイから新アンダイの変容（筆者作成）

	性質	プログラム	主役	会場	道具	演技主旨	共通点
アダーアンダイ	宗教性（治療を目的）	・開幕 ・儀式のクライマックス ・閉幕	患者とアンダイ歌手の関係	平坦で広い場所	車軸、鈴鞭、ハンカチ、紙屋	病気と闘い健康を祈る	踊りの基礎部分に込められたモンゴル族の祈り、祝詞、精神、宗教意識
アンダイ伝奇	芸術性（歌、踊り、劇の融合・作品）	歌と踊りを中心に	役者を中心に	舞台	絹のハンカチ	自由、幸福な社会を表現	

を前へ動かすことがアンダイ芸術の精髄、魂であるという[16]。

また、伝統アンダイの道具の中にある鞭とハンカチは、モンゴル人の日常生活のなかで使われていたものである。アンダイ歌手が鞭を持って鬼神を追い出す踊りのなかで、参加者が真似てハンカチをもって一緒に踊り、儀式を活発にする。新アンダイの道具では絹のハンカチに変わり[17]、上下、前後にハンカチを回すという動作がアンダイの芸術的特徴である[18]。

ここで、伝統アンダイと新アンダイは性質的に異なる形態であるが、新アンダイは伝統アンダイの舞踊の基礎を改変し、モンゴル人の生活、精神の表れとしてモンゴル族の新たなアンダイ文化が創りだされているといえよう。新たに創りだされた新アンダイは、民族文化の担い手によって改変されることにより、アンダイの宗教性がなくなり、娯楽性が強調されたとみられる。

民族文化の担い手によって舞踊、劇、体操として新しく創作されたアンダイは、現在、民衆の間に広がっている。アンダイのさまざまな形の変容はアンダイ文化を普及する一つの手段であり、これは新しい文化の創造でもあると考える。表５－２からみられるように、伝統アンダイと新アンダイの共通点として、踊りの基礎部分にモンゴル族の祈り、祝詞、精神、宗教意識が込められている。伝統アンダイから新アンダイへの変容過程で踊りの基礎部分が継承されていくことには大きな意義があり、現代社会に柔軟に対応していることを示している。すなわち、伝統の形を基本に据えながらもその時代時代に、関わった人々の創造性が生かされて継承してきと言えよう。

しかし、伝統アンダイから新アンダイへの変容過程では踊りの基礎部分が継承されていくことには大きな意義があるとして捉えているが、多くのモンゴル人にとってアンダイとは何か、アンダイの変容について十分伝達されていない現状がある。アンケート調査のなかでアンダイの変容について「知らない」と答えた人は約５割を占めている。伝統アンダイには「雨乞いする」、「鬼神を追い出す」また「病気を治療する」という種類のアンダイの儀式があるが、それが建国初期に現代化を阻害する封建迷信と見なされ、徐々にそれを知る者は少なくなっていた。その後市場経済やグローバル化進んでいる社会背景のなか、民族文化の消失が深刻化している。上述のアンケート調査の結果で示しているように少数民族は過去の伝統への記憶が薄く、新しい時代に適応する道を模索する厳しい岐路に立たされ、文化の継承は大きな課題となっている。

そこで、文化の担い手は文化の創造性に目を向け新たな文化を再構築していると考える。アンダイの新たな創造では伝統アンダイの宗教性が失われるが、モンゴル人は「モンゴル

らしさ」を守り続けている。新アンダイは、民族文化の担い手たちによって民衆に普及しやすい形に変容させられ、多くの民衆に受け入れられることを通じて、地域の文化として定着していったと考えられる。つまり、アンダイのさまざまな形の変容は、アンダイ文化を普及する一つの手段であり、新しい文化が創造されている過程である。そこでは、民族文化の担い手による文化の変容の取り組みが民族文化の継承につながっていると考えられる。

（2）アマチュア団体の創出による継承活動

アンダイチンによる文化の継承は文化の創造だけにとどまるだけではなく、文化の消失という地域の課題を意識し、アンダイの伝承人を中心とした自発的な民間芸術団体の結成によるアンダイ文化の普及活動がみられる。本研究で取り上げたX氏、Z氏は村の人々を招きアンダイ芸術団を組織し、アンダイ舞踊を教え村の文化生活を豊かにしている。文化伝承人はアンダイを踊ることに「楽しい、健康的」であると感じられる一方、「民族文化を継承していきたい」という強い思いこそが地域活動の原動力になっている。アンダイ文化を継承するために次世代にアンダイ舞踊を伝達し、次の伝承人の養成にも力点を置いている。また、W氏は「健康、快楽、調和、奉仕」という目的で、「草の根芸術団体」を結成し、文化支援サービス活動を積極的に展開し、アンダイ文化芸術を伝承してきた。

民族文化の創造のもう一つの意義としては、民族学校における知識中心の文化継承の限界を補っているといえよう。現在の民族学校においてアンダイ体操を教えることは、学校教育現場における民族文化の継承になると考える。学校教育にアンダイ体操を導入することは、青少年に民族文化を学ぶ機会を提供することであり、モンゴル文化を意識するうえでの機会となると考えられるからである。子どもにアンダイ体操を体験させることにより、モンゴル人としての民族意識の形成や地域への帰属意識を強固にする教育をもつと考える。また、ここには教科書とは違うもう一つの教育作用が働いていると言えよう。

２．民族文化継承の教育的課題

序章で言及したように、これまでの中国における少数民族の文化継承の課題は民族教育に力点がおかれおり、民族学校教育外の地域社会で行われている芸術団体や少数民族による創造活動を視野に入れた研究が欠落していると考える。本研究では民族文化の継承を学校教育だけに限定するではなく、地域社会で行われている芸術団体の文化活動に着目した点に意義があると考える。

まず、ウランムチに関しては第二章で検討したようにウランムチには「政治・政策の宣伝」と「民族文化の普及」という両義性がある。つまり、ウランムチはモンゴル族の国民統合への間接的装置として役割と地方政府にとって市場経済発展の主要な事業として位置づけられていると考える。一方、モンゴル族の文化面ではウランムチの上演プログラムは、モンゴル民族の共通の文化という意味だけではなく、ローカルな地域文化を中心となっていると言えよう。さらに、ウランムチのもと団長であるＭの事例よりウランムチの団員からみるウランムチの活動は党の宣伝、文化の普及だけではなく、「文芸、民衆、奉仕」を結び合わせたものであり、文芸を通じて人民に奉仕することであるという意識の強さが見られた。ウランムチはこうした草創期のウランムチの精神を受け継がれながら地域に入り地域住民の身近に活動し、地域住民にアマチュア文化芸術活動を指導し、アマチュア文芸の指導者を養成する任務を保持してきた。

次に、第三章のアンダイの事例より見られる「健康、快楽、調和、奉仕」という目的で結成された「草の根芸術団体」のような自発的な民間芸術団体の創出による民族文化の普及がみられる。こうした団体は文化支援サービス活動を展開し、アンダイ文化芸術を伝承してきた。アンダイ文化の広がりにはアンダイの伝承人と専門芸術団体の役割だけではなく、自発的に結成されたアマチュア芸術団体がアンダイ文化の普及の新たな担い手となっている。また、アンダイの伝承人はアンダイ文化を継承するために次世代にアンダイ舞踊を伝達し、次の伝承人の養成にも力点を置いている。アンダイチンは民衆に対する文化支援活動を積極的に展開している一方、アンダイチンによるアンダイの創造活動はアンダイ文化の継承に繋がっていると考える。

しかし、地域社会で行われている芸術団体の活動による文化継承という点が評価できるが、以下のような教育的課題があると考える。

（１）民族文化継承活動の自律性に問われる課題

第１に、政府主導のもとでの文化活動の継続性がない。内モンゴルの文化推進取り組みは国家民族文化政策に頼りがち側面があり、民族文化活動の自律性が問われるという課題が生じている。クロン旗のアンダイ文化推進取組みからみられるように、アンダイ文化の発信と経済交渉会を行うことを目的とした旗政府主催の「アンダイ文化芸術祭」の開催にあたって大学の研究者も携われている経緯がみられる。旗政府は大学と共同でクロン旗の文化を著書としてまとめた『アンダイ文化研究集成』、『アンダイ之郷―クロン旗歴史文化概要』、『クロン歴史文化研究シリーズ』の出版を通じてクロン旗の歴史、文化を記録として残している。これらの成果は旗政府にとってアンダイ文化を発信する手段となるととも

に地域の人々にとってクロン旗の歴史を知る媒介ともなると考える。こうしたアンダイ文化の推進の取り組みは国家民族文化振興政策を積極的に利用し、アンダイ文化を地域に広げていると考えるが、政府主導の取り組みに経済的価値を求める傾向にある。またはこうした取り組みを通じてほかの地域に中国のモンゴル文化というインパクトを与える意図が見られる。中国における民族文化は国民統合の手段でありながら国家への求心力の強化であることが建国から現在までの国家民族政策と少数民族の文化のおかれた状況から窺える。文化部による社会主義先進文化の振興および「中華民族の優秀文化を継承する」という方針のもとで、アンダイ文化推進取り組みはその一つであり、民族文化活動はその時々の国家政策に対応した活動しか行っていないという状況がある。地域資源の保存、地域文化の継承・創造に向けた教育活動や地域住民との協同な地域づくりといった地域課題を意識した学習活動の企画などが行われていないため、文化の喪失に対応する継承活動につながっていないと考える。

第２に、地域社会に行っている芸術団体の活動及び地域住民の主体性が不足している。第１に指摘した課題にも関連するが文化活動は特定文化に着目する傾向がある。文化が衰退しつつある現実に対して特定文化に着目するだけではなく、地域課題、生活文化を視野に入れた自主的、主体的な文化活動及び地域の中での学習活動が求められると考える。

（２）民族文化の学びに関わる課題

第一に、民族文化の何をどのように継承するか。モンゴル舞踊、音楽、歴史、モンゴル語などのモンゴル文化はモンゴル人としての民族意識の形成の源泉になっている。山城千秋は芸能の習得には、その背景にある歴史や文化、言語を学習し、自らの文化的アイデンティティを強固にする教育的機能をもつと指摘している[19]。民族学校の生徒を含め地域の人々はアンダイ体操やアンダイ舞踊の身体的な学習を経て、モンゴル人としてのアイデンティティが形成される。伝統アンダイから新アンダイへの変容過程では踊りの基礎部分が継承されていくことには大きな意義があるとして捉えているが、多くのモンゴル人にとってアンダイとは何か、アンダイの変化について十分伝達されていない現状がある。さらに、第四章で明らかにしたように民族学校において歴史教育を含め、アンダイ文化についてアンダイ体操だけを教えることにとどまっており、教科書の中に編纂されてない現状がある。したがって、民族文化の何を次世代に教えるか、どのように継承するかは学校教育を含め、民族文化の担い手の文化継承の教育的課題として挙げられる。また、『アンダイ之郷―クロン旗歴史文化概要』、『クロン歴史文化研究シリーズ』などの本が出版されているが、旗政

府の成果の紹介だけにとどまっている。文化活動はこうした成果を生かし、地域の人材（アンダイの創作者、アンダイの伝承人）を巻き込んだ教育活動の実施や教育実践活動の中で文化の価値を見出すことが求められると考える。文化活動はレクリエーション活動だけではなく、文化の発展や継承に生かした地域全体の中での学習活動が必要であろうと考える。

第二に、上記の地域住民の学習活動を支援する活動の場が整備されていない。2005 年以降においては、中央政府より文化振興の一連の計画、規定、通知が出された。政府は財政方面から民族文化の振興、民族教育事業、民族人材養成を重視し、公共文化サービス体系の確立を強調した。特に、辺境地域や農村地域に力を入れ、都市部と農村の教育格差を縮小するため、民族自治区には公共文化サービス機関の設置を目指している。しかし、現地調査より明らかにしたことは農村部においてアンダイの伝承人は地域の人々を自分の家に招き活動を行っていることが多い。また、事例として取り上げた「草根芸術団体」は練習場所として使用している街道事務室が団員自ら集金して買い取ったのである。したがって、政府よりアンダイの伝承人を認定しているが、アンダイの伝承人が次世代を養成する活動の場についての支援が進められていないのが現状であると考える。

第三節　中華民族多元一体構造の中の少数民族

１．中華思想と中華民族

現在中国の人々が日常生活で広く使っている「文化」という用語は日本から 19 世紀末に伝えられたものであるといえる[20]。古代中国にも「文化」という言葉があった。しかし、それはきわめて政治的、かつ道徳的性格の濃厚なものであって、「文化」の政治性とは、正当な当事者の「天下」を治める手段とされるものであり、「文化」の道徳性とは「天下」を治める最終目的とされるものであった[21]。古代中国の「文化」は文を以て教化するという意味であった。「文」が「規範」や「秩序」であり、「文化」とは「規範」や「秩序」を普及させることであった[22]。「中華文化」は「中原」に入ってきた「四夷」によって作り上げられたゆえ、人間が「文化」（の実施）によって非「中華」から「中華」に変身しうる理論を内包していた[23]。「夷」・「蛮」・「戎」・「狄」だった人間と人間共同体は、後天的学習を通じて「華」の文化を身につけ、「華」になることができると考えられていた[24]。清末以前の中華帝国における文化的普遍性の磁場は、中華文明を未だ十分に受容していない周辺の人々を、中華の民を全く非対称の低次の存在として位置づけるとともに、中華文明をもって教化されるべき対象としてみなしていた[25]。

長期にわたって支配的であったこの強固な文化観が転換したのは、20 世紀に入り「五族共和」という概念が登場してからである[26]。「民族」という用語は、nation の訳語として日本で造語されたものが清末期の中国に伝播される。1902 年に梁啓超が「中華民族」概念を提起し、その後の 1912 年に辛亥革命の指導者・孫文（孫中山）が「五族共和」の構想を主張した。しかし、序章で検討したように「中華」の概念はその時々の政治状況の中で異なる意味合いを持っていた。例えば、伝統としての「中華」は歴代王朝が異民族支配を漢族が正当化させるために作り出した操作概念であった。一方、王柯が指摘するように清朝末期に打ち出された「中華」は、「滅満興漢」のスローガンに表わされたように、清朝を打ち立てた満州族を中国から駆除し、漢族によって単独の民族国家を建設する正統性を訴えるシンボルであった。しかし中華民国が樹立されてからの「中華」は、満州族をはじめ「五族」を団結させた融和のシンボルである。排除のための「中華」と融和のための「中華」は、いずれも国民国家理論に基づく一民族一国家の理念に依拠している点では本質的に同じであったと指摘する[27]。また、抗日戦争中に「民族」とは「種族ではなく、共通の意識をもつもの」という定義が与えられ、中国の範囲内に住むものは、たとえその人間が種族的、言語的、文化的に漢人とは関係なくとも、共通して抗日意識をもつものとして「中華民族」概念が引き出された[28]。こうした政治思想としての中華民族の称揚は、中国革命の進展や欧米列強、日本への対立感情の中で、その意義が補強され、中国国内の諸民族の統一にとって不可欠な役割を獲得していく[29]。中華民族という用法の出現は、近代以降における国家存亡の危機の中で、「中国人」という自己意識を覚醒させる機会を作り出すとともに、操作的な集団概念として実体化を促していくのである[30]。

２．建国後における中華民族と少数民族

1949 年に中国共産党によって中華人民共和国が建国された。建国当初は各民族の平等の社会の実現を掲げ、民族間の団結と互助を実行する政策を採った。しかし、文革には社会主義期における少数民族の問題は否認される。文革収束後、再び民族尊重政策に転じるが、グローバリゼーションの潮流のなかで、中華民族概念が強調されつつある。中華民族という概念を初めて理論化したのは、社会人類学者の費孝通である。費は 1988 年に「中華民族の多元一体構造」論を提起した。中華民族とは 56 の民族を包括した民族実体であり、単なる 56 の民族の総称ではないと指摘する。つまり、中国内の諸民族は二重のアイデンティティもつのである。陳連開は中華民族の含意を次のようにまとめた。中華民族は中国の古今の各民族の総称であり、多くの民族が統一国家を形成していく長期的な歴史の発展におい

て次第に形成されてきた民族の集合体である。多くの民族にはそれぞれに発展した歴史と文化があり、そのことは中華民族の多元性である。長期間、統一国家のなかに共住しその統一と不可分な関係を発展させ、最終的には自覚的に連合して不可分の全体となった。これが中華民族の一体性である[31]。費が「自覚的民族実体」としての中華民族は、近 100 年以来中国が西方列強と対抗していく中で出現したものとし、その基礎となる「自在的民族実体」は数千年の歴史過程で形成されたものであると指摘する[32]。

中国には古今から現在に「中華」を媒介にした国家統合理念が働いている。現在国家は少数民族の人々を中華民族への融合、統一した民族意識を高めるための操作概念として中華民族論を推進し、中華民族多元一体論は中国の民族政策を支える理論として定着している。そして、公式の場でも中国共産党の主導者によって用いられている。2008 年の北京オリンピックが開催され、胡錦涛主席はこのオリンピックは「中華民族百年の夢」と表現した。百年という歴史的な文脈で中華民族が使われ、中華民族は歴史的な連続性をもった実体を指すのである[33]。2012 年に習近平政権が発足後「中国夢」をスローガンに掲げ、最大な中国の夢は「中華民族の偉大な復興」であり、中華民族の全体的利益を体現するものであると主張した。文化面では、民族文化政策においてとりわけ少数民族の文化を「中華民族の優秀文化」として宣伝・称賛し、エスニック・アイデンティティを刺激しながらも、国民文化へと還元しようとしている。つまり「中華」思想を利用しながら民族性を国家と一体化させる政策が展開されているといえる。

一方、本研究の検討を通じて、国家と少数民族は互いの利害関係のもとで民族文化活動が展開されてきたことが明らかになった。もちろん、新中国成立期と文革期には民族文化の固有性は政治的体制に抑圧され、民族文化の伝統的な要素が現代化を阻害するものと見なされ、民族文化が改変されざるを得ない状況もあったが、少数民族は民族文化を残すために伝統を創造的に新しい形態で受け継いでいった。その後、改革開放時期以降では少数民族を支援する一連の政策や取り組みが行われている。特にグローバル時代において、中国は文化強国をめざす国家戦略を推進し、中華文化のソフト・パワーを強化している。少数民族はむしろこうした国家の民族文化政策を利用しながら、独自の民族文化を創造し、民族学校を始めとして文化活動を活発に行うことで民族意識を強化させている。

例えば、図５－３に示すように、中央政府は社会主義先進文化の振興と中華民族の優秀文化を継承するため「中国民間文化芸術之郷の命名」が行われ、アンダイの発祥地であるといわれるクロン旗は「中国アンダイ芸術之郷」、「中国民間芸術之郷」として命名されている。そして、アンダイ文化は国家より無形文化財に認定され、中華民族の優秀文化と

して位置づけられた。これを受け地方政府は国家政策を生かした地域づくり取り組みが行われている。内モンゴル自治区政府の政策のもとで、「中国アンダイ芸術之郷」という地域づくりに向けて観光事業を推進し、アンダイ文化を外に発信し、知名度を高めるとしている。また、アンダイの伝承人の認定、アンダイ博物館の設置やウランムチを中心にアンダイ曲とアンダイ舞踊の動作を統一し、統一させたアンダイ舞踊を地域住民に広げていくとしている。さらに、アンダイ文化を青少年に教えるためダイ体操を民族学校に導入し、文化の継承を図っている。民族文化の担い手によって創作された舞踊、劇、体操の新アンダイは民衆の間に広がりつつある。地域の人々へのアンケート調査では９割の人は「アンダイ芸術の郷の命名は地域住民の人々の自慢になる」と答えている。そして、多くのモンゴル人はアンダイが「美しい」、「モンゴル族のシンボルである」という認識を持ち、アンダイが多様化しつつあるが、その「モンゴルらしさ」が継承することにモンゴル人族としての意識は再生産され続けていくと考えられる。

以上からわかるように、こうした国家意識と民族意識の間には、中国が長い歴史の中で培ってきた「中華」を媒介にした統合の原理が働いていると考えられる。こうした構造を今日的文脈において再解釈し、理論化したのが多元一体構造論であり、多民族国家である中国は、少数民族を「中華民族」への融合を志向し、統一した民族意識を高めようとしている。中国における少数民族は、国家と文化的利害において対峙しながら柔軟に妥協と適応を繰り返し、中華民族という上位概念における国家の共有文化になりながら少数民族固有の文化でもあるという、国民意識と民族意識が異なる位相で両立しているものと考えられる。

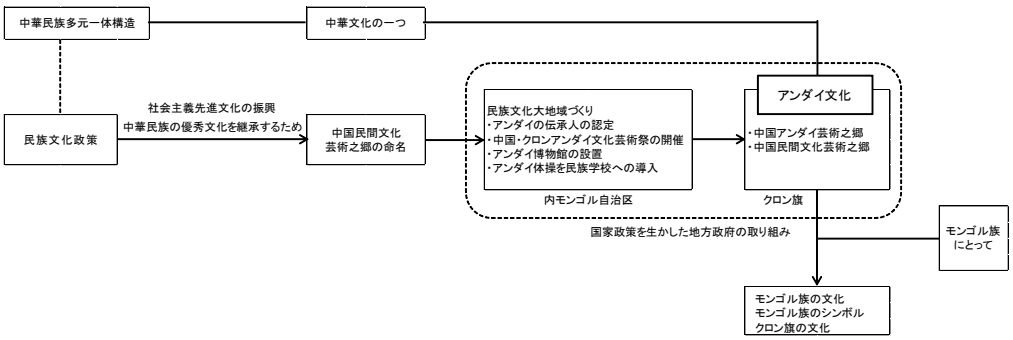

図5－3. 文化振興を通じた中華文化の強調

[1] 毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』東京大学出版会、1998 年、pp. 45－46。
[2] 文化部「1950 年全国文化芸術工作報告と 1951 年計画要点」
[3] 王柯『多民族国家　中国』岩波書店、2009 年、p. 167。
[4] 山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究、2007 年、p. 23。
[5] 同上。
[6] 同上。
[7] 同上、p. 133。
[8] 同上、p. 229。
[9] 同上、 pp. 231。
[10] 山城千秋「ボリビアのオキナワ移住地における琉球芸能の伝承」日本社会教育学会編『アイヌ民族・先住民族教育の現在』日本の社会教育第 58 集、東洋館、2014 年、p. 139。
[11] 山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』前掲書、pp. 228-229。
[12] ①広場のアンダイ、②原生態アンダイ、③激情アンダイ、④アンダイ伝奇、⑤ 舞台アンダイ、⑥アンダイ体操である。
[13] サルラ『アンダイ文化に関する論述』内モンゴル文化出版社、2009 年、p. 259.
[14] バ・スホ「アンダイの起源文化について」『アンダイ文化研究論集』内モンゴル出版社、2009 年、p. 96。
[15] 同上。
[16] 張麗煒「アンダイ舞の特徴および社会的機能に関する考察」『内モンゴル民族大学学報（社会科学版）』第 33 巻、第 5 期、2007 年、p. 23。
[17] 包妮娜「アンダイ舞の伝統形態および伝承」中央民族大学修士論文、2011 年 4 月、p. 43。
[18] 張麗煒「アンダイ舞の特徴および社会的機能に関する考察」前掲論文、p. 23。
[19] 山城千秋「ボリビアのオキナワ移住地における琉球芸能の伝承」前掲論文、p. 139。
[20] 王柯『多民族国家　中国』岩波書店、2009 年、p. 2。
[21] 同上。
[22] 同上、pp2－3。
[23] 同上、p. 12。
[24] 同上。
[25] 瀬川昌久「中国南部におけるエスニック観光と『伝統文化』の再定義」『東北アジア研究』第 3 号、東北大学東北アジア研究センター、1999 年、pp. 86－87。
[26] 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育―「民族平等」理念の展開―』東信堂、2001 年、p. ５。
[27] 王柯『多民族国家　中国』前掲書、p. 46。
[28] 同上、p. 330。
[29] 長谷川清「少数民族教育と中華民族多元一体構造論―雲南・徳広タイ族の学校教育の事例から」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、2012 年、p. 168。
[30] 同上。

[31] 陳連開「中国・華夷・蕃漢・中華・中華民族―一つの内在的関係が発展して認識される過程」（塚田誠之訳）費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年、p. 160。
[32] 費孝通（西澤治彦訳）「中華民族の多元一体構造」費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年、pp. 13－14。
[33] 鵜殿倫次「『中華民族』の概念をめぐって」『国際文化研究科論集』第 10 号、愛知県立大学大学院国際文化研究科、2009 年、p. 3。

終章　本研究のまとめと今後の課題

第１節　本研究のまとめ

１．本研究の要約

本研究は、中国における民族政策の展開を辿りながら、多民族国家を統合する原理として民族文化がいかなる作用を果たしているかを検討することを目的としている。すなわち、民族文化は、一方では国民統合を図る手段として政治的に振興政策がとられながら、他方では固有の民族文化を保存・継承しようとする民族意識が涵養されることで、中国の少数民族は国家意識と民族意識の両方を内在させた存在としてあることを明らかにしようとするものである。以下では本研究で明らかにしたことを記す。

第一章、第二章、第三章の検討を通じて、民族文化活動の展開と実態を国家レベル、地方レベル、民衆レベルの３つの層から分析し、国民統合としての「政治・政策の宣伝」と少数民族としての「民族文化の継承・普及」の実態を明らかにした。

国家レベルにおいては、中華人民共和国の建国から現在までの民族文化政策の展開を各種の政策文書から検討した（第一章)。第一章では中華人民共和国の建国から現在まで民族文化施策の展開を中国の大きな政治的、社会的変動の画期に基づき４期に時期区分し、各時期における民族文化政策の特徴とその背景にある国家の政策的意図を探った。そのうえで、中央政府が公式には民族文化を尊重し、保護、奨励、継承に向けた諸政策をとる一方で、内容については政府の意向が強く反映する形で改変が要請され、自由な文化活動が抑制されるなどの作用が働いたことが明らかになった。これらの分析を通じて、中央による民族文化政策は「国民統合」と「民族文化の継承・普及」という両義性をもって推進されてきたことが分かる。文化面における国民統合は、建国から現在までの各時期において、異なるスローガンと民族政策により推進されたが、そこには一貫して少数民族の国家への求心力を強化することが目指されてきたことを明らかになった。

第二章では中央による民族文化政策の「国民統合」と「民族文化の継承・普及」という両義性は地方レベルにどのように具体化され実施されていったのかについて、内モンゴルのウランムチの活動より明らかにした。ウランムチの活動を検討する際、第一章で設定した時期区分に沿って、４期に時期区分し、各期の活動を明らかにした。建国初期の中国は少数民族地域への統制、改革を進めるために文化面で利用したのはウランムチのような文芸工作団体であり、ウランムチをモデルとして扱った。したがって、ウランムチには「政治・政策の宣伝」と「民族文化の継承・普及」という両義性があった。各期におけるウラ

ンムチの活動の検討を通じて、ウランムチの民族文化活動が国策に深く影響され、その時々において政策に順応しながらも、根底において民族性を保持しつつ文化を基盤とした少数民族としての帰属意識を涵養し続け、民族文化の継承を担ってきた役割も果たしていたことが明らかとなった。

第三章ではモンゴル族のアンダイ文化を取り上げ、アンダイが継承される過程に見られる形態の変容について検討し、変動の激しい中国社会に対応する民衆レベルでの対応について考察した。中央の民族文化政策による政治的統合が進められ、民族文化は常に管理・統制の対象とされていたが文化の担い手はどのように民族性を形成し続けていたのかを明らかにした。

伝統アンダイはもともとシャーマンによる呪術の一種であり、独特の節回しと踊りに特徴があり、紅白の衣装や飾りで華やかに舞う儀式であった。近代化が進む中で祭りの際に踊る文化として定着し、中国建国後も 60 年代頃まで一部で継承されていた。しかし、こうした伝統アンダイは建国後に「封建迷信」として見なされ、徐々にそれを知るものは少なくなっていった。しかしアンダイ芸術家たちは、その文化を中国社会に適用させるために試行錯誤しながら新たな舞台アンダイを創作した。アンダイの創作者はアンダイの宗教的要素を捨て、新時代の新しい出来事を内容に盛り込み、中国社会に適用できる形で「新アンダイ」を生み出していった。中国は建国当初、民族の自決、平等、尊重を掲げ、民族融和政策を指向していた。しかし、アンダイ文化の保存・継承の観点から見れば伝統文化をそのまま容認したわけでなく、社会主義の思想に即して封建批判、迷信打破を指導し、新国家への政治的統合を進めることが意図されていた。一方、モンゴル族にとっても伝統アンダイから宗教的要素を排除し、踊りを中心にした娯楽性の強い文化としてアンダイ文化を再構築しながら、新アンダイとしてアンダイの伝統を受け継ぐ新たな形態として捉えようとしていったことが分かった。

また、改革開放後の文化推進政策のもとでは、行政指導によるアンダイ文化地域づくりを検討し、アンダイの発祥地であるクロン旗におけるアンダイ文化推進の特徴を明らかにした。その特徴としては、第１に、政府、大学、民族学校、芸術団体の協力、連携関係があった。第２に、アンダイの伝承人によるアンダイ文化の普及が行われている。第３に、自発的な民間芸術団体の創出によるアンダイ文化の普及があった。

そのうえで、現代的に再構築された新アンダイについて、地域の人々はどのように考えているかをアンケート調査より明らかにした。アンケート調査では９割の人が「アンダイ芸術郷の命名は地域の人々の自慢になる」と答えている。また、多数のモンゴル人はアン

ダイが「モンゴル文化の重要な一つである」、「モンゴル族の誇り」である認識している傾向があった。しかし、５割の人はアンダイの変容を知らいと答えており、多くのモンゴル人にとってアンダイとは現在の身近な新アンダイであり、変容された伝統アンダイが持っていた意味については十分に伝わっていない現状も指摘できる。

第四章では民族文化の次世代への継承としてアンダイ体操を民族学校に導入する過程を検討し、学校教育を通じてモンゴル族の子どもたちは新たに創作されたアンダイ体操をどのように意識しているのかについて、民族学校の児童・生徒へのアンケート調査をもとに分析した。

アンダイ体操は、伝統アンダイに特徴的なステップや踊りを取り入れた、新アンダイとして創作された体操である。通遼市のクロン旗の民族学校であるモンゴル族小中学校では、ラジオ体操の時間にアンダイ体操を行っており、子どもたちはアンダイ体操を通じてアンダイについて知り、そのステップや踊りから伝統アンダイの踊りをイメージすることが出来るなど、民族文化を学ぶ機会となっている。クロン旗で実施したアンケート調査を分析したところ、多くの児童生徒が「アンダイはモンゴル族の文化であるから」、「モンゴル族の文化を継承してほしい」という意識を持っており、学校でアンダイ体操をすることに肯定的な考えを示していた。第三章でのアンケート調査の結果と合わせれば、新アンダイは子どもたちにおいてもアンダイ文化として受容され、定着していることが明らかとなった。

第五章では、これまでの考察を踏まえて、多民族国家である中国の少数民族は、中国人としての国民意識をどのように獲得し、またモンゴル族としての民族意識といかにして両立させているのかについて、民族文化の観点から明らかにした。

本章ではまず、中央政府から見た民族文化の意味、つまり民族文化の中華文化への包摂について、文化面における国民統合の過程を考察した。新中国成立期から文革期（1949 年～1976 年）における民族文化は、国民統合のために少数民族への融和政策として民族文化が尊重される一方で「政治・政策の宣伝」という役割も鮮明であった。この時期の文化活動の特徴は、民族融和の精神を強調し、同時に文化芸術を通じて「革命精神」を宣伝する教化・宣伝としての役割が「人民に奉仕する」というスローガンの中に浸透していた。改革開放時期（1977 年～2001 年）において、文化は単なる社会主義イデオロギーの教化ではなくなり、文化の多様性が認められるようになり、文化の価値が見いだされていく。地域や民族の固有性が国家により称揚され、帰属意識の強化にも影響を与えた。グローバル時代（2002～現在）に入ると、文化の価値は経済的価値としても着目され、経済建設を中心とした文化の振興が進められ、経済発展という物質的豊かさを通じて少数民族の国家への

帰属意識が強化された。このことは、対外的にも中華文化のソフト・パワーとして強調され、民族文化の中華文化への包摂による中華民族としての帰属意識が強化された。「偉大なる中華民族の復興」というスローガンの下で少数民族を包摂した国民の文化向上によって、現在では新たな形で国民統合が進められようとしている。

次に、国家体制の中で少数民族がどのように文化を継承しているかを考察した。アンダイの事例を通じて明らかにされたことは、民族文化の担い手自身によって創作された舞踊、劇、体操などの新アンダイは、民衆の間に広がり定着しつつある。アンダイの様々な形態の変容はアンダイ文化を普及する一つの手段と捉えられており、これは新しい文化の創造であるともいえる。伝統アンダイと新アンダイの共通点として、踊りの基礎部分にモンゴル族の祈り、祝詞、精神、宗教意識が込められている。伝統アンダイから新アンダイへの変容過程で、社会に柔軟に対応しつつ踊りの基礎部分が継承されていくことに大きな意義があると考える。すなわち、伝統の形を基本に据えながらもその時代に合わせながら、関わった人々の創造性が生かされて継承が行われている。伝統文化は多様化し変容していくが、その「モンゴルらしさ」が継承することにモンゴル族としての民族意識は再生産され続けていくと考えられる。

以上の分析を通じて、中国における少数民族は、国家と文化的利害において対峙しながら柔軟に妥協と適応を繰り返し、中華民族という上位概念における国家の共有文化になりながら少数民族固有の文化でもあるという、国民意識と民族意識が異なる位相で両立しているものと結論づけた。

２．本研究の成果

一つには、民族文化活動の変遷を国家レベル、地方レベル、民衆レベルの三層から構造的に明らかにした点である。国家レベルでは民族文化政策を跡付け、地方レベルでは管制の文化芸術団体の活動（ウランムチ）、民衆レベルでは日常的な文化活動（アンダイの新たな創造）から民族文化活動の変化を時系列に検討した。これらの検討を通じて、中国の民族文化が国家的意図とそれを実体化する地方政府、そして民衆レベルでの意識を明らかにした。

本研究では建国から現在までの民族文化振興政策の特徴を分析し、中央政府が民族文化を保持、振興している一方、背後には文化面における国民統合を推進してきたことを明らかにした。先行研究では、マクロの視点から民族文化政策は中国共産党の指導の下でどのように行われているのかを系統的に論じているが、少数民族の実態状況を踏まえ民族文化

政策の推進の背後にある国家の意図に踏み込んだ分析が欠けている。本研究は国家レベル、地方政府レベル、民衆レベルにおいて、各時期における民族文化活動がどのような特徴を有しているかをまとめ、国民統合としての「政治・政策の宣伝」と少数民族固有の民族意識形成に果たす「民族文化の継承」という両義性が内在していたことを見出した。

二点目は、中国における民族の創出過程を踏まえつつ、国家と少数民族を二項対立の構図でとらえるのではなく、中国の特殊な文脈において多元一体構造に依拠した両義的な帰属意識の醸成に少数民族の文化が位置づいていることを指摘した。中国の少数民族は国家によって公定された民族であり、民族文化そのものに政治性が込められている。先行研究では民族文化がアイデンティティ形成に果たす意義が論じられているが、多くは二項対立のものとして国家と民族を対抗的に位置づけ、反国家的、反政府的な行動を理解しようとする。一方、小川佳万は、少数民族教育を通じた「統制」の視点に着目し、社会主義国家中国における平等問題の特質を明らかにしている。小川は中共の主張する「民族平等」理念を、三つの政策理念「差異」承認、「差異」尊重、「格差」克服に整理し、「この三つの政策理念がそれぞれ拡大していくことが「民族平等」を実体のあるものにしていく過程であり、『民族平等』を実現していくことが、結果的に中共による「統制」をより強固なものにしていく結果になる」と論じている[1]。小川の指摘は、本研究においても改革開放期以降の文化政策において裏付けられる。しかし小川は、中共の「統制」という側面にのみ着目し、それに対峙する少数民族の視点が欠落している。本研究では少数民族が柔軟に妥協と適応を繰り返すプロセスを通じて、異なる位相において国民意識と民族意識が両立していることを示した点で独創的であるといえる。

三点目は、少数民族が文化的伝統を新たな創造的変容を経て継承し、それを受容していることの意義を考察したことである。本研究では、モンゴル族のアンダイを事例にしながら伝統文化は多様化し変容していきながらも、その「モンゴルらしさ」が継承することにモンゴル族としての民族意識が再生産されていくことを示唆した。本研究は日本の社会教育学研究における地域住民による主体的な文化の継承と創造活動に関する研究を参照しつつ、中国の民族文化の継承の在り方を学校教育に限定するのではなく、少数民族による文化の創造活動を積極的に評価した。先行研究では主に民族学校における文化の継承の課題とその要因を明らかにし、アイデンティティの形成と関連しながら文化継承の重要性を指摘している。本研究は学校教育外で行われている、モンゴル族のアンダイの事例を通じて、伝統文化は中国の政治・政策の影響を受けながら多様化し変容していくが、その「モンゴルらしさ」が継承することにモンゴル族としての民族意識は再生産され続けていくと示し

た。また、文化の新たな創造は現代中国社会に生じている民族文化の消失を克服する一つの手段であると捉えた。

第２節　今後の課題

本研究に残された課題として、以下の３点を指摘しておきたい。

第一の課題は、本研究は内モンゴルを事例として取り上げているが、内モンゴルの東部地域である通遼市を対象にしたものである。この地域の特徴は漢族とモンゴル族は多く混住した半農半牧地域である。しかし、遊牧生活を行い、伝統様式を維持しているモンゴル族に対する民族意識や文化継承について触れていない。こうした地域と漢化が進んでいる地域との比較研究が必要であると考える。また、本研究はモンゴル族のみを扱った点である。モンゴル族は中国共産党の支援を受けた内モンゴルが 1947 年には支配下に入るなど、中国で最も早く成立した自治区である。民族独立紛争が多発している他自治区とは異なり、比較的にナショナル・アイデンティティへの抵抗が少ない民族であるともいえる。そのため、新疆ウイグル自治区などほかの民族動向についても検証する必要があろう。

第二の課題は、民族学校での調査において、アンダイ体操のみを取り上げている点である。カリキュラムや教材を含め、多角的に民族学校での教育実践を検証し、子どもたちの民族意識と民族学校での教育の関連をより精緻に分析する必要があろう。また、本研究ではアンケート調査は内モンゴルのクロン旗だけに実施している。そのほかの地域の文化継承の実践取り組みと学校現場での教員の意識への聞き取り調査を行うことができれば民族学校における文化継承の実態をより総合的に検証できると考える。

第三の課題は「中華思想」をどうとらえるかという課題がある。「中華」という観念が何を意味するものかについては、多様な解釈がある。しかし、本研究では「中国」「中華」という観念が造られた経緯と清末期、民国時期の為政者による「中華」と「中華民族」の捉え方ついて詳細に論じていない。古代から現代までの「中華」の意味の連続性や断絶面を系統的に論じる必要があると考える。このように「中華」という概念については多様な解釈があり、本研究が依拠した費孝通による多元一体構造論も批判的に検討する余地が残されていると考える。

---

[1] 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育―「民族平等」理念の展開』、東信堂、2000年、p. 242。

資料編

モンゴル文化に対する地域住民の意識についてアンケート調査

以下の質問は、モンゴル文化について皆さんがどのように考えているのかを知るためのものです。各質問に対して、あてはまる個所に〇をつけてください。（　）や□内には数字や文書をご記入ください。

性別：1）男　　2）女
年齢：（　　）歳
民族：1）モンゴル族　2）漢族　3）その他（　　）族

Ⅰ. あなたの基本状況についてお伺いします。

1. あなたの職業を教えてください。（　　）

2. あなたの出身地を教えてください。
（　　）旗　（　　）鎮　（　　）村

3. あなたの最終学歴を教えてください。
A. 小学校　B. 中学校　C. 高校　D.専門学校・短大
E. 大学　F.その他（　　）

4. あなたは家庭のなかで会話において、どんな言語で話していますか。
A. モンゴル語　B.漢語　C. モンゴル語と漢語　D. その他

Ⅱ. 地域や文化についてお聞きします

5. あなたはクロン鎮にどのぐらい住んでいますか。
A. 生まれてからずっと　B. 10 年以上　C. 10 年未満～5 年
D. 5 年未満～1 年　E. 1 年未満

6. あなたが住む地域は下記のなかでどの伝統行事活動を行っていますか。あてはまる内容にすべて〇を付けてください。
A. 地域ではアンダイ大会を開催したことがあります
B. 地域ではオボー祭りを行ったことがあります
C. 地域ではアンダイ文化祭を行ったことがあります
D. その他（　　）

E. 地域の伝統行事活動について知りません

SQ1. 問 6 で E 以外を選んだ人はお答ください（E を選んだ人は問７へ進んでください）。地域の伝統行事活動について、あなたご自身のお考えをおたずねします。「A=そう思う」、「B=ややそう思う」、「C=どちらとも言えない」、「D=あまりそう思わない」「E=そう思わない」、の中から、あなたのお考えにもっとも近いものをお選びください。

地域の伝統行事活動に参加し、地元の人々と交流するのが楽しい	A	B	C	D	E
伝統行事活動は観光客を誘致するのに役に立つ	A	B	C	D	E
伝統行事活動を行うことを通じて、地域の人々に モンゴル文化の良さを伝えられる	A	B	C	D	E
地域のなかにもっと伝統行事活動を行うべきだ	A	B	C	D	E

7. あなたが「地域で活発な活動をしている」と思う芸術団体を教えてくだい。

A. 草の根芸術団体　　B. ウランムチ芸術団体

C. その他（　　）　D. わからない

8. クロン旗は「アンダイ文化の郷」として命名されたことについてご存知ですか。

A. 知っている　　B. 知らない → 問９へ進んでください

↓

SQ1. 問８で A を選んだ人はお答ください。クロン旗は「アンダイ文化の郷」と指定されて以来、地域にどのような変化がありましたか。下記、「A=そう思う」、「B=ややそう思う」、「C=どちらとも言えない」「D=あまりそう思わない」「E=そう思わない」の中から、あなたのお考えにもっとも近いものをお選びください。

アンダイ文化郷の指定は表層的なスローガンだと思う	A	B	C	D	E
アンダイ文化の郷の命名により地域の活性化が進んでいる	A	B	C	D	E
アンダイ文化の普及を推進した	A	B	C	D	E
アンダイ踊りを踊る人は増えた	A	B	C	D	E
モンゴル族の伝統文化をもっと意識するようになった	A	B	C	D	E
アンダイ文化の郷の命名は地域の人々の自慢になる	A	B	C	D	E
消滅危機になったアンダイ文化が復活したと思う	A	B	C	D	E

9. あなたは日常生活のなかで、次のようなことがどのくらいあてはまりますか。「A=そうです」、「B=ややそう思います/たまにやっています」、「C=そうではありません」の中から、あなたのお考えにもっとも近いものをお選びください。

私はボの踊りを見たことがあります	A		C
私は小さい時からアンダイの踊りを知っています	A		C
私はテレビや祭りでアンダイの踊りを見るのが好きです	A	B	C
機会があれば私もアンダイ体操をやりたいです	A	B	C
私はリラックスするため広場にアンダイ体操をやっています	A	B	C

10. 現代のアンダイは昔のボの踊りから変わったことについてお聞きします。アンダイ舞踊はシャマニズム文化から変容したことを知っていますか。

A. 知っています　　B. 知らないです → 問 11 へ進んでください

↓

SQ1. 問 10 で A を選んだ人はお答ください。あなたは現在のアンダイ文化（アンダイ舞踊、アンダイ体操）の変容をどのように見ていますか。「A=そう思う」、「B=そう思わない」、「C=わからない」の中から、あなたの考えのもっとも近いものを選びください。「その他」の一覧にアンダイの変化のついての自分の考えを書いてください。

アンダイは昔のシャマニズム文化から現在の芸術のアンダイに変化し、アンダイ舞踊は美しくなっていると思います	A	B	C
現在のアンダイ体操はアンダイ文化として見ています	A	B	C
アンダイは時代の変化に適合し創られています。アンダイの変化を肯定的に見ます	A	B	C
アンダイのさまざまな変化では伝統アンダイの本質部分が失われていると思います。アンダイの変化を否定的に見ます	A	B	C
その他			

11. あなたはボの踊りから現代風になったアンダイ（アンダイ舞踊、劇、体操）が好きですか。

A. 好きである　　B. 好きではない　　C. わからない

12. あなたの身近にあるモンゴル文化はなんですか。あてはまる項目にすべて○を付けてください。

A. モンゴル語　　B. モンゴル歌/ダンス　　C. 祭り

D. 相撲　　E. 競馬　　F. モンゴル歴史
G. その他（　　）

Ⅲ. 民族意識についてお聞きします

下記の問題より、漢族の回答者は問 15 と 16 だけをお答えてください。モンゴル族の回答者は全部お答えください。

13．あなた自身はモンゴル族の一人であることを自覚していますか。
A．自覚しています　　B. 自覚していない　　C. 関心がない

↓

SQ1. A を選んだ人はお答ください。（A を選らばなかった人は問 14 へ進んでください）あなたが、モンゴル族であることを最も強く意識するのはどのようなときですか。以下の項目から一つだけ教えてください。
A. テレビでモンゴルの歌や踊りを聞いたり、見たりするとき
B. モンゴル族の祭りや儀式に参加するとき
C. モンゴルの歴史や物語を聞いたとき
D. ほかの人にモンゴル人らしいといわれるとき
E. ほかの民族の人と接触するとき
F. その他（　　）

14. あなたはモンゴル人であることで困ったことがありますか。
A. ある　　B. ない → 問 15 へ進んでください

↓

問 14 で A を選んだ人はお答えください。あなたはモンゴル人であることで困ったと思うことを教えてください。以下の項目からあてはまるものをすべて教えてください。
A. 中国語で話すのが苦手で、日常生活のなか漢族との交流が難しい
B. 公共機関あるいは病院にほとんど中国語を使用しているため、気軽に声をかけない。
C. 子どもを民族学校に通わせているが、子どもの将来の就職に心配である
D. 子どもにモンゴル語、中国語、英語の三言語を教えるのが子どもに負担を掛けている。
E. その他（　　）

15. あなたは日常生活のなかで、次のようなことがどのくらいあてはまりますか。「A=そう思う」、「B=ややそう思う」、「C=どちらともいえない」「D=ややそうおもう」、「E=そう思わない」の中から、あなたのお考えにもっとも近いものをお選びください。

モンゴル人としてあなたはどのように考えていますか（モンゴル族の回答者はお答えください）					
モンゴル族としての伝統文化を守るべきだ	A	B	C	D	E
モンゴル族の一員であることに誇りをもつべきだ	A	B	C	D	E
モンゴル人であることが好きである	A	B	C	D	E
モンゴル族はほかの民族と違うと思う	A	B	C	D	E
民族学校ではもっとモンゴル族の歴史や伝統文化を教えるべきだ	A	B	C	D	E
中国人としてあなたはどのように考えていますか					
中国人としての中華文化を学び守るべきだ	A	B	C	D	E
中国人の一員であることに誇りをもつべきだ	A	B	C	D	E
中国人であることが好きである	A	B	C	D	E
中国の各民族は大家族である	A	B	C	D	E
民族学校ではもっと各民族の歴史伝統文化を教えるべきだ	A	B	C	D	E

16.（自由記述）あなたにとってアンダイはどのような存在ですか。アンダイ文化についてあなたが考えていることを自由にお書きください。

モンゴル文化に対する意識についてのアンケート

以下の質問は、モンゴル文化について皆さんがどのように考えているのかを知るためのものです。各質問に対して、あてはまる個所に〇をつけてください。（　）や□内には数字や文書をご記入ください。

学年:　A. 5年　B. 6年

性別:　A. 男　B. 女

Ⅰ．あなたの家庭の基本状況についてお聞きます。

1. あなたは何人家族ですか（　　）人

2. 親の職業を教えてください。

1）父親（　　）　2）母親（　　）

3. あなたの出身地を教えてください。

（　　）旗　（　　）鎮　（　　）村

Ⅱ．あなたの学校での生活についてお聞きします。

4. あなたは、学校生活を楽しんでいますか。

A. たいへん楽しい　B. だいたい楽しい　C. あまり楽しくない
D. ぜんぜん楽しくない　E. わからない

5. あなたの得意な教科はなんですか。

A. 算数　B. モンゴル語　C. 漢語文　D. 英語
D. 体育　E. 社会　F. 道徳　G. 音楽
H. 得意な教科はない

6. あなたは学校での勉強や成績に困ったときにまず誰に相談しますか。

A. 家族　B. 学校の先生　C. 塾の先生　D. 友たち
E. その他（　　）

7. あなたは新しく友人になった人に自分を紹介するとき、もっとも強調したいことはなんですか。以下の項目のなかから一つ選んでください。

A. 趣味/スポーツ　B. 得意な教科　C. 出身地　D. 家族
E. 民族　F. 自分の長所と弱点　I. その他（　　）

Ⅲ. あなたの趣味についてお聞きします。

8. あなたの趣味はなんですか。以下の項目からあてはまるものすべて○をつけてください。最もあてはまる 1 項目について◎をつけてください。

A. テレビを見ること　B. スポーツをすること　C. 音楽を聞くこと
D. パソコンでゲームをすること　E. その他（　　）

SQ1. 問 8 で A を選んだ人はお答えください。（A を選んでいなかった人は SQ2 へ進んでください）あなたが、もっとも関心を持っているテレビ番組の内容はなんですか。下記から該当するものを一つ選び□に✔を入れてください。

モンゴル語放送	□ ニュース番組　□スポーツ番組　□娯楽番組 □ 映画番組　□アニメ番組　□その他（　　）
中国語放送	□ ニュース番組　□スポーツ番組　□娯楽番組 映画番組　□アニメ番組　□その他（　　）

SQ2. 問 8 で B を選んだ人はお答えください。（B を選んでいなかった人は SQ1 あるいは SQ3 へ進んでください）あなたが、もっとも好きなスポーツはなんですか。

a. サッカー　b. バレーボール　c. レスリング（相撲）
d. バドミントン　e. 卓球　f. その他（　　）

SQ3. 問 8 で C を選んだ人はお答えください。あなたが、もっとも好きな音楽はなんですか。

a. 現代流行歌（漢族）　b. 現代流行歌（モンゴル族）
c. 伝統モンゴル歌　d. クラシック　e. その他（　　）

9. あなたは勉強以外の習い事をしていますか。どのような習い事ですか。あてはまるものすべてに○を付けてください。

A. モンゴルダンス/歌　B. 馬頭琴　C. ピアノ　D. バイオリン
E. 水泳　F. 書道　G. その他（　　）　H. 習っていない

SQ1. 問 9 で H 以外を選んだ人はお答えください。（H を選んだ人は問 10 へ進んでくださ

い）あなたはどうしてこの習い事をするようになりましたか。

a．親に言われたから　　b．先生に薦められたから

c．自分が好きですから　　d．ほかの友達がしているから

e．その他（　　）

SQ2．問 9 で○をつけた習い事をどこで習っていますか。一つ一つン習い事について場所を教えてください。下記の場所の（　　）にその習っているものを記入してください。

a．少年宮（　　）　　b．文化館（　　）

c．家（　　）　　d．学校（　　）

e．その他（　　）

ここからまた全員お答えてください。

Ⅳ．あなたが住んでいる地域についてお聞きします。

10．あなたはこの地域にどのぐらい住んでいますか。

A．生まれてからずっと　　B．5 年以上　　C．3～5 年未満

D．1～3 年未満　　E．1 年未満

11．クロン旗のアンダイ文化は有名ですが、クロン旗は「アンダイ文化の郷」であると言われていることをご存知ですか。

A．知っています　　B．知りません

SQ1．問 11 で A を選んだ人はお答えください。（B を選んだ人は問 12 へ進んでください）あなたはクロン旗が「アンダイ文化の郷」であることを誰に教わりましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

a．家族に教えてもらいました　　b．学校の先生に教えてもらいました

c．テレビ・ラジオ放送でわかりました　　d．地域のお祭りに参加してわかりました

e．その他（　　）

12．あなたが住む地域は下記のなかでどの伝統行事活動を行っていますか。あてはまる内容にすべて○を付けてください。

A．地域では毎年ナーダム大会を開いています

B．地域では毎年オボー祭りを行っています

C．地域では毎年アンダイ文化祭を行っています

D．その他（　　）

E．地域の伝統行事活動について知りません

Ⅴ．アンダイ体操についてお聞きます。

13．あなたはアンダイの物語についてご存知ですか。

A．知っています　　B．知りません

SQ1．A を選んだ人はお答ください。(A を選んでいなかった人は問 14 へ進んでください)
アンダイ物語について誰に教えてもらいましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

a．家族に教えてもらいました　　b．学校の先生に教えてもらいました

c.テレビ･ラジオ放送でわかりました　　e.その他(　　)

14．あなたはアンダイ体操とラジオ体操のどちらが好きですか。

A．アンダイ体操　　B．ラジオ体操　　C．どちらとも言えない

SQ1．問 14 で A を選んだ人はお答えください。(B を選んだ人は SQ2 へ進んでください)
あなたはラジオ体操よりアンダイ体操が好きな理由を教えてください。あてはまるものセすべてに○をつけてください。

a．アンダイ体操はラジオ体操より美しいから

b．アンダイ体操は体によいから

c．アンダイはモンゴル族の文化であるから

c．その他（　　）

SQ2．問 14 で B を選んだ人はお答えください。あなたはアンダイ体操よりラジオ体操が好きですか。

a．ラジオ体操は全国的に行われているから

b．ラジオ体操は体に良いから

c．ラジオ体操はアンダイ体操より動作が簡単であるから

d．その他（　　）

15．アンダイ体操をこれから学校で教えてほしいですか。その理由について教えてください。

A．これからも教えてほしいです（理由：　　）

B．教えてほしくないです（理由：　　）

C．どちらとも言えない

Ⅵ．モンゴル民族や文化についてお聞きします

16．　あなた自身はモンゴル族の一人であることを自覚していますか。

A．自覚しています　　B. 自覚していない　　C. 関心がない

SQ1. A を選んだ人はお答ください。（A を選らなかった人は問 17 へ進んでください）あなたが、モンゴル族であることを最も強く意識するのはどのようなときですか。以下の項目から一つだけ教えてください。

a. テレビでモンゴルの歌や踊りを聞いたり、見たりするとき
b. モンゴル族の祭りや儀式に参加するとき
c. モンゴルの歴史や物語を習ったとき
d. ほかの人にモンゴル人らしいといわれるとき
e. ほかの民族の人と接触するとき
f. その他（　　）

17. あなたは、家族内では、どの言語でコミュニケーションを行っていますか。

A．漢語　　B．モンゴル語　　C．漢語とモンゴル語　　D．その他（　　）

18. あなたの身近にあるモンゴル文化はなんですか。あてはまる項目にすべて○を付けてください。

A. 言語　　B. モンゴル歌/ダンス　　C. 祭り
D. 相撲　　E. 競馬　　F. モンゴルの歴史
J. その他（　　）

19. あなたは日常生活のなかで、次のようなことがどのくらいあてはまりますか。次の項目から一番近いものを選んでください。

	そうです	ややそうです	どちらともいえない	あまりそうおもわない	そうおもわない
私は漢語よりモンゴル語で話すのが好きです	A	B	C	D	E

親にいつもモンゴル語で話すように言われています	A	B	C	D	E
私はモンゴル人の友達より漢族の友達がほしいです	A	B	C	D	E
私はモンゴル歌やダンスが好きです	A	B	C	D	E
私はモンゴル族の儀礼について親に教えられています	A	B	C	D	E
私はモンゴル人の儀礼についてあまりわからないです	A	B	C	D	E
私はモンゴル族の伝統文化をもっと保護すべきだ思います	A	B	C	D	E
私はモンゴル族がほかの民族と違うと思います	A	B	C	D	E
私はモンゴル人であることが好きです	A	B	C	D	E
私はモンゴル人としての誇りをもっています	A	B	C	D	E

20.（自由記述）モンゴル文化についてあなたが考えていることを自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

主要参考文献

（日本語）

渥美一弥「文化とアイデンティティ―先住民族は消滅するのか?―」奥野克巳・花淵馨也共編『文化人類学のレッスン　フィールドからの出発』学陽書房、2011 年。

井谷泰彦「沖縄のモーアシビ（毛遊び）に見る「習俗としての教育」―その教育的役割と機能―」『社会教育学研究』第 50 巻第 1 号、日本社会教育学会、2014 年。

煎本孝「モンゴル・シャマニズムの文化人類学的分析―内モンゴル，ホルチン・ボのシャマニズムにおける歴史意識と宇宙論的秩序」『東北アジア諸民族の文化動態』北海道大学図書刊行会、2002 年。

上野稔弘「民族区域自治改正に見る中国民族法制の現状」『東北アジア研究』第 6 号、東北大学東北アジア研究センター、2001 年。

上野昌之『アイヌ民族の言語復興と歴史教育の研究―教育から考える先住民族とエンパワーメント―』風間書房、2014 年。

ウルゲン『中国におけるモンゴル民族の学校教育』ミネルヴァ書房、2015 年。

王柯『多民族国家　中国』岩波書店、2009 年。

王柯『20 世紀の中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、2006 年。

太田好信『トランスポジションの思想　文化人類学の再想像』世界思想社、2010 年。

小川佳万『社会主義中国における少数民族教育―「民族平等」理念の展開』東信堂、2001 年。

加々美光行「中国の民族政策をめぐる新思考：『族群』『自治と共治』―内蒙古自治区を中心に―」『中国 21』(Vol.19) 愛知大学現代中国学会、2004 年。

加々美光行『中国の民族問題―危機の本質』岩波書店、2008 年。

栗原悟「社会変動の中の少数民族―少数民族に見る伝統と近代」野村浩一ほか『岩波講座現代中国第３巻　静かな社会変動』岩波書店、1989 年。

楠山研『現代中国初中等教育の多様化と制度改革』東信堂、2010 年。

崔淑芬『中国少数民族の文化と教育』中国書店、2012 年。

佐々木信彰「多民族国家中国と民族区域自治区政策」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想、2001 年。

サラントナラ「モンゴル人家庭における文化継承および変容―内モンゴル自治区のオルドス地域を中心に―」新保敦子編『中国エスニック・マイノリティの家族―変容と文化継承

をめぐって』国際書院、2014 年。
澁谷美紀『民俗芸能の伝承活動と地域生活』農山漁村文化協会、2006 年。
周星「漢族とその経済生活」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想社、2001 年。
周星「費孝通氏の民族理論」『文明 21』第 15 号、国際コミュニケーション学会、2005 年。
新保敦子「近代学校の普及と少数民族家庭における文化の継承/断絶―モンゴル族および回族の女性教師を中心として」新保敦子編『中国エスニック・マイノリティの家族―変容と文化継承をめぐって』国際書院、2014 年。
シンジルト『民族の語りの文法―中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育―』風響社、2003 年。
鈴木正崇「創られた民族―中国の少数民族と国家形成」飯島茂編『せめぎあう『民族』と国家　人類学的視点から』アカデミア出版会、1993 年。
瀬川昌久『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、2012 年。
瀬川昌久「中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義」『東北アジア研究』第３号、1999 年。
陳連開「中国・華夷・蕃漢・中華・中華民族―一つの内在的関係が発展して認識される過程」（塚田誠之訳）費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年。
西澤治彦「解題―費孝通の「中華民族の多元一体構造」をめぐって」費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年。
野元弘幸「アイヌ民族教育制度の確立と社会教育の課題」日本社会教育学会 60 周年記念出版部会編『希望への社会教育　3.11 後社会のために』東洋館、2013 年。
白薩日娜『中国の識別された民族のアイデンティティに関する社会学的研究―東北地方の斡爾民族を事例に―』島根県立大学大学院北東アジア研究科博士論文（社会学）、2013 年。
ハスゲレル『中国モンゴル民族教育の変容―バイリンガル教育と英語教育の導入をめぐって』現代図書、2016 年。
費孝通「エスニシティの探究―中国の民族に関する私の研究と見解」（塚田誠之訳）費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年。
費孝通「中華民族の多元一体構造」費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年。
松本ますみ『中国民族政策の研究―清末から 1945 年までの「民族論」を中心に―』多賀出版、1999 年。
毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』東京大学出版会、1998 年。

毛里和子「中国―国家統合と『上からの近代化』の中のマイノリティ」江口朴郎編『現代世界と民族』1987 年。
山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究所、2007 年。
山城千秋「ボリビアのオキナワ移住地における琉球芸能の伝承」日本社会教育学会年報編集委員会編『アイヌ民族・先住民族教育の現在』日本の社会教育第 58 集、東洋館、2014 年
横山廣子「少数民族の政治とディスコース」青木保ほか編『民族の生成と論理』岩波書店、1997 年。
劉正愛『民族生成の歴史人類学―満州・旗人・満族』風響社、2006 年。
リンチン『現代中国の民族政策と民族問題―辺境としての内モンゴル』集広舎、2015 年。
渡辺洋子「伝統芸能という「共有知」とローカル・アイデンティティの可能性―沖縄県島尻郡南風原町の民俗芸能復活の取り組みを手がかりに―」日本社会教育学会編『＜ローカルな知＞の可能性　もうひとつの生涯学習を求めて』日本の社会教育第 52 集、東洋館、2008 年。

（中国語）
白翠英「文化変遷中的安代車」『安代文化研究論集』内モンゴル人民出版社、2009 年。
白翠英・刑源・福宝琳・王笑『安代的起源及其発展』1983 年。
巴・蘇和主編『安代之郷―クロン旗歴史文化概要』内モンゴル文化出版社、2010 年。
包妮娜「安代舞的伝統形態及伝承」中央民族大学修士論文、2011 年 4 月。
喬鹿「就『安代伝奇』談創建科爾沁蒙古劇的探索」『安代文化研究論集』内モンゴル人民出版社、2009 年。
達・阿拉坦巴干・朱嘉慶主編『烏蘭牧騎讃』内蒙古自治区烏蘭牧騎学会、2007 年。
『当代中国的民族工作』編集部『当代中国民族工作大事記(1949～1988)』民族出版社、1989 年。
『当代中国的民族工作』（上）当代中国出版社、1993 年。
耿学剛・譚宏宇「蒙古族安代美学特性探略」『安代文化研究論集』内モンゴル人民出版社、2009 年
国家民族事務委員会文化宣伝司・中国社会科学院文化研究中心編『中国少数民族文化発展報告（2008)』民族出版社、2009 年。
国家民族事務委員会・中共中央文献研究室編『新時期民族工作文献選編』中央文献出版社、1990 年。

好必斯「西部大開発と草原音楽文化的保護和伝承」『人民音楽』第 6 期、2003 年。
黄光学・施聯朱『民族識別―56 民族の来歴』民族出版社、2005 年。
李珊『新中国文化政策与少数民族音楽舞踊芸術的発展』西南交通大学出版社、2011 年。
李資源等『中国共産党少数民族文化建設研究』人民出版社、2011 年。
劉源泉『中国共産党少数民族文化政策研究』人民出版社、2014 年。
馬戎『民族社会学―社会学的族群関係研究』北京大学出版社、2004 年。
内蒙古人民出版社編『烏蘭牧騎（一)』内蒙古人民出版社、1965 年。
内蒙古自治区文化庁編『烏蘭牧騎之路―ウランムチ結成四十周年記念（1957～1997)』内蒙古人民出版社、1997 年。
喬玉亮主編『跨人新世紀的輝煌―内蒙古芸術研究所研究成果選 2000－2009－』内蒙古大学出版社、2009 年。
宋蜀華・陳克進編『中国民族概論』中央民族大学出版社、2001 年。
烏日古木勒「安代伝説と治療儀式」『安代文化研究論集』内蒙古人民出版社、2009 年。
徐万邦・祁慶富『中国少数民族文化通論』中央民族大学出版社、1996 年。
張麗煒「論安代舞的特徴及社会機能」『内モンゴル民族大学学報（社会科学版)』第 33 巻、第５期、2007 年。
張麗漳「民族健身新項目　安代健身操的創編与価値」『内モンゴル民族大学学報（自然科学版)』第 23 巻第２期、2008 年３月。
『中国大百科全書・民族巻』中国大百科全書出版社、1986 年
周明甫・金星華編『中国少数民族文化簡論』民族出版社、2006 年

（モンゴル語〔日本語訳〕)
[illegible] · [illegible] · [illegible]《[illegible]》· [illegible] ·1984 [illegible] ‥（奇克其等編著『アンダイ』内モンゴル人民出版社、1984 年)
[illegible]《[illegible]》· [illegible] ·2012 [illegible] ‥（サルラ主編『クロンアンダイ史論』内モンゴル文化出版社、2012 年)
[illegible]《[illegible]》· [illegible] · 2009 [illegible] ‥（サルラ『アンダイ文化に関する論述』内モンゴル文化出版社、2009 年)
[illegible] · [illegible]《[illegible]（[illegible]）》· [illegible] · [illegible] · 2010 [illegible] ‥（哈達奇・剛主編『安代全書 専門研究巻（上下)』内蒙古出版集団・内蒙古少年児童出社、2010 年)
[illegible] · [illegible]《[illegible]》· [illegible] · [illegible] ·

2011ᠣᠨᠳᠠ᠂᠂（哈達奇・剛主編『安代全書　総論巻』内蒙古出版集団・内蒙古少年児童出社、2011年）

李那木拉・普日古拉《蒙古族学校开设蒙古族历史课程的问题及解决方法》内蒙古师范大学硕士学位论文，2014ᠣᠨᠳᠠ᠂᠂（李那木拉「モンゴル語で教授している中学校にモンゴル族歴史課程の開設において存在する問題及び解決方法」内モンゴル師範大学修士論文、2014年）